

アジア現代女性史

Contemporary Women's History in Asia

2023 第16号
アジア現代女性史研究会



『アジア現代女性史』第 16 号の刊行に際して

2004 年にアジア現代女性史研究会をたちあげてから今年で早くも 19 年が経ち、会誌『アジア現代女性史』は第 16 号を刊行することになった。

本号は、モンゴル女性史家 E.チメッドツェレンに関する本会の今岡良子による論考、朝鮮独立運動家の社会主義フェミニスト丁七星に関する韓国の陳善榮による論文、日本軍性奴隷制度の中国人被害者である万愛花に対する陳麗菲の追悼文などを収録するとともに、昨年 2022 年に他界したネリア・サンチョを記念して特集を組んでいる。

2004 年 8 月、誕生したばかりの研究会が最初に訪ねた外国がフィリピンだった。旅の目的は、大阪外国語大学（現、大阪大学外国語学部）での任期を終えてフィリピン大学に戻っていたジョイ・バリオスに協力を得てフィリピン女性史をめぐる二国間の共同研究プロジェクトを始めること、フィリピンの女性運動にふれる良い機会として女性団体 GABRIELA が主催するフィリピン国際女性連帯集会 WISAP（Women's International Solidarity Affair in the Philippines）に参加することであった。約半年後の 2005 年 1 月にはフィリピン大学で研究会を開催し、その成果は『アジア現代女性史』創刊号（2005 年）に一端を載せた。以後、これまでに『アジア現代女性史』では折々にフィリピンに注目し、ジュディ・タギワロによるフィリピン女性運動史に関する研究ノートや在日フィリピン人のロサナ・タピル、アガリン・サラ長瀬、ブッチ・ポンガスからの寄稿、フィリピン「慰安婦」問題の現在に関する熊野沙織の旅行記などを掲載した。研究会にとってフィリピン女性史は熱烈な関心の対象であり続けている。

が、2022 年には、再会を熱望していたフィリピン女性たちの訃報が相次いで届いた。WISAP2004 の際に BAYAN（新民族主義者同盟）の代表として演壇に立ったリタ・パウアーが他界したのは 2 月だった。彼女が、フィリピン人元「慰安婦」であるロラ・ロサの本を出す計画についても激励してくれたことは忘れられない（その後、本は『ある日本軍「慰安婦」の回想－フィリピンの現代史を生きて』と題して 1995 年に出版）。その半年後の 9 月、「慰安婦」支援団体リラ・ピリピーナの活動家だったリチェルダ・エクストレマドウラとリラ・ピリピーナの創設者でもあるネリア・サンチョの訃報が届いた。彼女たちに聞いておきたかったことや確かめておきたいことがたくさんあった。そのチャンスがもう失われてしまったという現実に関してもまだ呆然としている。

感謝と哀悼をこめて、本号にはネリア・サンチョとロラ・ロサを招いて京都で開催した『ある日本軍「慰安婦」の回想』出版記念の集いの小冊子を復刻するとともに、フィリピン各界から公表されたネリア・サンチョ追悼記事の翻訳を収録した。

2023 年 9 月

藤目ゆき

目次



第16号の刊行に際して 藤目ゆき	1
論文・エッセイ	7
E.チメッドツエレンがD.パグマドラムを記述した意義 (今岡良子)	8
椿油に濡れた髪をすっと梳き放つて -社会主義、女性主義、地域主義、 革命家 丁七星の二重叙事研究- (陳善榮)(訳:鄭享玉)	32
不屈の女性 万愛花大姉 (陳麗菲)(訳:李青凌).....	56
追悼 ネリア・サンチョさん	65
写真.....	66
各界からの追悼文と報道記事 (訳:池田高巖、藤目ゆき)	67
写真.....	90
ある日本軍「慰安婦」の回想 出版記念の集い・京都の記録(復刻)	93
筆者・翻訳者紹介	118
カバー写真解説.....	119

アジア現代女性史
Contemporary Women's History in Asia

アジア現代女性史研究会

CAWA (Association for the Study of Contemporary Asian Women's history and Gender)

論文・エッセイ

E. チメッドツェレンがD. パグマドラムを記述した意義

今岡良子

写真1 D.パグマドラム



1905～07年、現在のウランバートル市マイマー・ホトに生まれた。1920年代に西欧に留学した時に撮影した写真。モンゴル女性連盟の最初の代表、国会議員、憲法草案委員
出典：<https://sonin.mn/news/culture/123359>
「1924年：モンゴル領事館女性連盟を設立した歴史」2021年8月2日付け

写真2 E.チメッドツェレン



1924年ドルノド県に生まれた。
1960年代に北京大学に留学する頃の
写真
モンゴル国立大学歴史学教授。女性
史家。

はじめに

写真1の薄いワンピースを着て、ハイヒールを履き、足元で控えめに足を組んでいる女性は、D.パグマドラムと言う。これは1920年代の写真である。モンゴル人の多くは、彼女のことを「偉大なる国民の文豪D.ナツァグドルジがロシア人のニーナ・チェストカワと結婚する前に結婚していた妻」として認識している。筆者は、文豪の最初の妻というよりも、写真2のE.チメッドツェレンの著書『モンゴル人民共和国における女性を社会的抑圧から解放した歴史的経験』（以下『女性解放史』と略す）に書かれた、「モンゴル女性連

盟」の初代代表として認識していた。その本の「第6章 モンゴル女性組織、第1節 革命初期と女性組織」の冒頭を資料1として次に示す。

資料1

モンゴルの労働女性の啓蒙、彼女達の政治・社会活動への参加に女性組織が重要な役割を果たした。

1924年3月8日に行われたモンゴル人民革命党の中央委員会の会議で女性組織を設立する決定を出し、その規則を作成することを中央委員会の宣伝部に委任した。

1924年3月19日に小学校の教師であるハスナヴチ、バダムリンチン、D.パグマドラムらの女性が会議を開き、モンゴル人民革命党の中央委員会所属の女性部を設立し、それに人民革命党の宣伝部所属の「女性教育課」¹と名づけた。女性啓蒙・教育課の幹部として課長、事務局長、指導員をそれぞれ1人、宣伝員2人を任命し、それ以外に特別理事会を設立した。女性教育課長にD.パグマドラム氏（作家D.ナツァグドルジの最初の妻、E.Ch）が任命され、特別理事会の会員にハスナヴチらの女性たちが選ばれた。モンゴルの女性組織の発起人で初代の女性教育課長D.パグマドラムはモンゴルの女性運動の歴史に重要な位置を占める。

出典：E.チメッドツェレン（1973）『女性解放史』P.224

このように「モンゴルの女性組織の発起人で初代の課長D.パグマドラムはモンゴルの女性運動の歴史に重要な位置を占める。」とはっきり書かれているにも関わらず、一般の人は「偉大なる国民の文豪D.ナツァグドルジの最初の妻」という認識をしている。それは、なぜだろうか？本論では、その理由を解き明かしながら、E.チメッドツェレンがD.パグマドラムのことを書いた意義を考察したい。

（1）D.ナツァグドルジから考えてみる

D.ナツァグドルジの作品については、筆者が大阪外国語大学のモンゴル語学科の学生の頃、モンゴル文学の授業で、彼の代表作「わが故郷」を習ったことがある。「モンゴルの近代文学の父」が作った、国民の誰もが愛してやまない詩であり、モンゴル語としても美しいから、と暗唱するよう指導された。しかし、その時、D.ナツァグドルジがどんな人生を送った人であったか、ということを知った記憶がない。

筆者の夫は1970年代にモンゴル人民共和国で生まれ、そこで教育を受け、D.ナツァグドルジの「わが故郷」だけではなく、多くの詩を暗唱するよう指導されたと言う。しかし、D.ナツァグドルジは近代文学の父、モンゴルの偉大なる作家であること以外のことを習っていない、と言う。こういう人は他にも多い。

社会主義時代のモンゴルではD.ナツァグドルジの研究は、作品論が主流であったが、日本では岡田和行、芝山豊²が、文学者の表現の自由や人権の視点から当時のモンゴルでは展開できない分野を切り開いてきた。その岡田が1983年に書いた論文³には、D.パグマドラ

¹ のちのモンゴル女性連盟のこと

² 芝山豊（1994）「ナツァグドルジン・アーナンダシュリーと会って」「モンゴル研究」16号、同著者（2005）「D.ナツァグドルジ「黒い岩」をめぐる」「モンゴル研究」22号

³ 岡田和行（1983）「ダシドルジーン・ナツァグドルジと「わが故郷」」、「東京外国語大学

ムがどのような人物か知る手立てがほとんどない、と述べられている。それを資料2として引用する。

資料2

次に、帰国後のナツアグドルジの身に起こった「事件」をいくつかあげてみたい。まず彼は、帰国直後にパグマドラムと離婚し、ロシア婦人ニーナ・ニコラーエヴァナ・チャスチャーコーワと再婚し、アナンダ・シリーという名の女兒を設ける。パグマドラムの場合もそうであるが、それ以上に、このニーナという女性がどのような人物なのか知る手立てはほとんどない。このような彼の個人生活に関わる問題を解明するのは、現状では絶望的と言わざるを得ない。

出典：岡田和行（1983）「ダシドルジーン・ナツアグドルジと「わが故郷」」

岡田は、続けて、ロシア人の D.ナツアグドルジ研究者であり、翻訳者である K.N.ヤツコヴススカヤ⁴の言葉を引用し、次のように述べている。

資料3

「作家の伝記記述者は、ナツアグドルジの個人生活のこのような面をほとんど開示してくれないので、（筆者注釈：ナツアグドルジとパグマドラムが）別れた正確な期日を述べるのは困難である」という嘆きももつともである。

出典：岡田和行（1983）「ダシドルジーン・ナツアグドルジと「わが故郷」」

この資料より、少なくとも1983年の時点で、日本とロシアの D.ナツアグドルジ研究の第一人者ですら、D.パグマドラムの詳細を知ることができなかったということがわかる。

しかし、前述したように、E.チメッドツェレンは、モンゴル人民革命党50周年記念に出版された『女性解放史』にD.パグマドラムのことを4ヶ所書いている。1つ目は、のちに最初の女性の大臣となったD.ポンツァグが、貧困ゆえに都に移住した時、D.パグマドラムが彼女を自分の家に住ませ、文字を教え、就職させ、黨員として迎え入れたという経緯、2つ目は政府がソ連に派遣した最初の留学生の一人がD.パグマドラムであったこと、3つ目は、彼女が最初に作られた小学校で教員をしていたこと、4つ目は先に引用したように、「女性課」、のちの「モンゴル女性連盟」の代表を務めていたことが書かれている。そして、その10年後に、最後の著書として発行された『モンゴル女性の知識の伝統と進歩の諸問題』にも、先の1、2、3、4つについて書いている。もしかすると、E.チメッドツェレンの著作は出版され、誰でも本屋で買うことができたが、よく読まれなかったのだろうか。あるいは、党政府がD.ナツアグドルジを「近代文学の父」と個人崇拜の対象とし、眩い光で照射したことで、その周辺に影が作られ、D.パグマドラムについて本に書かれていても、読む人は読み飛ばしていたということなのだろうか。

論集」第33号,P.174

⁴ К.Н.Яцковская

(2) D.ナツァグドルジと D.パグマドラムがともに生きた人生

写真 3 の男性が D.ナツァグドルジで、女性が D.パグマドラムである。D.ニャマー⁵や Kh.メンドサイハン⁶の著作をもとに、二人の人生が重なり合うところを簡単にまとめておこう。

写真 3 D.ナツァグドルジと D.パグマドラム



出典： 教養番組『D.パグマドラム。曇った夜空の満月』2016年放送

D.ナツァグドルジも、D.パグマドラムも、1906年に生まれた。

D.パグマドラムは、当時の習慣⁷ボグトログドフ богтлогдох により胎児の時に結婚相手が決められ、1920年、14歳の時に、エルデネ・チン・ワンの息子パラムとの結婚を強いられた。しかし、1921年の人民革命によって実家に帰ることができた。

D.ナツァグドルジは、1921年の人民革命の年から兵務省に勤め、革命家の一人 D.スフバートルの秘書となる。

1922年に D.ナツァグドルジと D.パグマドラムは、お互いの意志で結婚した。

1924年に人民革命党中央委員会の下に女性の組織が設立され、人民革命党の宣伝部所属の女性教育課と名づけられた。その当時、アムガラン小学校⁸の教師だった D.パグマドラム

⁵ D.ニャマー (2008) "Их Д.Нацагдоржийн гэргий Пагмадуламын амьдрал, аж төрөл" (D.ニャマー (2008) 『文豪ナツァグドルジの妻パグマドラムの人生』)

⁶ Х.Мэндсайхан (2021) "Пагмадулам" (Kh.メンドサイハン (2021) 『パグマドラム』)

⁷ この慣習による婚姻は、1925年10月30日に人民政府が公布した政令によって禁止となる。

⁸ D.ニャマー (2008) P.40 には「部屋は小さく白い建物だった」と書かれている。ウランバートル市内に設立された最初の学校である。

は、女性教育課の最初の代表として選ばれ、その組織が出版する女性向けの雑誌の最初の編集長となる。D.パグマDRAMは18歳であった。

半年後、女性組織の代表は、ヤンジン⁹に代わるが、D.パグマDRAMは、最初の国会イフ・ホルル（大会議：定期大会）の議員に選ばれたあと、国会バガ・ホルル（小会議：常任議員による議会）の議員に選ばれる¹⁰。1924年の11月の国会は、最初の憲法を策定するために開かれるが、その草案作成委員にもなる。

D.ナツァグドルジは、すでに党中央委員会幹部候補であり、この国会では、革命青年同盟中央委員会副議長として祝辞を述べる立場にいた。二人とも新しいモンゴルを切り開く先頭に立つ人材であった。

1925年にロシアに派遣される留学生の中に2人とも選ばれ、最初はペトログラード¹¹に住み、D.ナツァグドルジは軍事政治アカデミー、D.パグマDRAM東洋大学で学んだ。一旦帰国後、2人は日本留学を希望していたが却下され、その代わり、1926年にドイツ¹²やフランスに派遣される留学生6人の中に2人とも選ばれ、最初はベルリン大学付属ジャーナリズム学校、その後、ライプチヒに移住し、ライプチヒ大学の東洋学者の下で留学生活を送ることになった。写真3は、その頃に撮ったものである。

1929年に党政府は外国で学ぶ学生を呼び戻し、2人は留学を断念し、1931年に離婚した。1932年にD.ナツァグドルジはニーナと再婚し、娘アーナンダ・シリーが生まれるが、彼はその年の5月に投獄された¹³。1936年にニーナは強制的に離婚させられた上に、娘とともにソ連に強制送還された。そして1937年に31歳の若さで謎の死を遂げた。¹⁴

D.パグマDRAMも、D.ナツァグドルジが投獄された後に投獄され、釈放後、ウランバートルの中心から東の外れにある、漢人が集中して住むマイマー・ホトに住んだ。その後、どのような最期を迎えたかということとはよくわかっていない。D.ニャマーは、その著書中でも、「1931年以降D.パグマDRAMは消息を何一つ残していない」¹⁵と書いている。娘のD.ツェレンドラムは「母は1938年に亡くなった」¹⁶と書いている。そうであれば、32歳で亡くなったことになる。

⁹ S.ヤンジマーが二代目の代表を務めたのは、1年後である。

¹⁰ <https://ardmedee.com/24150/>によると、「1924年11月26日に第1回イフ・ホルル（最高機関となる大会議）が開かれ、モンゴルの最初の憲法が策定されることになった。そのイフ・ホルルには、ハルハ4盟（アイマグ）、ドゥルブド2盟（アイマグ）、アルタイ・フブスグルのウリアンハイの旗（ホショー）、ダリガンガ・ホブドの農民の旗（ホショー）、と人民軍から全部で90人が代議員として選ばれ、77人の代表が参加した。その憲法では、イフ・ホルルの議員からバガ・ホルル（常設議会）の議員を30人選んで、日常的に作業に当たることになっているが、その中に1人、選ばれた女性が、D.パグマDRAMであった。」と書かれている。

¹¹ 現在のレニングラード

¹² 当時ドイツは西側で、ヴァイマール共和制国家。1928年から経済が悪化し、1930年の世界恐慌により経済危機が起こり、1933年にA.ヒトラーが政権を握る。

¹³ Д.Намдагийн 1988 онд хэвлэгдсэн “Шинэ Монголын шинэ театр” 『新しいモンゴルの新しい劇場』 <https://gogo.mn/r/dgl3l>

¹⁴ 岡田和行（2006）「ナツァグドルジの1932年の投獄と獄中詩について」『東京外国語大学論集』第72号,P.61

¹⁵ D.ニャマー（2008）前掲書,P.52より引用した。

¹⁶ D.ニャマー（2008）前掲書,P.39より引用した。

このように、D.ナツァグドルジと D.パグマドラムは、その短い人生の、少なくとも 15 年をともに生きたことになる。年数を重ねただけでなく、ともに社会主義建設を推進する党の重要な若手人材として活動し、ともに先進国に留学して祖国の未来を考え、ともに帰国させられた祖国には居場所がなく、投獄され、ともに不遇の死を遂げている。

このような D.ナツァグドルジと D.パグマドラムの人生をたどり、浮かんでくる謎は、モンゴル人民革命党による政治的粛清の中に答えがあることがわかる。これでは、党政府が情報公開し、国民が知ることができるようになるまで、国民も、外国の研究者もよくわからないはずである。党は個人崇拜という方法で、見せたいところにより強い光を照射して、D.ナツァグドルジの実像を見えなくし、その光の影に D.パグマドラムを置いてもっと見えなくしてきたと言える。

(3) 投獄の理由

1930 年代のソ連でスターリンによって行われた大粛清については、よく知られているが、スターリンの強い影響下にあった二番目の社会主義国のモンゴルでも同じことが起こった¹⁷。

1930 年代に、政治的粛清の対象となったのは、先の 2 人だけではない。粛清など現代史研究者の D.ウルジーバヤルによると、37,474 人が粛清の対象にされ、20,000 人が射殺された。この背景には、1921 年の人民革命以降、モンゴル国内は革命派と守旧派の間で内戦状態になる。(1931 年に満州事変が起こる。) 1932 年にモンゴル西部 4 県で反革命運動やチベット仏教の僧侶による蜂起が起こる。それを契機に知識人が粛清されていくが、その中に西側から帰国した留学生たちが含まれた。1933 年に「ルフンベ事件」が起こり、180 人近くが逮捕、粛清された。逮捕の理由は、「反革命分子」「日本のスパイ」であった。(1933 年、大日本帝国は国連脱退。) 1935 年にハルハ川国境を関東軍が緊張させ、1936 年にモンゴルとソ連の間で、相互援助議定書を取り交わし、ソ連・モンゴル軍は日本・満洲軍と戦うことになった。(1937 年に日中戦争始まる。) 1937 年に Kh.チョイバルサンが全軍の司令官となり、また首相代理となり、1937 年から 1939 年にかけて「影に怯え、尻尾に震える」と言われる大粛清が始まった。「反革命分子」「日本のスパイ」容疑で数万人が大粛清の対象となった。資本主義国に留学し、ヨーロッパのリベラルな思想の影響を受けた若者たちが粛清された背景には、大日本帝国の大陸進出が緊張を与えた側面を強調しておきたい。

Ts.ツェツェグジャルガル¹⁸が 2009 年に出版した著書『モンゴル女性の 20 世紀: 変容と変化』から「1932 年から 1940 年に反革命という理由で、28,451 人が冤罪事件で逮捕された」と書いている。この大粛清の流れの中で、ドイツに留学した D.ナツァグドルジと

¹⁷ その詳細については、「アジア現代女性史」13 号に書いた拙著「E.チメッドツェレンの最後の著書を再考する」の 85-88 ページを参考にいただければ幸いである。

¹⁸ 興味深いことに、前掲の拙著には、Ts.ツェツェグジャルガルは、E.チメッドツェレンが記述しなかった粛清の時代を記述している、と書いた。しかし、Ts.ツェツェグジャルガルは E.チメッドツェレンの著作を参考文献のリストにあげているので、女性連盟の創立者の 1 人として、また、ドイツに留学した女性の中に D.パグマドラムに触れている。しかし、D.パグマドラムが粛清の対象になったことは書いていない。参考文献リストには、そのことを書いた文献がないので、当然だろう。

D.パグマDRAMは投獄されたので、「投獄の理由」は彼ら自身にあるのではなく、大粛清を実施した側が作りあげたものということになる。

例えば、D.ナツァグドルジが投獄された理由について、岡田（2006）¹⁹は、D.ナツァグドルジとともに投獄されたD.ナムダグの回想をもとに次の2つにまとめている。1つ目は、「1931年12月31日の大晦日の宴会が実は満洲国成立1周年を記念して開かれたものではないかと内務保安処に嫌疑をかけられたこと。2つ目は、バトオチルが撮影して内務保安処に持ち込んだ写真によって、宴会の場所を提供した「首謀者」と出席者が判明したこと」²⁰である。1989年になり、罪状が再審査された結果、冤罪であることが判明したため、判決は無効とされ、名誉回復がなされた。

D.パグマDRAMは、まず、1931年9月9日付けウランバートル市の選挙管理委員会の決定により、貴族（D.ナツァグドルジ）の妃であり、彼は私的な使用人を所有するタイジであることから、選挙権と被選挙権を剥奪された。1931年9月9日にカレッジの第45号決定により、就学中に、年下の者を抑圧し、常に凶暴な性格で、猥褻な行為をしばしば行い、貴族やタイジ²¹の女となり、学問に熱心に取り組まなかったという理由で、退学させられた。1932年モンゴル人民革命党の第三回調査の結果、党からD.パグマDRAMは除名された。また、女性課に勤める権利を剥奪するという党の決定が出た。それが冤罪であることをスフバートル区民事裁判所が認め、2019年12月13日に名誉を回復すると決定²²した。

こうして、モンゴル政府は、2人とも冤罪であったことを認め、公式には名誉を回復したことになる。

¹⁹ 岡田和行（2006）前掲論文,PP.61-70

²⁰ 岡田和行（2006）前掲論文,P.63

²¹ 下級貴族で、役人

²² Kh.メンドサイハン（2021）前掲書,P.123

(4) 知識人による名誉回復の動き

写真4 映画「輝く草原の祝詞」のポスターに使われた写真



出所：「スクリーン」

<https://www.delgets.com/2023/01/1984.html>

D.ナツァグドルジは、死後、1948年の第1回モンゴル作家大会で「絶大な評価が与えられ」²³、個人崇拜が始まったと言われる。1956年にモンゴル人民革命党政府の主導により生誕50年祭が盛大に行われ、1963年にはウランバートル市内に銅像が建てられ、1984年にD.ナツァグドルジを讃える「輝く草原の祝詞」‘Саруул талын ерөөл’²⁴という映画が作られた。10年ごとに生誕祭が行われ、「近代文学の父」として光を当てられ続けた。それでも、公式に名誉回復が行われたのは、1989年になる。

一方、D.パグマドラムの名誉回復は2019年に行われた。こんなに時間がかかったのは何故か、D.ナツァグドルジに遅れること30年、この時差は、いったい何なのだろうか。

また、裁判所が公式にD.パグマドラムの名誉を回復する判決を出した後、記者会見は行われておらず、一般の人にはあまり知られていないどころか、彼女の名誉を毀損する様々な噂はい

まだにその名前にまわりついている。これは、いったいどういうことなのだろうか。彼女が女性であったからなのだろうか。

これに対し、モンゴルの一部の知識人は、すでに地道な努力を続け、汚名を返上しようとしてきたので、その経緯を紹介していきたいと思う。

2007年、モンゴル国営放送が放送40周年記念に、巨匠G.ジグジドスレンを監督に『文豪ナツァグドルジ』²⁵というドラマ仕立ての特集番組を放送した。これが2人の粛清について初めて映像化した番組と思われる。ここでは、粛清後の生活の必要から、D.パグマドラムが漢人から借金をし、愛人になったことが描かれている。2007年は、D.パグマドラムが生まれて100年目の年になるので、D.ニャマーは、ウヌードゥル新聞に‘Нэгэн зууны даваан дээрээс нэхэн сурвалжлахын учир’（100年の年月が過ぎても、伝えなければならない理由）という投稿をし、D.パグマドラムについて議論するようになる。

2008年に文学評論家のD.ニャマー²⁶が、D.パグマドラムに関する関係者の証言を集めた『文豪ナツァグドルジの妻パグマドラムの人生』²⁷を出版した。これを契機に、新聞や

²³ 岡田和行（1983）前掲論文、P.183

²⁴ 「輝く草原の祝詞」‘Саруул талын ерөөл’（1984）

²⁵ “Их Нацагдорж” 『文豪ナツァグドルジ』 国営放送のカラー放送40周年記念番組として2007年に放送された。 <https://www.youtube.com/watch?v=5z1GqRyt0IU>

²⁶ 文芸評論家D.ニャマー：1939年ドンドゴビ県生まれ、2017年9月に死去。国家勲章、文化功労者、詩人、医師

²⁷ Д.Нямаа（2008）“Их Д.Нацагдоржийн гэргий Пагмадуламын амьдрал, аж төрөл”（D.ニャマー（2008）『文豪ナツァグドルジの妻パグマドラムの人生』）

テレビが D.パグマドラムについて積極的に取り上げるようになる。また、同じ年にモンゴル女性連盟が出版した“Монголын эмэгтэйчүүдийн байгууллагаа”（『モンゴルの女性組織』）²⁸には、この組織に関わった女性達を紹介している。この中で、D.パグマドラムは、最初の代表として紹介されているが、「5,6 才の時、モンゴル文字と満洲文字をウーレン・アーと言う人から学んだ」ということから始まり、最初の留学生であることなど、簡単な略歴が書かれている。しかし、その最後の一文に「この女性の個人史について十分に研究されていない」と書かれている。

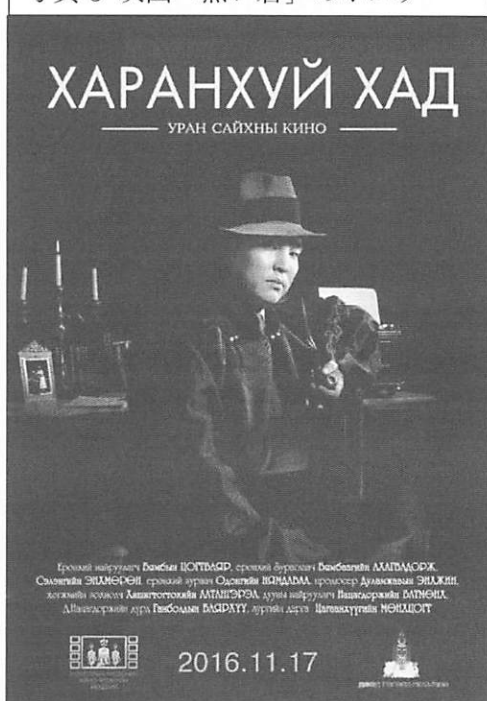
2013 年には、前述の D.ニャマーの著作を元にして D.パグマドラムを主人公とする再現番組『D.パグマドラム。曇った夜空の満月』²⁹が作られた。（7）で詳しく述べる。

2015 年に歴史学者 Kh.メンドサイハンらが、D.パグマドラムの名誉回復の申請をウランバートル市スフバートル区、チンゲルテイ区、バヤンズルフ区の民事裁判所に提出した³⁰。そこでは埒があかず、2019 年 5 月には高等裁判所に申請をし、最終的には、2019 年 12 月に公式に名誉回復をした。

2016 年に D.ナツァグドルジの生誕 110 周年を記念した映画や演劇が制作された。映画では、D.ナツァグドルジの著作「黒い岩」と同じ題名の映画「黒い岩」³¹が制作され、2017 年 2 月に劇場公開された。詳しくは（6）で述べる。また演劇では、2016 年 11 月に Sh.グルバザル作、Ch.トゥブシン演出による「昇らぬ太陽」が初上映され、Ts.ホラン作、B.バートル演出による『モンゴル人民の巨匠』という劇が公開された³²。この 2 作とも、2 人が粛清の対象となったことが描かれ、D.パグマドラムは教養の高い女性として描かれている。

2016 年に写真集『モンゴル人たち：1924-1959 年』第 2 巻³³が発行され、ドイツやフランスに留学した若者達の集合写真の中に D.ナツァグドルジと D.パグマドラムが含まれている。また、ドイツ留学前の 1920 年に演劇活動をしている衣装の

写真 5 映画「黒い岩」のポスター



出所：モンゴル映画サイト

<https://kinosan.mn/content/1786>

²⁸ Н.Гэрэлсүрэн, Д.Алтай (2008) “Монголын эмэгтэйчүүдийн байгууллагаа”, УБР, 165 (N.ゲレルスレン、D.アルタイ (2008) 『モンゴルの女性組織』、ウランバートル、P.165)

²⁹ “Д.Пагмадулам. Бүрхэг шөнийн тэргэл саран” 『D.パグマドラム。曇った夜空の満月』 <https://www.youtube.com/watch?v=EuQk79u-O54&t=2029s>

³⁰ Х.Мэндсайхан (2021) “Пагмадулам”, P.121

³¹ “Харанхуй хад” 「黒い岩」 監督 В.Тюгтубаяр, D.ナツァグドルジ役 G.Баярлур

³² “МОНГОЛ АРДЫН СУУТ” <https://news.mn/r/749934/> D.ナツァグドルジ役 Ts.Түшээндорж, D.パグマドラム役 М.Энфзага

³³ О.Батсайхан (2016) “Монголчууд：1924-1959 онд” АДМОН принтинг, P.155 (O.バトサイハン (2016) 『モンゴル人たち：1924-1959 年』 アドモン社, P.155)

ままの D.パグマドラムの写真が掲載されている。

2020 年 7 月のナーダムの前に、D.ナツァグドルジが座り、D.パグマドラムがそばに立つ 2 人の写真を元にした銅像が、エルデネト市で建立され、公開された。この記事には、偉大なる作家 D.ナツァグドルジ、その妻であり、女性連盟の最初の代表 D.パグマドラム³⁴と書かれている。

その後、2021 年には「モンゴルの 100 年の歴史を創った 100 人の女性たち」³⁵というシリーズの番組で「光を見て、光り輝いた純白の真珠 D.パグマドラム」という輝かしいテーマが付けられ、モンゴル女性連盟の最初の代表として紹介された。若者達は、彼女が満洲語、漢語、ロシア語、ドイツ語を身につけていたと聞き、1920 から 30 年代にそんな国際的な教養人がいたことに羨望の眼差しで見ている。歴史学者 Kh.メンドサイハンが自分の博士論文を元にした『パグマドラム』³⁶という本を出版したことで、新聞が再び取り上げて広めた。

(5) 映画「黒い岩」の中の D.パグマドラムの描かれ方

1984 年に D.ナツァグドルジを讃えた「輝く草原の祝詞」'Саруул талын ерөөл'³⁷という映画が作られた。地方に社会主義建設を進めるために、全力投球する D.ナツァグドルジに対し、自由奔放な D.パグマドラムが「かまってくれない」と困らせ、それが原因で別れ、任務を果たした D.ナツァグドルジが民衆に絶賛される姿を見て、後悔の涙を流す。D.パグマドラムは悪役となっている。

これと比べて映画「黒い岩」では、2 人とも肅清の対象となり、その苦悩が描かれていることが根本的に違うところである。

D.ナツァグドルジが投獄され、勾留されているシーンから始まり、取り調べを受けるシーンで、取調官から「タイジ ナツァグドルジ」と呼ばれ、「チンギスの血統を受け継いだ貴族なのか」と詰問され、暴行を受ける。意識が朦朧とする中で、勾留されている間、子どもの頃、初めてパグマドラムと出会った時のこと、妻ニーナとの暮らし、娘のアーナンダ・シリのいい父親ぶり、別れた D.パグマドラムを心配してマイマー・ホトを訪ねたことなどを思い出す。その時の D.パグマドラムのセリフには次のようなものがある。

D.パグマドラムは「例の偉大なる作家 D.ナツァグドルジの D.パグマドラムってのは、麻薬中毒になり、漢人と組んでろくでもないことをして捕まったと言われている。」と苦しい胸のうちを話す。

D.ナツァグドルジは「それが本当であれば、と望む人もいるんだろう」と落ち着いて言う。

³⁴ <https://www.montsame.mn/jp/read/231064>

³⁵ 番組名は “Зууны 100 эмэгтэйчүүд”（「モンゴルの 100 年の歴史を創った 100 人の女性たち」）。この番組で E.チメッドツェレンが取り上げられ、その内容について、筆者が 15 号に「モンゴル国の番組「100 年の 100 人の女性たち」の中の E.チメッドツェレン」にまとめている。

³⁶ “Пагмадулам” 『パグマドラム』

³⁷ 「輝く草原の祝詞」'Саруул талын ерөөл' (1984)

D.パグマDRAMは「党の会議で、女性が政治や社会に参加する権利を主張した私が、今や、選挙権を奪われ、仕事に就く権利も奪われた。」と涙をこぼす。

D.ナツァグドルジは「泣かないで、落ち着いて」と宥める。

D.パグマDRAMは「どうしたら落ち着けるの？ 私は全てを失った。今の私には何もない。」「刑務所でタバコを覚えたわ。それを、みんな、麻薬をやっていると、老耄の漢人の愛人になってるとか、色々言われている。どうして、みんな私を貶めるの？ 私はただ一人の女性にすぎないのに。」「私たちが行ったロシア、ヨーロッパはどうだった？ みんな優しくあったわ。私たちはそこで多くのことを学んで、それをどう実践するかを考えて、祖国に帰ってきた。その祖国は私たちに何をした？」と涙ながらに訴える。

これらのセリフには、D.パグマDRAMだけでなく、汚名を晴らしたい人々の思いも込められている。次の(7)で詳しく述べる。

写真6 D.パグマDRAMが最初に登場するシーン



出所：映画「黒い岩」（2016年）

写真7 D.パグマDRAMが二番目に登場するシーン



出所：映画「黒い岩」（2016年）

写真6は、D.ナツァグドルジを連れて父が学問の師匠を訪ねた時、すでにD.パグマDRAMがそこで学んでいて、漢語や満洲語に長けていると師匠が紹介するシーンである。

写真7は、D.パグマDRAMが二番目に登場するシーンである。白いブラウスを着た清楚なD.パグマDRAMが演出されている。

このように、D.パグマDRAMの汚名を覆す取り組みは、このままにされてはい

けないと思う一部の知識人によって、機会を捉えて地道に続けられ、新聞やテレビの番組を通じて報じられてきた。それでもなお、一般市民には十分に伝わっていない。

E.チメッドツェレンは、D.パグマDRAMの人となりについて、当時の証言を紹介して次のように記述している。

資料4

「パグマDRAMは当時、教養のある女性の1人であったが、5、6歳からモンゴル文字と満洲文字を習い、中国語の会話が上手だった。1926年にソ連の東洋大学で短期間勉強していたが、同時に、彼女の夫である作家ナツァグドルジが軍事大学に留学していた。そこでロシア語を取得したが、まもなく2人はドイツのベルリンへ行き、そこで6ヵ月ドイツ語を勉強してから、ライプチヒ市の記者大学へ進学し、1929年まで勉強した。D.パグマDRAMとD.

ナツァグドルジの親友のソドノムが『1930年の夏にパグマドラムとウランバートル市で会った時、彼女はもうヨーロッパの女性のように落ち着いていて、学識豊富で視野の広い、高い教育を受けた女性になっていた。パグマドラムと話すといつも元気で対応してくるが、性格がおとなしく、正直で口数の少ない人であった』³⁸と回想している。

パグマドラムは文学が好きで、モンゴルの古典文学をモンゴル語と満洲語で読んでいた。彼女は伝統的な文化と近代的な文化の全般について、よく流暢に語り、その素晴らしさを皆と分かち合っていた。モンゴルの女性に最先端の科学や文化を教え、知的な武装をさせ、様々な専門的な人材を育てるために一生懸命務める必要があると考えていたからだ。そのために、まず、読み書きから始めて、女性の日常生活と結び付け、言葉や行動にも影響を与え、誠実で、慎重で、清廉で、的確な人材を教育するよう心がけるべきと常に述べていた。

人民政府の初期の頃から D.パグマドラムが女性と若者を対象に様々な活動を行ってきたが、政治について高い知識を持っている人だった。...パグマドラムはロシア語、ドイツ語、満洲語、モンゴル文字、中国語が上手な教養のある人であった」と1967年3月付けの《モンゴルの女性》誌に書かれたパグマドラムの伝記から引用した。

出典：E.チメッドツェレン（1973）前掲書、P.225 より

このように書かれた文章が記憶に残るよう読まれていないことが残念である。のちにモンゴル女性連盟や Ts.ツェツェグジャルガルが、D.パグマドラムについて略歴を書く時、この文章が下敷きになっている。

映画「黒い岩」の主人公は D.ナツァグドルジであるため、ここに書かれたように女性解放運動のリーダーとしての D.パグマドラムが描かれておらず、悲劇の運命を背負わされた女性として描かれている。

（6）再現番組『D.パグマドラム。曇った夜空の満月』の中で知識人が伝えたかったこと

この番組の中で、知識人の語ったことの一部をここに紹介する。どの人も、死んでもなお汚名を着せられる D.パグマドラムについて忸怩たる思いを抱えていることがわかる。

①P.バダルチ：モンゴルの人民作家、文化功労者、詩人

写真 8 P.バダルチ



出所：「曇った夜空の満月」

P.バダルチ³⁹は、「こうして全否定して、D.ナツァグドルジ生誕 50 周年以降、誰も D.パグマドラムを思い出すことすらしなくなった。」⁴⁰、「D.パグマドラムという、一時的に D.ナツァグドルジと結婚していた。マイマー・ホト育ちで、シャンズ（三味線）を演奏する飛んだ女。最期には、漢人集落に住み、漢人の愛人になり、麻薬を吸い、という不名誉な噂がつけられ、それは今も変わらない。」「（D.

³⁸ Базаргочоо. Курсийн ажил. 1971 он. УИС-ийн МАХН-ын түүхийн тэнхимд бий.

³⁹ P.バダルチ・トゥブ県で1939年に生まれた。モンゴルの人民作家、文化功労者、詩人。

⁴⁰ 1時間5分以降

ナツァグドルジについて) 立派な本を出している学者はたくさんいるにも関わらず、D.パグマドラムについて口を閉ざしている人は多い。私が話を切り出すと、お前、何なんだと嫌な顔をする。今さら話しても無駄だとか、あんたの書いていることは嘘だとか、私にそう言って話を止める。私はD.パグマドラムに金をもらったわけでもないし、兄弟や親戚でもない。何が起こったのか、事実を語りただけだ。」⁴¹

②D.ニャマー：国家勲章受賞者、文化功労者、詩人、文芸評論家、医師。『文豪ナツァグドルジの妻パグマドラムの人生』の執筆者

写真9 D.ニャマー



出所：「曇った夜空の満月」

D.ニャマーは、「西側に留学した若者は粛清され、B.リンチンのようにロシアに留学した若者は粛清されなかった。」、「当時のモンゴルで、女性が大きな会議に参加し、自分の意見を言うということは、まだ受け入れられない状態にあった。」、「D.ナツァグドルジを研究する人はたくさんいる。長年研究してきた人はよく知っている。(暗い部分を)話す人もいるが、話さない人もいる。」⁴²

③ Ts.トゥメンバヤル

写真10 Ts.トゥメンバヤル



出所：「曇った夜空の満月」

Ts.トゥメンバヤル⁴³は、「モンゴル女性連盟の最初の代表の名前は長い間伏せられてきた。現在の女性連盟の代表J.エルデネチメグがD.パグマドラムの名前を言うようになったのは最近のことです。」⁴⁴と語っている。

確かに、2018年の「ウヌードゥル」新聞にモンゴル女性連盟の代表J.エルデネチメグのスピーチが掲載され、その中に、「

モンゴル女性連盟は、1924年に「女性教育課」という名前で設立され、モンゴルだけでなく、アジアで最初の女性の組織が設立されたという歴史がある。偉大なる作家D.ナツァグドルジの妻D.パグマドラムはこの組織の責任を持つ最初の代表でした。当時女性を啓蒙する、社会や政治に参加させるなど、当時の女性の権利を守り、充実させる目的で最初設立された。」⁴⁵と述べている。

しかし、繰り返しになるが、E.チメッドツェレンがD.パグマドラムのことを『女性解放史』に記述している。やはり、この本はよく読まれていなかったのだろうか？

⁴¹ 1時間25分以降

⁴² 1時間22分以降

⁴³ Ts.トゥメンバヤルは、作家、記者

⁴⁴ 1時間20分以降

⁴⁵ 2018年10月11日付けのウヌードゥル新聞

④Ch.ビレグサイハン：文学研究者

写真 11 Ch.ビレグサイハン



Ch.ビレグサイハンは、「D.ナツァグドルジが死去した後、D.パグマドラムについて話したい人間は一人もいなくなった。当時の知識人は、語ってはいけないリストに署名をさせられていて、その1つがD.パグマドラムについてだった。他の偉大な作家たちも、彼女について書こうとはしなかった。」「(二人の)関係者はたくさんいて、知っている人は多くいるが、語ろうとしない。私たちの世代が死んでから、明らかになるんだろう。」

46

⑤司会者は、「モンゴルの女性を最も侮辱する言葉は、「漢人の愛人になった」という言葉である。」「D.パグマドラムは汚名を着せられていた。」と述べた。

⑥「D.パグマドラムの名誉を回復しよう。」

この番組の内容を放送後に紹介した TIME 紙⁴⁷の記事には、「曇った夜空の満月」には、「モンゴルの女性組織の最初の長、新しい憲法を作った人にこんなにも汚名を着せ、侮辱し、記憶から抹殺し、煙に巻く理由はいったい何なのか。こんなことになる科学、党や政府、そんな女性組織が一体モンゴルにあるのだろうか。彼女に貼られた「モンゴル人を侮辱する中国人と結婚したモンゴルの女」というレッテル。しかし、時代が変わったので中国人どころか、悪魔と結婚したとしても名誉回復される時代になったが、その権利を放棄したのか。現在までも私たちはこんな理解のままで、目をつぶり、耳をとじ、何年もの年月を過ごしてきた。」「私たちはパグマドラムやツェレンドラムの名誉を回復しよう」と呼びかけて締め括った。

(7) 1973年に E.チメッドツェレンが資料と証言を元に書いた D.パグマドラム

さて、この D.パグマドラムの名誉回復の取り組みは、いつから始まったのかと、遡って見たところ、文学評論家の D.ニャマー⁴⁸が引用した文献の中に、1973年に発行された E.チメッドツェレンの著作『女性解放史』があった。それは、本論冒頭の資料1である。つまり、E.チメッドツェレンが D.パグマドラムを記述したことが、その後、政治的粛清とその時に纏わされた汚名から名誉を回復する運動のきっかけとなったと言える。

⁴⁶ 1時間20分以降

⁴⁷ <http://time.mn/k0n.html>

⁴⁸ D.ニャマーは、1939年、ドンドゴビ県生まれ、2017年に亡くなった。詩人、作家であり、文学評論家。モンゴル国家勲章、文化功労勲章受賞者。D.ナツァグドルジ、D.パグマドラムを直接する人にインタビューし、2008年に“Их Д.Нацагдоржийн гэргий Пагмадуламын амьдрал, аж төрөл”（『文豪ナツァグドルジの妻パグマドラムの人生と業績』）を出版した。近代文学の父と呼ばれる D.ナツァグドルジを研究する人は、モンゴル内外に数え切れないほどいるが、D.パグマドラムの名前を題名につけた本は、これが初めてである。

最初に資料1で引用したように『女性解放史』の中では、D.パグマドラムが「モンゴルの女性連盟の発起人で初代の課長 D.パグマドラムはモンゴルの女性運動の歴史に重要な位置を占める。」ことが書かれている。

その本の中には E.チメッドツェレンがモンゴルの最初の女性の大臣 D.ポンツァグにインタビューし、自分を解放してくれたのはD.パグマドラムであるという証言を書いている。

写真12が、D.ポンツァグである。彼女は1900年にセツェン・ハン・アイマグのエルデネ・

写真12 D.ポンツァグ



1900年、ヘンティー県に生まれた。
モンゴルで最初の女性の保健省大臣
(1930～1933年)

ダライ・ワン旗（現在のドルノド県フルンビイル郡）のヘルレン・バヤン・ハン・オールというところでシャラブの3番目の娘として生まれた。彼女は幼い時に養女に出されたが、16歳になってから実の母親のところに戻ってきた。その後、一度も会ったことがない人と婚約を決められ、嫁に出された。まもなく夫は、他の家に遊びに行くようになった。エルデネ・ダライ・ワン旗の貴族の妻が都のフレーへ行くことになり、彼女について行き、その家で住み込みの重労働をすることになった。少し長くなるが、D.ポンツァグの証言を資料5として引用する。

資料5

「私はある日、通りを歩いていたら、偶然に、同郷の女性 O.ジャムスランと会った。彼女はずいぶん前から革命を支援していたと人々がよく話題にしていた。O.ジャムスランは私のぼろぼろの服を見て「あなたに紹介してあげる家族があるからついて来て」と言い、私は彼女について行った。そうして私を D.ナツァグドルジの家に連れて行った。さらにご馳走してくれた。すると O.ジャムスランは「パグマドラムよ！ 私は同郷の人を連れてきたけれど、彼女はウルジーナムスライの家で使用人として使われて、着る服もなく苦勞しています。だから、彼女に入党してもらったらどうですか」と言った。パグマドラムはノートを持って、メモを取り始めました。

「お名前は？」と聞かれて、「ポンツァグ」と答えた。オボグを聞かれても何のことか分からなかったので、隣にいたジャムスランが「お父さんの名前を聞いているのよ」と教えてくれました。私は父を幼い時になくしたことを伝えたら「お母さんのお名前は？」と聞かれ、「ドルゴル」と答えた。そうして、ドルゴル・ポンツァグと言う姓名を登録してもらった。こうして私は生まれて初めて自分のことを書いてもらい、社会に参加する入り口に立ち、人口登録帳にも1人の国民として登録することができた。

その時、私は24歳になっていた。D.パグマドラムは私に「明後日会議があります。これ

からあなたは党に入党し、自分で自分を成長させるようになります。勉強もたくさんありますよ」と言った。私はとてもうれしかった。私が入党するに際して、D.パグマドラムや党大学の教師であるチョイスレン達は保証人になってくれた。そして翌々日になると（これが1924年6月15日だった）財務省の傍らにある党の細胞で会議が開かれ、入党させてくれた。党の細胞長はS.ボヤンネメフ⁴⁹であった。こうした縁で私は党と結ばれたのです」と話した。

D.ポンツァグは、我国の近代文学の基礎をつくった人である D.ナツァグドルジに縦書き文字のアルファベットを教えてもらい、読み書きを覚え、さらに D.ナツァグドルジの弟子として家に住むようになった。このようにして D.ポンツァグは不自由で貧乏な使用人の生活から解放され、人民革命の日を迎えたのである。

D.ポンツァグは、その時の自分のことを思い出し、「パグマドラムは1924年に私を軍事工場で働くことができるようにしてくれました。私は初めて社会に参加することができた。その頃、私達は軍用外套をよく作っていた」と話した。

出典：E.チメッドツェレン（1973）『女性解放史』,P.42

ここには、D.ポンツァグが貧困ゆえに田舎から都に流れついて、D.ナツァグドルジとD.パグマドラムの暮らす家に住み込み、文字を習い、工場で働き、入党し、政治活動に参加していく様子が生き生きと再現されている。この記述を文学評論家のD.ニャマーは引用していたのである。前述した再現番組にも、最初の大員D.ポンツァグの証言として挿入されていた。

筆者は、社会主義時代の多くの研究者と同様、E.チメッドツェレンも人民革命党の「体制内で出世した知識人」であるという穿った見方をしていたが、彼女自身が政治的粛清の被害者であった⁵⁰ことを本誌14号の「2つの三世代の『秘史』」で明らかにした。また、13号の「E.チメッドツェレン最後の著書『モンゴル女性の知識の伝統と進歩の諸問題』を再考する」の中で、「E.チメッドツェレンは、粛清の負の側面については一切記述せず、それを書くことを許されない時代であった。」⁵¹と書いた。確かに、彼女は自分自身の家族とブリアート民族が受けた粛清について書くことはなかったし、粛清の負の側面については一切記述しなかった。しかし、粛清の対象となったD.パグマドラムについて、その功績を記し、名誉を毀損する噂を打ち消す時に根拠となる証言を『女性解放史』に刻印していたのである。

この本が出版された1973年は、まだ政治的粛清が続いていた。1930年代の大粛清は、I.V.スターリンの影響下のモンゴルで、大日本帝国の侵略に怯えつつ、Kh.チョイバルサンが全権を握る中で行われた。その後も断続的に粛清は行われていったが、この頃は、スターリン批判の影響を受けることになる。

⁴⁹ S.ボヤンネメフ（1902-1937）作家（詩歌や短編小説、戯曲、文学理論）、政治家。1937年に粛清された。

⁵⁰ 14号には「2つの三世代の「秘史」－E.チメッドツェレンの「三世代の歴史」と息子のJ.ボルの「私の母 思い出」

⁵¹ 今岡良子（2019）「E.チメッドツェレン最後の著書『モンゴル女性の知識の伝統と進歩の諸問題』」、『アジア現代女性史』第13号、P.87

1956年にソ連でN.S.フルシチョフがI.V.スターリン批判を始め、中国では共産党への批判を歓迎する「百花齊放百家争鳴」が始まり、モンゴル人民革命党政府は、モンゴルの知識人がこの影響を受け、自由に政治批判することを恐れた。この時代の粛清のことは「知識人の迷妄」と呼ばれ、たとえば、表現の自由を奪われたことで有名なR.チョイノム⁵²という詩人が逮捕されたのは、1969年である。市民は粛清の対象者に対して距離を置く時代であった。党の下で歴史を書く時、党によって粛清された人を記述することは非常に難しいことだったはずである。夫のD.ナツァグドルジは、すでに個人崇拜の対象として日のあたる世界に存在していたが、党がなぜD.ナツァグドルジを投獄したのか、という陰の部分の解明は、33年後の1989年の公式な名誉回復まで知ることを許されなかった。そういう時期に、E.チメッドツェレンは、D.パグマドラムを積極的に取り上げようとした。それはなぜだろうか。一人息子のボルに聞いた時、（粛清に対し）「母は勇気ある人だった」とだけ答えてくれ、それ以上の言葉はなかった。彼女の同僚の研究者や弟子となった研究者らに聞いても、それについて話してくれる人はいなかった。

(8) 写真のない女性連盟の代表 D.パグマドラム

D.パグマドラムについて記述することは、そうたやすいことではなかったという根拠として、写真の扱い方が不自然であることを指摘することができる。

E.チメッドツェレンには、D.パグマドラムを女性解放の歴史における第一人者として書かねばならない動機があった。にもかかわらず、D.パグマドラムの写真が1枚もないのは、非常に不自然である。本論の最初に写真1として示したように、D.パグマドラムの写真は当時存在していたし、娘のD.ツェレンドラムが保存していた。

この本の中では、女性活動家の個人と集合写真、合わせて19枚の写真が挿入されていて、例えば、S.ヤンジマーの写真は、1ページを使って、読者が最初に見るように編集されている。この時代の印刷物で、このサイズで挿入される写真は、V.I.レーニンやD.スフバートルなどの国を代表する革命家や国家元首の写真に限られている。本来は、ここには、S.ヤンジマーではなく、まず、D.パグマドラムの写真が挿入されるべきであった。D.パグマドラムの記述が複数ありながら、彼女の写真が1枚も挿入されていないのは、編集上、削除された可能性がある。

⁵² 岡田和行(1991)「反逆の詩人レンチニー・チョイノム」『東京外国語大学論集』第42号、PP.201-223

写真 13 『女性解放史』に挿入された S.ヤンジマーと S.オドバルの写真



出典：E.チメッドツェレン（1973）『モンゴル人民共和国における女性を社会的抑圧から解放した歴史的経験』、P.25 と 201 より

S.ヤンジマーは 1893 年に D.パグマDRAM と同じ、ウランバートル市マイマー・ホトに生まれた。写真の下には、「S.ヤンジマー（モンゴルの女性運動の最初のメンバー）」と書かれている。

S.オドバルは、1921 年にボルガン県に生まれた。写真の下には、「S.オドバル モンゴル女性委員会の長、作家」と書かれている。

S.ヤンジマー⁵³とは、人民革命のリーダーの 1 人である将軍 D.スフバートル⁵⁴の妻である。モンゴル女性連盟の最初の代表は、D.パグマDRAM であるが、その翌年に代表になったのが S.ヤンジマーで、1925～1928 年、その後、1936～1938 年、1940～1949 年、1956～1962 年に代表を務めている。その次に写真が大きい S.オドバルは、S.ヤンジマーが 3 度目の代表になった後の 1949～1954 年、その後 S.ヤンジマーが 4 度目の代表になった後の 1962～1982 年にかけて 20 年間代表を務めた人である。S.オドバルについて書かれた著

⁵³ ヤンジマーは、ネメンディ・ヤンジマーという姓名であったので、N.ヤンジマーと書かれていることがある（モンゴルでは、親のファーストネームを姓とし、自分のファーストネームの上につけて姓名を作る）。彼女は、夫スフバートルの死後、スフバートル・ヤンジマーを名乗るようになったので、S.ヤンジマーと書いていることもある。ここでは、ヤンジマー自身が選んだ S.ヤンジマーと書くことにする。

⁵⁴ D.スフバートルも、謎の死を遂げている。

作は多く、生誕 100 年を記念して映画 “УЛАН ЦЭЦЭГ” (『赤い花』) が作られた。彼女は社会主義時代の女性リーダーとして真っ先に名前が上がる女性である。

一般のモンゴル人が、社会主義時代の女性のリーダーとして名前をあげるとしたら、この写真の 2 人だろうと思われる。この 2 人に強い光を当て続けることも、D.パグマドラムを日陰に置いて、見えない存在にすることに役立ったと思われる。

この『女性解放史』が出版される 1973 年までの間、モンゴル女性連盟の代表は、D.パグマドラム、S.ヤンジマー、S.オドバルの 3 人だけである。2 人は大きなサイズの写真が挿入され、最初の代表の D.パグマドラムの写真が挿入されていないのは極めて不自然である。前述のように、D.チメッドツェレンは、「モンゴルの女性組織の発起人で初代の課長 D.パグマドラムはモンゴルの女性運動の歴史に重要な位置を占める。」と明言しているにも関わらず、写真が一枚も挿入されていないのはおかしい。D.パグマドラムの写真を掲載しない唯一の理由は、粛清の対象となった事実であろう。E.チメッドツェレンと、編集及び検閲の背景となる国家権力との間で起こった何らかの争いは、その中身がわからなくても、不掲載という不自然さによって『女性解放史』に仕込まれていたのである。

(9) E.チメッドツェレンが挿入した D.ボンツァグの 2 枚の写真

もう 1 つ不自然だと思うのは、D.ボンツァグの同じ写真が 2 回使われていることである。



写真の下には、モンゴルの女性組織における最初の職員の女性たち、と書かれている。後ろの列の右から二番目の洋風のコートを着ているのが、D.ボンツァグである。この集合写真の上には、この D.ボンツァグだけを切り取った写真をもう一つ挿入している。写真 12 と同じ帽子をかぶっている。

先ほどの女性組織の代表 2 人以外は、1 ページに 3 枚挿入するぐらいの小さいサイズの写真が使われている。しかし、D.ポンツァグだけは、集合写真とそれを切り取って大きくした写真というように 2 枚も使われている。それは、まるで、この本の中で、D.ポンツァグは重要な人物であることを示しているかのようである。

資料 3 の興味深いところは記述の方法である。最初の組織の代表は誰で、その組織は何をしたかという活動の歴史は 6 章で書いている。これを書くだけでも良かったところ、2 章では D.ポンツァグという最初の女性の大臣の証言をもとに、当時の暮らしぶりを目に浮かぶように記述していることである。

モンゴルで最初の女性の大臣がどのように生まれたか、ということは、この本の中で書かざるをえない。地方から都に流れてきた貧しい遊牧民の D.ポンツァグを家に住ませ、文字を教え、仕事に就けて社会に参加させ、党活動のリーダーとして育てたのは、D.パグマドラムと D.ナツァグドルジであった。D.ポンツァグは感謝と尊敬の気持ちを持ち、この 2 人と関わった人生を語っている。D.ポンツァグの重要な立場を盾に取ることで、D.パグマドラムらが社会のために真摯に生きる姿を再現し、記述として残すことに成功している。

(10) E.チメッドツェレンは『女性解放史』に D.パグマドラムを書くことによって、彼女を解放しようとした

このように見ていくと、E.チメッドツェレンは、史実と最初の女性の大臣 D.ポンツァグの証言を使って、編集や検閲を論破した可能性がある。この結果、D.パグマドラムの写真の掲載が 1 枚も認められなくても、その功績を活字に残し、それがのちに D.ニャマーや Kh.メンドサイハンらに引き継がれ、名誉回復に繋がったと言える。

知識人に対する粛清が続いている時期に、あえて D.パグマドラムについて書こうとしたのは、なぜか？ しかも、最後の著書にも繰り返して書いている。

それは、第 1 に、D.パグマドラムはモンゴル女性連盟の初代のリーダーであったため、誰が執筆者になったとしても、モンゴルの女性の歴史を書く時、書かざるにはおれない存在であった。E.チメッドツェレンは、党の建設史観⁵⁵を下敷きにして『女性解放史』の章立てを考えた⁵⁶が、第 2 章の「人民革命とモンゴルの女性たち」、第 6 章の「モンゴルの女性たちの組織」で女性の最初の組織の活動を書く時に、女性組織の代表が誰で、どのような問題を解決するために、どのように組織を動かして、運動していたか、と具体的に書くには、D.パグマドラムの名前をあげ、彼女が何をしたのか、ということから書く必要があった。他の執筆者であっても、自然にそうしたいと思ったことだろう。しかし、それを阻む政治の圧力と E.チメッドツェレンは闘ったのである。

2 つ目は、E.チメッドツェレンが、日陰に置かれた D.パグマドラムを『女性解放史』の本の中で光を当てようとした理由は何か、ということだが、それは歴史家として書かざる

⁵⁵ 『女性解放史』は、人民革命党の建設史観にもとづきモンゴル科学アカデミーが『モンゴル史』三巻本を編纂し、1969 年に発行した後、女性を主語にして書かれた歴史書である。人民革命 50 周年を記念して出版された。

⁵⁶ 詳細は、今岡良子「E.チメッドツェレンの最後の著書『モンゴル女性の知識の伝統と進歩の諸問題』を再考する」「アジア現代女性史」13 号を参照されたい。

を得ないというだけでなく、D.パグマドラムを二度、しかも、自分の手で日陰に置かないという強い意志を持っていたのではないか、ということである。女性解放の運動の先頭に立ち、その後、政治的に粛清されたD.パグマドラムの偉業を書き残す行為は、一人の女性を解放することであった。それを書くことによって『女性解放史』の本に魂を吹き込んだ。筆者は、あらためて、この本の資料としての価値を再認識したところである。

今のところ、映像化された作品では、D.パグマドラムがD.ナツァグドルジの妻としての側面からではなく、女性解放の先頭に立って活躍した女性であるという描かれ方がされていない。しかし、E.チメッドツェレンの著作がある限り、いつか、描かれるだろうと期待する。

おわりに

E.チメッドツェレンの著作は読まれても、D.パグマドラムについて書かれたところは、無視されたり、忌避されたりしていたのかもしれない。著者であるE.チメッドツェレン自身も同様の扱いを受けていたかもしれない。筆者がE.チメッドツェレンの女性史に興味を持っていると言うと、「マルクス主義の歴史観は古い」とか、「今はモンゴル帝国時代の王妃の研究が主流だ」とか、まともに取り合ってもらえず、様々な理由で興味を削ぐようなことを言われてきた原因は、ここにあったのかもしれない。

また、他にも、そういう女性が、この本の中に書かれているかもしれない。

<文献>

- O.Батсайхан (2016) “Монголчууд : 1924–1959 онд” АДМОН принтинг (O.バトサイハン (2016) 『モンゴル人たち : 1924–1959年』アドモン社)
- БНМАУ-ын Шинжлэх Ухааны Академи Түүхийн хүрээлэн (1969) “БҮГД НАЙРАМДАХ МОНГОЛ АРД УЛСЫН ТҮҮХ” : боть 3 (翻訳 : モンゴル人民共和国科学アカデミー歴史研究所 (1969) 『モンゴル人民共和国史』第3巻)
- БНМАУ-ын Шинжлэх Ухааны Академи Түүхийн хүрээлэн (2004) Монгол улсын түүх : боть 5. 20-р зуун (翻訳 : モンゴル国科学アカデミー歴史研究所 (2004) 『モンゴルの歴史』第5巻)
- Н.Гэрэлсүрэн, Д.Алтай (2008) “Монголын эмэгтэйчүүдийн байгууллагаа”, Улаанбаатар (翻訳 : N.ゲレルスレン, D.アルタイ (2008) 『モンゴルの女性組織』、ウランノールタル)
- С.Мөнхжаргал, Д.Цэдэв, С.Лувсангомбо, Т.Жадамбаа, Я.Шархүү (2007) Улаанбаатар : Хотын хөгжил, АДМОН принтинг (S.ムンフジャルガル他 (2007) 『ウランノールタル : 都市の発展』アドモン社)
- Х.Мэндсайхан (2021) “Пагмадулам”, Мөнхний Үсэг хэвлэлийн газар (翻訳 : Kh.メンドサイハン (2021) 『パグマドラマム』、永遠の文字印刷所)
- Д.Нямаа (2009) “Их Д.Нацагдоржийн гэргий Пагмадуламын амьдрал, аж төрөл”, УБ (翻訳 : D.ニヤマー (2009) 『文豪ナツアグドルジの妻パグマドラマムの人生』)
- Э.Чимэдцэрэн (1973) “БНМАУ-д эмэгтэйчүүдийг нийгмийн дарлалаас чөлөөлсөн түүхэн туршлага”, УБ (翻訳 : E.チメッドツェレン (1973) 『モンゴル人民共和国における女性を社会的抑圧から解放した歴史的経験』)
- Э.Чимэдцэрэн (1983) “Монголын эмэгтэйчүүдийн мэдлэгийн уламжлал дэвшлийн зарим асуудал” УБ、(翻訳 : E.チメッドツェレン (1983) 『モンゴル女性の知識の伝統と進歩の諸問題』)
- Ц.Цэцэгжаргал (2009) “Монголын эмэгтэйчүүд. XX зуунд : хувьсал, өөрчлөлт”, УБ (Ts.ツェツェグジャルガル (2009) 『モンゴル女性の20世紀 : 変容と変化』)
- 今岡良子 [E.チメッドツェレンの最後の著書『モンゴル女性の知識の伝統と進歩の諸問題』を再考する] 「アジア現代女性史」13号
- 今岡良子 [2つの三世代の「秘史」—E.チメッドツェレンの「三世代の歴史」と息子のJ.ボルの「私の母 思い出」] 「アジア現代女性史」14号
- 今岡良子 [モンゴル国の番組「100年の100人の女性たち」の中のE.チメッドツェレン] 「アジア現代女性史」15号

- 岡田和行 (1983) 「ダシドルジーン・ナツアグドルジと「わが故郷」」、「東京外国語大学論集」第33号
岡田和行 (1991) 「反逆の詩人レンチニー・チョイノム」 「東京外国語大学論集」第42号
岡田和行 (2006) 「ナツアグドルジの1932年の投獄と獄中書簡について」 「東京外国語大学論集」第72号
岡田和行 (2009) 「ツェンディーン・ダムディンスレンと「知識人の迷妄」をめぐって」 「東京外国語大学論集」第79号
芝山豊 (2005) 「D. ナツアグドルジ「黒い岩」をめぐって」 「モンゴル研究」22号
芝山豊 (2007) 「D. ナツアグドルジの手稿「黒い岩」のデジタル解析」 「モンゴル研究」24号
南滿洲鉄道株式会社庶務部調査課 編 (1927) 『外蒙共和国』 大阪毎日新聞社

<映像資料>

芸術映画 'Саруул талын ерөөл' (『輝く草原の祝詞』) 1984年制作。監督R. ドルジパラム、D. ナツアグドルジ役: D. グルセド、D. パグマドラム役: S. サラントヤー
<https://www.youtube.com/watch?v=TFERuWdVTIg&t=1010s>

テレビドラマ "Их Нацагдорж" 『文豪ナツアグドルジ』 2007年に国営放送のカラー放送40周年記念番組として制作された。監督G. ジグジドスレン、D. ナツアグドルジ役: Sh. ビャンソツォグト、D. パグマドラム役: B. バトソミヤ <https://www.youtube.com/watch?v=5z1GqRyt0IU>

芸術映画 'Харанхуй хад' (『黒い岩』) 監督B. ツォグトノヤル、D. ナツアグドルジ役: G. バヤルブー、D. パグマドラム役: E. プレブジャルガル 2016年劇場公開
<https://www.youtube.com/watch?v=-tLXsQBz04>

教養番組 "Д. Пагмадулам. Бүрхэг шөнийн тэргэл саран" (翻訳: 『D. パグマドラム。曇った夜空の満月』) 2016年に放送された。 <https://www.youtube.com/watch?v=EuQk79u-054&t=2029s>

教養番組 "Зууны 100 эмэгтэйчүүд" (『モンゴルの100年の歴史を創った100人の女性たち』) 「光を見て、光り輝いた純白の真珠D. パグマドラム」 2021年放送
<https://www.youtube.com/watch?v=BseJd2voId4>

<インターネット上の新聞情報>

П. Бадрч, "Шанзны эгшигнээс тасарсан дусал хар нулимс" (P. バダルチ「シャンズ(三味線)の音色から溢れた黒い涙

<http://soronzon.blogspot.com/2009/07/blog-post_18.html> 2009年7月18日付ナソロンボン紙

"Бүрхэг шөнийн тэргэл саран" (『曇った夜空の満月』)

<<http://time.mn/k0n.html>> 2016年11月17日付 タイム紙

Д. Нацагдоржийн гэргий Д. Пагмадуламын эмгэнэлт тавилан (D. ナツアグドルジの妻D. パグマドラムの悲劇的な運命) <https://www.tolgoilogch.mn/_Inf22aqrw3> 日付不明 歴史紙

Д. Пагмадуламын тухай онц сонирхолтой роман бичжээ (D. トウルバト 『D. パグマドラム』という小説を書いた) <<https://news.zindaa.mn/2ctf>> 2018年5月7日付 ジンダー紙

Зохиолч Д.Нацагдорж, Д.Пагмадулам нарыг тагнуулын ажилд ашигласан уу (作家D.ナツァグドルジ, D.パグマドラムらを諜報員として利用したのか) <<http://time.mn/o3Q.html>> 2020年2月27日付
タイム紙

Х.Мэндсайхан : Д.Пагмадулам Монголын бүсгүйчүүдийг эрх чөлөө рүү хөтлөгчдийн нэг (Kh.メンドサイハン : D.パグマドラムはモンゴル女性を解放するリーダーの一人である)
<<https://amjilt.news/32855>> 2020年3月12日付 アムジルト紙

Их зохиолч Д.Нацагдорж, түүний гэргий Д.Пагмадулам нарын хөшөөг бүтээв (偉大なる作家D.ナツァグドルジ、その妻D.パグマドラムたちの銅像を建立した。)
<<https://www.montsame.mn/jp/read/231064>> MONTSAME 2020年7月10日付 モンツァメ紙

1924 он : МОНГОЛЫН ЭМЭГТЭЙЧҮҮДИЙН ХОЛБОО БАЙГУУЛАГДСАН ТҮҮХ (1924年:モンゴル女性連盟を設立した歴史)
<<https://www.sonin.mn/news/culture/123359>>2021年8月2日付 ソニン紙 (ゾーニー・メデー紙)

Анхны Үндсэн хууль батлалцсан Эмэгтэй Д. Пагмадуламыг цагаатгалаа. (最初の憲法の制定に加わった女性D.パグマドラムの名誉を回復した。)<<https://ardmedee.com/24150/>>2021.12.22日付
アルド・メデー紙

椿油に濡れた髪をすつと梳き放って*

—社会主義、女性主義、地域主義、革命家 ^{チョン・チルソン} 丁七星の二重叙事研究—

^{チン・ソニョン}
陳善榮** (訳者 鄭享玉)

目次

- I. 初めに： 私たちが社会主義女性革命家を記憶しなければならない理由
- II. 女性としては私だけだった、自叙伝を書く
- III. 私はこういうことをしたい、論評叙事を書く
- IV. 終わりに

概要

^{チョン・チルソン}
丁七星の生涯と思想を追跡する作業は、近代社会主義運動史、女性史、文学史、マスコミ史が交差する地点に置かれている。これまで、丁七星の履歴および思想に誠実に光が当てられてこなかったため、本稿は丁七星という社会主義女性運動家の人生を、年代順に調べた。3・1運動以前～日本留学と共に色々な団体を組織しクヌフエ権友会を創立するまで～権友時代～権友会解消以後～解放以後の順に整理し、丁七星の声が生き生きと伝えられるように、彼女の自叙伝から句を直接引用した。丁七星が発表した論評を社会主義、女性主義、地域主義に区分したのは、思想の鮮明性を浮き彫りにするためであり、これを土台に理論と運動を総合化しようとした。

丁七星の人生は、伝統から近代へと進む植民地過渡期を生き抜いた一人の女性のミクロ史ではない。丁七星自身の存在論的・社会的経験をもとに、現実を冷徹に認識し、闘争的なやり方で当代と拮抗した。これが力強い植民地運動史と重なる時、丁七星の生涯は植民地女性史になりうるのだ。さらに、丁七星は人生の目的意識を社会主義女性運動と講演、

* この研究はアモーレパシフィック財団の学術研究費の支援を受けて行われた。

** 陳善榮, 梨花女子大学国語国文学科 助教授

投稿日：2019年10月22日 審査完了日：2019年12月6日 掲載確定日：2019年12月12日

DOI URL : <http://dx.doi.org/10.17792/kcs.2019.37..251>

論評を通じて無産大衆と共感、疎通しようと努力した人物だ。その努力は洗練されてはいなかったが、少なくとも正直になろうとした潔白な人物だった。疲弊した人生の経験から発生した社会的争点である階級、ジェンダー、組織の問題が強烈な主体意識を生み、それが丁七星という女性革命家の物語を支配している。

キーワード：丁七星、^{チョン・クムジュク}丁琴竹、妓生、社会主義女性運動、女性革命家、地域主義、権友会

I. 初めに：私たちが社会主義女性革命家を記憶しなければならない理由

植民地時代の女性活動家を理念によって左右に色分けし、彼らの諸側面を調べた論文を見ると、左側に位置する女性活動家たちは一つの共通点がある。その共通点は、生物学的条件でも、定着した方向でもない。名前の横にある括弧の中に閉じ込められた疑問符 (?) である¹。右側に位置するキリスト教・自由主義系の女性活動家たちは、誕生と死亡年代が明確に整理され、活動像や歴史の中の座標が明確に記録されたことと対照的だ²。さらに、

¹ キム・ギョンイル 「新女性、社会主義、伝統と西欧理論」『梨花女子大学アジア女性学センター学術大会資料集』2005、p3-15

出生年度	社会主義系列	キリスト教／自由主義／急進主義系
1880		キム・ミリサ 金美理士 (1955)
1890	ユ・ヨンジュン 劉英俊 (?)	
1896	チョン・ジョンミョン 鄭鍾鳴 (?)	ナ・ヘソク 金・ミョンスン 羅蕙錫 (1948)、金明淳 (1951)
1897		ユン・シムドク パク・インドク 尹心惠 (1926)、朴仁德 (1980)
1898		ファン・シンドク パク・スンチョン 黄信德 (1983)、朴順天 (1983)
1899	パク・ウォンヒ 朴元熙 (1928)	キム・ファルラン イム・ヨンシン 金活蘭 (1970)、任永信 (1977)
1900	イ・ドギョ 李德耀 (?)	
1901	チュ・セジュク 朱世竹 (?)	
1902	ホ・ジョンスク 許貞淑 (1991)、 ^{イ・ヒョンギョン} 李賢卿 (?)	
1904	コ・ミョンジャ 高明子 (?)、 ^{キム・ジョイ} 金祚伊 (?)、 ^{キム・ピルス} 金必壽 (?)	チュ・ウンヒ イ・スクチョン 崔恩喜 (1984)、李淑鍾 (1985)
1905	カン・ジョンヒ 姜貞姫 (?)	ソン・クムソン 宋今璇 (1987)
1906	チュ・ウォンスク 趙元淑 (?)、 ^{パク・ホジン} 朴昊辰 (1934)	ベ・サンミョン 裴祥明 (1986)
1908	チョン・ナルソン 丁七星、(1957?)	
1909		モ・ユンスク 毛允淑 (1990)

² キム・ギョンエ、「羅蕙錫の女性解放論の実現と葛藤」、『女性と歴史』19、2013、p263-297；キム・ソンウン、「日帝の植民地時期 黄信德の現実認識と運動路線の変化の様相」、『韓国人

1990年代から男性社会主義者に対する研究が量的に増加したとと比較した時、これはさらに深刻な現象だ³。疑問符は今まさにこの場、研究の現実的条件を問いかけ、反省を要求する。

今すぐこの場で、「丁七星」の名前を呼んでみる。近代女性主義研究者、あるいは歴史、文学、マスコミに関連した研究者なら、丁七星という名前を一度は聞いたことがあるはずだ。私たちが聞き知っている丁七星は、どのような地点に位置しているのか？ 丁七星は7歳で妓生になり、20歳前後で朝鮮の5大名妓となった。1919年、3・1運動が起きると「椿油に濡れた髪をすつと梳き放って、一躍民族主義者になった」⁴と云うのだから、妓生の丁琴竹が丁七星に生まれ変わったのだ。暗い夜、長い航海に発つ時、私たちに道案内になってくれた星、北斗「七星」、人生の大きな転換を予告するドラマチックな命名だ。権友会を守っていた女性労働者の友人だった丁七星が経験した組織と現場は、韓国社会主義女性運動史になったが、依然として丁七星は疑問符の中にある。疑問符を感嘆符に、これが本研究の出発点である。

丁七星に関する先行研究は、植民地時代の女性運動史を包括する研究において最初に確認される。1920年代、女性活動を民族主義と社会主義系列に大別し、無産女性の解放を綱領とする女性団体朝鮮同友会と民族解放運動の協同戦線論に基づいて創立された権友会を中心に、丁七星の基本的な活動が確認される⁵。以前の学位論文は植民地時代の女性運動と

物史研究』、23、2015、p283-325；キム・ソンウン、「1920~1930年代の金活蘭の民族文化認識」、『女性と歴史』26、2017、p81-110；ペク・オクキョン、「近代韓国女性の日本留学と女性の現実認識」、『梨花史学研究』39、2009、p1-28；ソン・ミョンヒ、「金明淳に新女性の道を探ねる」、知識と教養、2017年；シム・オクキョン、「1920年代の韓国女性運動考察：キリスト教系女性運動を中心に」、慶南大学修士論文、2005；オ・スクヒ、「韓国女性運動に関する研究：1920年代を中心に」、梨花女子大学修士論文、1987；ユン・ジョンラン、「日帝下韓国女性の存在形態-1930年代キリスト教女性の活動を中心に」、『国史観論叢』94、2000、p65-102；イム・ヨンシン「私の40年闘争史：建国60周年記念の年を迎えて」、ミンジ社、2008；チェ・ジョンソン、「朴順天の政治リーダーシップ研究」、国民大学博士論文、2008；ハン・ソンヒ、「日帝下朴仁徳の生涯と思想：民族、女性、信仰を中心に」、梨花女子大学修士論文、2016。

³ カン・ミンウ、「金若水の現実認識と民族運動」、西江大学修士論文、2015；キム・ギョンイル、「李載裕、私の時代、私の革命：1930年代ソウルの革命運動」、青い歴史、2007；キム・ジュヒョン、「金周鳳の民族運動と社会主義認識」、安東大学修士論文、2009；キム・ジュンヨプ、キム・チャンスン、「韓国共産主義運動史」、清溪研究所、1986；ソ・ギョンソク、「而丁 朴憲永一代記」、歴史批評社、2004；イ・ヒョンヒ、「趙東祐の抗日闘争史：急進的抗日闘争家の一生」、チョンア出版社、1992；チャン・ソクフン、「権五高の民族運動路線と性格」、『韓国近現代史研究』19、2001、p207-234；チョン・テヨン、『曹奉岩と進歩党：ある民主社会主義者の生と闘争』、フマニタス、2006

⁴ 朴貞愛、「3.1独立運動に飛び込んだ「思想妓生」社会主義運動家として活動」、『ハンギョレ』、2008.8.16

⁵ クォン・ヒョン、「1920-1930年代の「新女性」と社会主義-新女性からプロ女性へ」、『韓国民族運動史研究』、18、1998、p101-128；キム・ギョンイル、「1920-30年代韓国の新女性と社会主義」、『韓国文化』、36、2005、p249-295；パク・ヘラン、「1920年代社会主義女性運動の組織と活動」、梨花女子大学修士論文、1993；ソ・ヒョンシル、「情熱の女性活動家

いう共通した特性に基づいて、より多くの対象を包括して外縁を拡大することに目的があったため、同じ系列内の女性リーダーの個性性は薄められた傾向がある。植民地時代の独立のために努力したが、記録から漏れた人物を短いエピソードやイシュー中心に扱った単行本でも少なからず丁七星の名前が目につくが、たいていは好奇心を誘発するプライバシーに焦点を置いたり、「思想妓生」（解語花）という点に集中している⁶。

最近行われた個別研究であるノ・ジスンの研究は、丁七星の生涯と活動を単一論文にまとめた初めての試みという点で意義がある。ノ・ジソンは、丁七星の政治的覚醒において重要なキーワードとして「感情」を抽出する。丁七星は妓生としての不当な現実の中で、自分も平等な人間であることに気づき、社会主義者としてその不当さを解消しようと努力したと整理した⁷。ノ・ジソンは丁七星だけの経験と覚醒が、他のエリート女性社会主義者たちと弁別されることで、それが権友会解消以後にも、丁七星の人生を独立的なものとして鑄造したと判断した。

パク・スンソプの論文は、社会主義系女性運動の普遍的特徴と、その中に内在した特殊性を最も集約的に表わすことができる人物である丁七星に注目し、1920~30年代の活動を把握した。2度にわたる東京留学で、ベーベルと山川菊栄の社会主義女性運動論を受け入れ、朝鮮女性同友会の結成を通じて社会主義女性運動界の統合を牽引し、評価した。1929年、権友会中央執行委員長に選任され、これまでの運動方式を権友会という全国的組織レベルで具現しようと努力し、宣伝組織の強化と労農部新設などを通じて女性の無産階級性の自覚を強調する女性解放論を堅持したと叙述した⁸。パク・スンソプの論文は、これまで多少不十分だった丁七星思想の履歴を、東京留学から出発して権友会解消に至るまでの行

許貞淑、「『女性と社会』3、1992、p198-222；シン・ヨンスク、「日帝下韓国女性社会史研究」、梨花女子大学博士論文、1989；ヤン・マンウ「権友会抗日武装組織的女性運動主導（独立運動秘史11）」朝鮮日報 1995.8.5；オ・スクヒ、「物語女性史（8）権友会」、京郷新聞、1991.3.25；チャン・ヨンウン、「生存と作文：女性社会主義者の自分語り」、『比較韓国学』25、2017、p71-95；チャン・インモ、「1920年代権友会本部社会主義者たちの女性運動論」『韓国史研究』142、2008、p367-419；チョ・ギョンミ、「1920年代、女性団体運動に関する研究-社会主義女性団体を中心に」、淑明女子大学修士論文、1990

⁶ キム・ギョンイル他、『韓国近代女性 63 人の肖像』、韓国学中央研究院出版部、2015；キム・ソンドン、「花束も墓もない革命家たち」、朴鍾哲出版社、2014；キム・ジュンソン、イ・スミン、「一体愛とは何だというのですか？：大邱の3人の妓生「琴竹 丁七星」、「蟾柯 玄桂玉」、「道天 康明花」の物語」、ソトン、2015；キム・ヒョンモク、「丁七星、「思想妓生」から女性活動家に変身する」、「独立記念館」346、2016；大邱史学会編、「嶺南を知れば韓国史が見える」、青い歴史、2005；ソ・ジョン、「植民地時代の妓生研究」、『韓国古典女性文学研究』10、2005、p433-464；ソン・デギョン編、「時代を先取りした人々」、ソニン、2014；シン・ヨンスク、「女性が女性を歌う」、ヌルプムプラス、2015；安載成、「失われた韓国現代史」、人文書院、2015；イ・ヌンファ著、『朝鮮解語花史』、イ・ジェゴン訳、東文選、1992；チョン・ウニョン、「朝鮮の娘、銃を持つ」、人文書院、2016；ピョ・ハンニョル、『（教科書に載せられなかった）エピソード独立運動史』、アルフィー、2017

⁷ ノ・ジソン、「ジェンダー、労働、感情、政治的覚醒の瞬間：女性社会主義者、丁七星の生涯と活動に関する研究」、『比較文化研究』43、2016、p7-50

⁸ パク・スンソプ、「1920-30年代 丁七星の社会主義運動と女性解放論」、『女性と歴史』26、2017、p245-271

間を綿密に把握し、これを通じて丁七星だけの独自性を他の社会主義女性運動家たちと弁別する形を取った。反面、丁七星の女性解放論をもう少し具体化できる資料が不足しており、研究時期が1930年代までに限られているため、権友会解消以後の丁七星の変化など生活と思想の全貌を確認するのに多少もの足りない感がある。

これまでの研究は、丁七星の生涯と思想という総合的な研究を遂行するための当為論的証拠である。これらの研究を通じて仮説を立て、方向と座標を設定することができたため、本研究は次のような研究目標を持つ。本稿の根本的な研究目標は、丁七星という社会主義女性活動家に対して新しく光を当てることだ。丁七星の自分語りの文章は、女性として主体的に自分を確立する過程で発見する民族、女性、階級、組織に対する深い認識の結果だった。この時の叙事は二重的意味だが、植民地時代を社会主義女性運動家として生きていた丁七星個人の「自分語り」と彼女の「思想的作文」としての叙事に対する考察だ。

まず本論の第一章では、女性の私的な個別叙述を自分語りの側面から見ていく。研究方法論としての自分語りとは、話者が自分自身に関する話をそれが事実だという前提に基づいて陳述し、自分の人生を全体として省察し、その意味を追求する特徴を持つ作文様式だと言える。したがって、自分語りは単一のジャンル概念ではなく、多様なジャンルを包括する。女性史の伝統において、自分語りは女性の存在論的位置と現場を再構築する実証的性格とともに、当代社会で発話できなかった多様な女性の声を再現する重要な史的価値を持つようになる⁹。

丁七星には、豊かな自分語りが存在してはいないが、随筆、回想記、アンケート調査に対する応答などを中心に、散らばった自叙伝を収集し定量化する作業が忠実に行われなければならない。植民地の矛盾を克服するための批判的挑戦と革命の実験は最大の問題であり、これに対する成功と失敗・挫折は、丁七星の自分語りに記録されているため、丁七星の人生自体は探求に値するテキストになる。本稿は丁七星の自分語りを年代順に構成し、小見出しは丁七星の声が生々しく伝えられるように自叙伝の句を直接引用した。

本論の第2章では、丁七星の思想に対する総体的な理解のために、論評という叙事を通じて組織を代弁する思想の肉声の全貌を把握しようと思う。丁七星は社会主義女性運動陣営の代表的な政客であり論客だった。丁七星が残した40編余りの論評は、植民地時代の女性として生まれて生きて女性的経験を土台に反省し覚醒した結果だ。丁七星が発表した論評を中心に、彼女の思想を社会主義、女性主義、地域主義という主題に分類し、これを土台に理論と運動を総合化しようとした。論評で確認される丁七星の思想は明確に弁別されないが、思想の鮮明性を浮き彫りにするために5節に分けた。

⁹ パク・ヘスク、チェ・ギョンヒ、パク・ヒビョン、「韓国女性の自己叙事(1)」、『女性文学研究』7、2002、p323-349; パク・ヘスク、「女性自己叙事体の認識」、『女性文学研究』8、2002、p7-30; イ・ユミン「女性主義 自己治療の方法を模索: 自己告白作文を中心に」梨花女子大学修士論文、2016; イ・ジュミ、『女性の自己叙事自己表現』、ジェイアンドシー、2009

II. 女性としては私だけだった、自叙伝を書く

1. 私の体が花柳界に投げ込まれている時（1897-1919）

丁七星は 1897 年大邱^{テグ}で生まれ、8 歳で妓生になり、ソウルに上京して丁琴竹という技名で 22 年を暮らした¹⁰。この時期、妓生たちがおよそ 12~3 歳で養女として売られ、妓生学校に入ったことを考えると、早い年齢で妓生になったわけだ。先行研究を参考してみると、丁七星と関連していくつかの説と誤りが確認されるが、これを正さなければならぬだろう。丁七星の妓名と券番がそれだ¹¹。

丁七星の妓生生活に関する具体的証拠は、『朝鮮美人宝鑑』¹²で確認された。本に載せられた大正券番の妓籍によると、丁七星の妓名は丁琴竹だ。琴と竹、詩と音楽の両方に堪能だった彼女にふさわしい名前だ。丁七星は当時、朝鮮随一の妓生組合だった大正券番に籍を置いたが、漢南券番を作るにあたり先頭に立って、三南（忠清道、全羅道、慶尚道）出身の妓生たちが定着できるように助けたりもした。1918 年当時、21 歳の年齢で、原籍は慶尚北道大邱府であり、現住所は京城府清津洞 77 番地になっていた。技芸としては、時調、南中雑歌、カヤグム散調、並唱、立唱、座唱、宮廷舞踊 12 種、囲碁が記されている。

ほとんどの妓女が 2、3 種類の技芸を並べたのに対し、丁琴竹は 2 行にわたって 8 つの技芸が書かれており、特に踊りよりは、カヤグム（伽耶琴）と歌唱に長けていたものと見

¹⁰ 思うに、私は今から 30 年前、当時の李朝末期、偶然の機会に当時の大邱觀察使の宴会を見物することになり、その妾の地位を羨ましがって、すぐに隣の妓生の家に通って勉強だと始めたが、天才だと言われると、やむを得ず両親がその道に出すことになった。その時 8 歳だった。

（丁七星、「著名人物一代記」、『三千里』9 卷 1 号、1937.1.）

¹¹ 表 1. 丁七星上京時期、妓名、券番に関する先行研究

単行本	上京時期		妓名		券番	
	1908 年	1916 年	錦竹	琴竹	漢南券番	大正券番
『韓国社会主義人名辞典』（1996）			○		○	
『嶺南を知れば韓国史が見える』（2005）		○			○	
キム・ジュンスン論文（2011）		○		○	○	
『時代を先取りした人々』（2014）			○		○	
『失われた韓国現代史』（2015）			○		○	
『朝鮮の娘、銃を持つ』（2016）		○	○		○	
ノ・ジンスンの論文（2016）				○		○
パク・スンソプの論文（2017）		○	○		○	
文化コンテンツドットコム		○		○	○	

¹² 朝鮮研究会編、『朝鮮美人宝鑑』、イ・ジンウォン解題、民俗院、2007；ホン・ヨンシン、「1910 年代ソウル地域券番研究：妓芸を中心に」、中央大学修士論文、2010；イ・ソルヒ「『朝鮮美人宝鑑』に現れた妓生組合と券番に関する考察、韓国芸術総合学校 伝統芸術院修士論文、2009

られる。また、大正券番 182 人の妓生の中で、唯一囲碁が技芸に書かれているのがまた特異点といえるが、丁琴竹は当時「囲碁が上手い妓生」として名を馳せたという。

丁七星は自分が妓生だったことを隠さなかったが、妓生として記憶されることを望まなかったため、妓生生活に言及することに非常に慎重で、人生でも極度の潔癖性を見せた。丁七星が、分断以前の時代にカヤグム、南道ソリで有名になったことから、どの会席でも一等賞は独り占めしそうなのに、才能を絶対見せないという不満の声や¹³、生活苦に苦しみながらも梨花専門音楽科からカヤグムの教授を要請されたものの、断ったこと¹⁴からもこのことが分かる。

丁七星が自分の過去について回想した文は十数編余りあるが、「2、3ヶ所の名門大家の小室になるかと思えば、ある官僚の嫁になったこともあった」¹⁵という記録は、彼女の平坦ではなかった人生に対して同情の視線を抱かせる。だが、「教奇な生活」に対する記憶が「恨めしくて涙ぐましい」反面、「嬉しくて愉快的」記憶も共存するという事実は異彩を放つ。特に男装をして乗馬をした記憶はとてさわやかな気分を与えたが、当時乗馬を学んだ理由も活動写真のヒロインたちのように「馬も上手で喧嘩も上手で朝鮮で有名な女丈夫」¹⁶になりたかったという所感は丁七星の気概をうかがわせる。丁七星にとって妓生という位置は開放性、ダイナミズムと共に新しい主体性を模索できる契機になったと見られ、好奇心旺盛で賢かった丁七星はこの時間を無駄に過ごさなかった。

妓生のイメージは朝鮮の男性的な「伝統」と新しく訪れた「近代」によって歪曲されたまま大衆に強要され、さらに日本の植民地を経て性的消費の対象にまで転落してしまった。したがって、現代の韓国社会で妓生という存在は、すでに消滅した前時代の遺物として認識された¹⁷。しかし、妓生たちは押し寄せる近代化の洪水の中に、ただ自分を任せておきはしなかった。むしろ近代文化と通称される西欧的な新文物を主体的かつ積極的に受け入れ、ひいては保守的な当時の時代的流れを打破し、開化のための先駆的な役割を果たした¹⁸。

このような側面で丁七星はその最前線にいた。1919年、3・1運動をソウルの真ん中で経験し、「深い意味は分からないが、鐘路交差点に立って眺める若い胸は興奮にあふれる熱い涙を流しながらその後を追って」歩いた丁七星は、「椿油に濡れた髪をすっと梳き放って、一躍民族主義者になった」¹⁹。

¹³ 「名男名女 年末隠し芸余興競技大会」、『別乾坤』10、1927.12。

¹⁴ 「聞いた風月記」、『三千里』7巻8号、1935.9

¹⁵ 丁七星、「著名人物一代記」、『三千里』9巻1号、1937.1

¹⁶ 丁七星、「義憤公憤心談構想 最も痛快だったこと：男装して馬を走らせる時」、『別乾坤』8号、1927.8

¹⁷ チョン・ヘヨン、「近代の成立と妓生の没落：近代文学に現れた妓生のイメージを中心に」、『韓中人文研究』20、2007、p235-265

¹⁸ キム・ジュンソン、「近代化の担持者妓生 I-大邱地域文化コンテンツとしての可能性」、『韓国学論集』43、p161-194

¹⁹ 朴貞愛、前の記事

2. 血の通った人間なら、誰でも飛び込まずにおけない (1919-1927)

この時期は 3.1 運動で大きな悟りを得て、妓生から思想運動家への変身がなされた時期で、丁琴竹から丁七星への変化が敢行された激動期だ。丁七星は 1922 年、英語圏の国に留学するために英語を学習する目的で日本に留学し、東京の英語講習所で修学する。翌年、帰国して故郷の大邱に帰って物産奨励運動に参加し、同年 10 月に李春壽イ・チュンスと共に大邱女子青年会創立を主導、執行委員として活動した。1924 年 5 月、許貞淑ホ・ジョンスク、鄭鍾鳴チヨン・ジョンミョンなどと共に朝鮮女性同友会を結成し、一般婦人を対象に同志の糾合に努力した。1925 年、慶尚北道単位の思想団体である四合同盟を結成する。

この時、再び日本に渡って女子技芸学校に入学し、李賢卿イ・ヒョングン、黄信徳ファン・シンドクなどの留学生たちと共に思想団体である三月会を組織、日本の社会主義女性活動家山川菊栄と交流する²⁰。女子学生学興会幹事として活動する一方、三月会で『女性と社会』というパンフレットを発刊することに力を注ぎ、当時活動していた女流雄弁家たちが引退を準備していた時に「その後を継いで演壇に毎日のように上がって演説をした者は、女性としては²¹丁七星だけだった。これらの経験は、その後各団体を代表する演説者としての基礎となった。東京留学時代の意義深い思い出として、左翼方面の書籍を熱心に読んだこと、その中でもベーベルの『婦人論』に大きな感動を受けたという。この本は家族や社会の中での女性の地位と役割を社会経済的土台を中心に分析した本で、女性解放がすなわち人間解放の前提だと主張しているが、丁七星はこの本を朝鮮女性に必ず読んでほしかったという。

二度の渡日はロマンチックな感受性に浸った子どもっぽい行動ではなかった。丁七星は幼い頃に大変苦勞をし、10 代後半に色々な社会現実を自ら体験したので、とんでもない空想やロマンチックな甘い夢のようなものは見たことがなかったという。かなりな年齢になって初めて入った学校だったので、ひたすら学生時代を価値があり有益なものとして過ごすために努力した。

丁七星は、自分が厄介な目に遭う度に、男として生まれたら、あるいは百万長者の一人娘として生まれたらという空想をしたと告白した。だが、このような考えは強固な意識が固まる前であり、社会に対する自身の地位と義務を悟ってからは、血の通った人間ならば誰でも飛び込まずにおけない、その「仕事」に全身を捧げると誓った²²。そのことは二度の東京留学をきっかけに、自然的存在から社会的存在に生まれ変わることを指しており、その存在論的変転から、社会主義女性運動への邁進を指向点にした

²⁰ 宋連玉、「山川菊栄と黄信徳：帝国日本と植民地女性リーダーの出会いとすれ違い」、『女性と歴史』15、2011、p159-178

²¹ 丁七星、「女流文章家の心境打診、「現実」を見つめようとする女流評論家」、『三千里』7 卷 11 号、1935.12

²² 丁七星、「私が生まれ変わったら？ 金持ちもみんな嫌いだ、やはり今のような働き手で」『三千里』1 号、1929.6

1926年、日本に滞在して三月会幹部の名で「新女性とは何か―価値大暴落の過ちは誰に」、
「真の自由への道」を発表し、本格的な社会主義的論評を書き始める。6月前に帰国して
新幹会京城支部設立に参加し、幹事および新幹会本部の議案作成部員として活動した。

3. 虐待を受ける朝鮮女性の救出に努力（1927-1931）

この時期は1927年に権友会を結成し、1931年に権友会が解消された時期を言う。1927
年5月27日、丁七星は兪珥卿^{ユ・ガッキョン}、黄信徳、許貞淑などと共に新幹会の姉妹団体である「権
友会」結成に参加し中央執行委員、宣伝組織部委員として活動し、7月に中央執行委員長
に選出される。消えない歴史的意味を帯びた女性団体権友会で丁七星は組織の責任者とし
て戦線各地を巡回し、1928年沈恩淑^{シム・ウンソク}、趙元淑^{チョ・ウォンスク}などと共に権友会京城支部を、黄信徳な
どと共に大邱支部を創立するなど外縁拡大に努力した。

大衆の目には女性運動指導者は全朝鮮を自由に行き来しながら爽快な生活をしているよ
うに映ったが、それは見かけだけであり、実状は「ひもじい腹を抱えて歩き回っている」
有様だった。男性批評家たちは、女性運動指導者（権友会中央委員長丁七星氏）にインタ
ビューしながらも、「清らかだが痩せてはいない鶴のような（丁七星）氏」、「椿やつつ
じというより房が大きく長く咲く百日紅とか、香りの強いバラの花というよりこぢんまり
とした梅の花」²³と比喻し、得意の笑みを浮かべた。相変わらず在来の時代に、彼女たち
は、ひたすら「大衆のために個人を犠牲にするその偉大な精神だけを本意」²⁴として持つ
て、非難と困難を黙殺し、険苦を歩んだ。この時期の社会主義女性運動の目標は「現実を
正しく認識する朝鮮女性の覚醒」にあり、これを文章で発表したことや言葉で叫んだこと
でも、丁七星は彼女の名前のように、運動の最前線で道しるべになった。

1929年、丁七星は権友会第2回全国大会準備委員会議案部責任者であり、再び権友会
中央執行委員長に選出された。権友会委員長として全国を巡回し女性の階級意識、抗日意
識を鼓吹させる講演をして数回検挙され、その以後も合法的非合法的闘争に従事し、要監
視人物として当局の監視を受けた。この時期、キリスト教界の人物の何人かが権友会と決
別し、権友会組織に根本的な変化が断行された。丁七星精神は着実に宣伝啓蒙活動と労働
女性の組織化および女子学生運動の活性化を支援し、特に託児所設立などを重点的事業と
して図った。

1930年1月、朝鮮劇場で中学生たちが光州学生運動に対する激文を撒いた事件が起こ
ると、この事件にかかわった疑いで、自分の家に遊びに来た人々と共に京畿道警察部高等
課に検挙されたが、釈放される。同年3月、いわゆる「朝鮮共産党事件」と関連して逮捕、
京城で起きた万歳デモである2次京城学生デモ事件を主導した嫌疑を受けて、再び投獄さ

²³ 「名士のメンタルテスト（1）、権友会中央委員長丁七星氏」、『三千里』2号、1929.9

²⁴ 丁七星、「生活実践に出て泣き笑いする新女性」、朝鮮日報、1928.1.1

れ釈放される。闘争-逮捕-釈放-演説を繰り返す中でも、^{ナグオンドン}樂園洞に刺繍・編物を専業とする小商店「^{フノク}粉玉手芸舎」を開店、手芸品づくりを無料で教え、女性の経済的自立を促した。丁七星は「なぜ髪を伸ばしたのか、それは髪を切ってみると一般の家庭婦人と距離ができたこと」²⁵と言うほど、人生のすべての方向を朝鮮婦人の解放に置いて社会を変化させた。

1930年12月、権友会中央執行委員長を辞職し、民族主義系列の^{チョ・シンソン}趙信聖が中央執行委員長に選出される。1931年、新幹会全体大会で中央執行委員（解消委員）に選出され、新幹会解消後、外部活動を中断し、粉玉手芸舎を運営し生計を維持する。

丁七星は「過去十年にやったこと、将来十年にやること」という『三千里』アンケート調査に、権友会委員長の職責で応じながら、過去十年を社会的・経済的・家庭的に虐待を受けた朝鮮女性を救うために努めた期間と整理する。これは、先にまとめた自分語りとその証拠になるだろう。女性運動の結集のために権友会を結成し、その外縁拡大に全力を注いだ過去の10年は、韓国女性運動史の星のように輝く始まりだった。これまで得た実際の経験をもとに、やりがいのある女性事業に力を入れたいという今後10年間の抱負は、丁七星の強い自分の意志をうかがわせる。しかし「私が引き受けた女性運動の部分だけを堅く守り輝かせるように飾っていこう」²⁶という希望に満ちた計画が色あせるように、この文を発表した1年後、権友会は解体され、多くの民族運動がそうであるように、丁七星の女性運動も不本意な休養期に入るようになった。

4. 雌伏的休養期よ、早く過ぎ去るべし（1931-1945）

当時行われた多様な女性運動は、先駆者的女性たちの崇高な努力にその力を頼っているが、これが円熟した境地で一つに統一されなかったため、多様なイデオロギ的葛藤が潜在していた。丁七星も多くの文章で、団体を維持する最大の障害物として「指導者の地位にある人々が完全に統一されていないこと」²⁷を挙げたが、上記の理由で団体からの女性同志の出入りが多かった。植民期間が続くほど女性団体の円滑な運営が難しくなる状況で一緒に活動したが、今は離れた同志たちに対する懐かしさ、あるいは全盛期に対する思い出を思い浮かべる文がよく目につく。

マスコミは、女性社会主義者たちがやむを得ず休眠状態に入った1930年代半ば～後半の彼女たちの日常に関心を持った。「社会の第一線で華麗に活躍した女性たちの最近の心

²⁵ 丁七星、「私はなぜこうなったのか、私はなぜ再び長髪にしたのか」、『別乾坤』47、1932.1

²⁶ 「過去十年にしたこと、将来十年にすべきこと」、『三千里』、1930.1

²⁷ 丁七星、「先駆女性の新年新気炎：女性運動に対する抱負、指導者統一が急務、固い信念を持とう」、東亜日報、1928.1.1

境」²⁸を打診する移動座談会を開いたり、手記などを依頼して彼らが現在感じている心境をのぞいた。

社会主義女性運動を情熱的に遂行した時間（約10年）より長かった雌伏期（約15年）に、丁七星の自分語りは過去の華麗な時代に対する懐かしさを吐露したり、自分の人生と思想がこのまま終わることはできないという切迫感を表わしている。名高い8人（^{ファン・シンドク}黄信徳、^{ホ・ジョンスク}許貞淑、^{ウ・ボンウン}禹鳳雲、^{チョ・ウォンスク}趙元淑、^{シム・ウンスク}沈恩淑、^{カン}姜アグンニア、^{チョン・ジョンミョン}鄭鍾鳴、^{チュ・セジュク}朱世竹、^{イ・ヒョンギョン}李賢卿、^{ヒョン・グオク}玄桂玉）の女性たちと共に「錚々たる」時代を後にして主婦になったり、都落ちしたり、消息不明の仲間たちに対する切ない気持ち、ソウルに一人残された自分の境遇が心を苦しませる。

しかし、丁七星は自暴自棄の状態にだけとどまってはならず、新たな可能性に対する期待感を示している。「たとえ流れる時代の力にすべてが去ったとしよう。この地の上で音もなく流れる歴史に包まれて、私たちの時代もさっと過ぎてしまうのだとしよう。（中略）互いに皆落胆せず、勇気を出して時代の状況を見極め、これまで苦闘に耐えてきた体を充実させよう。いくら活動家でも昼夜を問わず走り回ることができようか、休養期が必要だ²⁹」。一つの時代は過ぎ去った。組織も運動も人々も皆解消されたが、過ぎ去ったことに切なく思う必要はなく「私たちの体にも心にも新しさがわいて、再び復活しなければならぬ。残っている仲間たちも少しも落胆せず、この地にすべての花を咲かせることに力を入れてくれ。」³⁰学生時代や権友時代は実に元気いっぱいだった時代だったが、だからといって今がその熱と力が永遠になくなったとか減ったというわけではない。だから今この時間は終わりではなく、もっと遠くへ走るために時を待つ雌伏期なのだ。

丁七星は権友会解消以後、雌伏期に朝鮮日報記者として1年間活動し、健康上の問題³¹で退社した後、^{キョンソク}京城、^{ピョンヤン}平壤、^{テグ}大邱、^{トンヨン}統営など全国を回りながら編物講習で生活した。当代の新聞・雑誌のアンケートに応じた丁七星の職業が「朝鮮日報記者」になっていた³²。「ジャーナリズムを通じてでも、可能な範囲内で朝鮮女性のために私の微力で支えることになった」というインタビュー³³、丁七星が記者として書いた文が問題になって抗弁書を雑誌に寄稿したこと³⁴は確認できるが、実際に丁七星が朝鮮日報記者として活動した履歴

²⁸ 「その前日、社会第一線上で華麗に活躍した諸女史たちの最近の心境」、『中央』、1935.1.

²⁹ 丁七星、「同志を思う」、『三千里』7巻3号、1935.3号

³⁰ 丁七星、「青春を惜しむ佳人哀史：名号不復還」、『三千里』17巻3号、1935.3

³¹ 丁七星はもともと体が弱かったようだ。丁七星の近況を伝えた当代の色々な雑誌によれば「また病気になってあの健康では権友会の仕事をするのが難しく、しばらく大邱の故郷の家に療養」に行ったとか「丁七星氏を見ればどうぞ元気でいてほしい」と思う風聞家の願いがたびたび確認される。（「風聞帖（三）」、『別乾坤』31号、1930.88；「京城有名人「蕩」録」、『別乾坤』34号、1930.11.）

³² 「三千里機密室」、『三千里』、七巻八号、1935.9；「気になるあの人のその後」、『三千里』8巻11号、1936.11.

³³ 丁七星、「女流文章家の心境打診、「現実」を凝視しようとする女流評論家」『三千里』7巻11号、1935.12

³⁴ 丁七星、「俄館その戦術のさまざまな面」『三千里』7巻7号、1935.8

は新聞を通じて確認できない。ペンネームや号を使ったのではないかと判断されるが、この部分は研究的補充がもう少し行われなければならない。

5. 我が兄弟姉妹は勇敢に立ち上がって (1945-1958)

丁七星にとって雌伏期が思想の転換や挫折の時間ではなかったことは、解放二日後の全国婦女同盟創立大会に姿を現したことから知ることができる。解放の三日後、1945年8月17日、全国婦女同盟創立大会は、農村部に属し、農村女性に対する啓蒙と利益を擁護する活動を始める。9月に臨時政府および連合軍歓迎準備会実行委員となり、朝鮮共産党慶北道党の婦女部長に選出、10月に左翼系女性団体である朝鮮婦女総同盟（以下、婦総）の中央執行委員および副委員長に推戴された。1946年に民主主義民族戦線の中央常任委員兼組織部次長になったが、1947年に「8.15暴動陰謀事件」に関与し、米軍政に検挙される。以後、越北して1948年南朝鮮人民代表者大会で1期最高人民会議代議員に選出、朝鮮民主女性同盟副委員長を歴任した。

この時期の丁七星の活動は、息子のイ・ドンスとの力学関係を通じて明らかになる。当時、雑誌に掲載された記事や一緒に活動した社会主義運動家の評伝や回顧録によると、丁七星に息子がいたことが確認される。「丁七星女史も彼女の愛児が東京に留学中だが³⁵⁾、というゴシップ欄の漫評や解放日報の記者だったパク・ガプトン氏は、「朴憲永氏は運転手の隣に6尺の巨体の健やかな青年を必ず連れていたが、この人が最近言われるところのボディガードのイ・ドンスだった。（彼は）丁七星の一人息子で柔道が3段で、力持ちだった³⁶⁾」と記している。

【私が良いと思う男】という文によると、丁七星は「志が同じで主義が同じ男性」、「同志として義理と道徳を守る男性」³⁷⁾に対する好感を吐露するが、これを通じて同じ運動に身を投じた男性との関係で息子（イ・ドンス）を産み、その息子を苦勞して東京留学まで行かせたものと判断される。許貞淑の回顧によると、イ・ドンスは母親が運営していた粉玉手芸舎で雑用を手伝い、以後息子の東京留学費が不足してカヤグムを再び調律することを考えるほど母子の情は篤かった。後に息子は母親の思想に同調して朝鮮共産党の責任者である朴憲永の秘書になり、朴憲永が越北する時に傍らで共に行動した。これは丁七星が雌伏期に地下に隠れていた朴憲永側と持続的な交流があったものと推測できる。この時期、丁七星は積極的に政治活動を遂行し、3年後に越北したため、随筆や回想記形態の自分語りは発見されないが、論説の合間に自分の状況に対する言及や理解を望む部分から、これを補充することができる。

³⁵⁾ 「機密室、我が社会の諸内幕」、『三千里』10巻11号、1938.11

³⁶⁾ 而丁 朴憲永全集編集委員会著、「私の知っている朴憲永」、『而丁 朴憲永全集』、歴史批評社、2004。

³⁷⁾ 丁七星、「男、私がいいと思う男-私の好きな五色男」、『別乾坤』19号、1929.2

丁七星の越北後の人生は 1955 年に朝鮮平和擁護全国民族委員会副委員長に選出され、1956 年に朝鮮民主女性同盟副委員長に被選、労働党中央委員会候補委員、1957 年に最高人民会議第 2 期代議員として活動し、1958 年の反宗派闘争当時、反革命事件に関与して肅清されたことが確認される。

III. 私はこの仕事をしたい、自叙伝書き

1. 二つの社会主義（社会主義、絲繪主義）の連帯

1923 年、社会主義思潮が急速に広がり、女性運動界にも社会主義女性解放論が流入し始め、1924 年、その影響で韓国初の社会主義女性団体である朝鮮女性同友会が結成された³⁸。朝鮮女性同友会は、新社会の建設と女性解放運動の働き手養成を綱領として組織された最初の女性団体であるだけに、女性労働者層に深い関心を傾け、丁七星は大邱地域の代表者格として同友会に参加し、女性労働者に直接対面する現場活性化に注力した。

丁七星の反資本主義・反ブルジョアジー活動は、自らが創立・発起した朝鮮同友会、権友会の綱領に従って社会主義女性解放論の一環として展開された。社会主義女性解放論は、女性の人生は階級によって決定されるため、絶対多数を占める無産女性の完全な解放を要求した。女性の解放は経済的独立が根本だという経済的・階級的観点から男性従属に対してより、生活様式を対抗の対象とした。

丁七星は、『批判』の創刊号に載せられた「女性からみた世界観」で資本主義を歴史哲学的観点から批判する。古代の未開の神秘的な世界観から始まり、唯一神の絶対権力を理念とした中世キリスト教精神が資本主義の到来と共にブルジョワジーの世界観を形成し、このようなブルジョワジーの世界観は絶対的支配関係において成立したと見た。未啓蒙の民衆を宗教で惑わせ、生産機械を独占して生活を搾取する資本主義に対抗できるのは「科学的根拠と経験と実践を基調としたプロレタリアの世界観」であることを主張する。

丁七星は、マルクスの弁証法的唯物論こそ、昨今の朝鮮で唯一の哲学であることを示すことで、社会主義路線を標榜する。この文の末尾に「プロレタリアの一属性である女性としての世界観は当然前述のプロレタリア世界観と合流し一致するだろう」ということから「もし女性の特異な世界観があるならば、それは異端的偏見や主観の罨への転落」であることを標榜し、女性解放以前に階級解放を先取りしようとした社会主義女性運動の基調に従っている³⁹。

³⁸ 国史編纂委員会、『韓民族独立運動史資料集』52、国学資料院、2002

³⁹ 丁七星、「女性として見た世界観」、『批判』創刊号、1931.5

また、「やりたいこと」に関するアンケートで、大工場を設置して朝鮮の失業者を全て受け入れるが、工場の生産で労働者と利益を分かち合いたいという意図は、反資本主義的発想に依拠した社会主義路線を堅持していることが分かる⁴⁰。

丁七星は、女性労働者解放の第一段階は経済的独立にあると考えた。女性が男性に従属せず、新しい両性関係を獲得するためには経済的独立が前提でなければならないが、男性中心の家族制度を越えて経済的独立を得ることは資本主義社会では不可能であるため「無産者の解放なしには婦人の解放もない」という社会主義思想を先行させた。

生活の方便としての経済的独立は丁七星も例外ではなかった。丁七星は権友会執行委員長まで務めた当代の有名な社会運動家だったが、彼女もまた日常の荷物を背負った植民地で生きている職業女性だった。丁七星は自分の特技を生かして、楽園洞京城女子消費組合の隣に刺繍と編物を専業とする「粉玉手芸舎」を開店し、編物講習会を開き、朝鮮女性の経済的自立を助けた。

丁七星を研究した先行研究を見ると、丁七星の編物講習は、権友会の解消以後これ以上社会主義女性運動を持続できない状況で選択した生活の方便のように見えるが、実際には、丁七星の編物講習および朝鮮女子職業社編物部の教師生活は、権友会の結成時期と軌を一にしている。当時、雑誌で丁七星を「裁縫の先生」と呼んだり⁴¹、2つの社会主義（社会主義、糸繪主義）を得た⁴²と評していることから、これが分かる。

丁七星は、女性解放の先決条件が経済的独立にあると信じていたので、編物と刺繍は女性たちの職業になって経済的独立ができる手段になると考えた。二度目の日本留学の時、技芸学校で編物と刺繍を勉強した丁七星の履歴と以後の編物講習会は明らかに経済的自立の実践のためのものであることを、ゆえにもう一つの形態の理念運動であることを推察させる。

2. 強烈な階級意識を持つ無産女性のための啓蒙運動

丁七星の最初の論説は、二度目の東京留学の際、在東京朝鮮女性思想団体「三月会幹部」の資格で「朝鮮日報」に投稿した「新女性とは何か」という文章だ。すでに東京雄弁界の独歩的な位置を占めていた丁七星は、多くの弁論原稿を書いた経験を持っており、最初の論説であるにもかかわらず躊躇なく自分の意見を表明する。当時、似非新女性が溢れる中で、真の新女性は反封建と反ブルジョア理念に基づき、「すべての不合理な環境を否定する強烈な階級意識を持った無産女性として新しい環境を創造しようとする情熱のある新し

⁴⁰ 丁七星、「私はこんなことがしたい：失業者のために大工場設置」、『彗星』、1931.4

⁴¹ 「名男名女 年末隠し芸余興競技大会」、『別乾坤』10、1927.12

⁴² 「権友会解消の声がしてからやることがない彼女は、毛糸編物と刺繍で暇つぶしをしている。これからは糸繪主義への転換か。」「風聞帖」、『別乾坤』、1934.1.1

い女性」⁴³と力説した。これとの連続性の中で「真の自由」は女性の教育や啓蒙そのものにあるのではなく、鮮明な階級意識の下で性差別撤廃運動を通じて獲得されるものと見た⁴⁴。

強烈な階級意識を持つ無産女性に対する関心と啓蒙活動は、権友会執行委員長になってからさらに猛烈に推進される。雑誌「権友」は権友会の綱領を紹介し、連帯及び周辺勢力の拡大に向けて丁七星が意欲的に推進した事業の一環であった。『権友』創刊号に掲載された文章で、丁七星は女性の人生を「快適な運命」（有産階級）と「悲惨な運命」（無産階級）に二分し、有産階級の女性が夫のアクセサリーとして享樂を享受する一方、無産女性は賤しく扱われ、貧困に苦しむ哀れな運命に置かれていると批判する。特に農村女性と都市の労働者女性の暮らしの悲惨さを一つ一つ言及し、無産婦人女性が労苦、暗黒、貧困から抜け出すためには階級的団結と覚醒だけがあるのみだと強調する⁴⁵。丁七星はこの文を通じて、社会主義女性解放運動においてジェンダーと階級関係を規定し、女性と通称される集団の解放ではなく、特に無産階級女性の解放を明確に進める方向に設定している。

社会主義女性解放論は、階級解放と女性解放を同一視し、既存の女権論から疎外されていた大多数の無産女性の生活を重視し、彼らを女性問題解決の主体に格上げした。丁七星は、女性解放のための明確な主体であり、新しい真の新女性像として煙草、製糸、紡織工場で働く勤労女性を提示した。彼女らの血と汗は、新生を開拓する動力であり、未来を約束する信号だということだ⁴⁶。

丁七星は大衆の奥深くに浸透し、女性意識の啓蒙および現実生活における改善方向を持続的に表明した。このような理由から、一緒に活動した女性の先覚者や運動家の政策に相当な不満を吐露しているが、婦人問題座談会に集まった著名な女性たちが生活の合理化という名目で掲げたものが、果たして朝鮮人の不合理な生活を消し去る合理的な生活方策なのかを疑い、階級的平等が前提とされていない合理的な生活は不可能であることを語る⁴⁷。

丁七星は、女性が解放されるためには封建制を打破しなければならないが、そのためには女性が啓蒙されなければならないと信じた。丁七星たちが権友会の代表格として全国を巡回しながら演説した主要テーマが、まさに女性教育と現社会での女性の役割だった。当時、韓国の女性運動は、社会の改造、新文化の建設の中で女性の覚醒と開発が広範に要求される水準であったため、無知な女性たちを目覚めさせ、生活の向上と人格の完成のためには、何よりも女性自らの自覚によって自らの力を成就させるための女性啓蒙と教育を先決課題とした。

⁴³ 丁七星、「新女性とは何か」、『朝鮮日報』、1926.1.4

⁴⁴ 丁七星、「真の自由の道」、『女子界』続刊4号、1927.1

⁴⁵ 丁七星、「意識的覚醒から：無産婦人生活から」、『権友』1巻1号、1929.5

⁴⁶ 丁七星、「新女性の新年新信号：未来を見つめる婦人労働者」、『東光』29、1931.12.27

⁴⁷ 丁七星、「人形展覧会を見て・新東亜十一月号収録」、「新階段」、1933.1

丁七星は「屏風の中に描いた鶏」のような家庭的義務と急変する現代社会が女性に要求する社会的義務の間で、家庭が「小」ならば社会は「大」なので、この二つの調和が不可能ならば「家庭を飛び出さなければならない」と強調する⁴⁸。この文でもう一つ注目すべきことは、蛇足のように付けた最後の言葉だ。「一般の先覚女性は個人の享楽だけに気を使わず、愚かな仲間のために奮闘し責任を持たなければならない」と指摘するが、これは権友会の内部的葛藤を表出したものと見られる。丁七星は権友会が創立されたことに高い意義を置くが、組織がより強固に団結するためには指導部統一が急務であることを強調した経緯がある。指導部の対立の具体的内容は表面化しなかったが、脱却すべき第一の思想として「封建的思想」に言及したこと、後に他の文で封建的思想の代表として迷信を指摘し、無知と迷信の結合が今日の朝鮮半島の女性を不幸にさせたと指摘する⁴⁹。

再び迷信を二つに分けてみる時、儒教的歴史から始まったものと甘言異説で神の意思を追いかけさせるもの（キリスト教）を含めた。この二つは、権力があり、お金のいる階級の富貴栄華のために、権力がなく、お金のない階級の大衆を教え、たぶらかす迷信だと言った。今からでも私たちが一切の迷信を捨てることは私たちに圧迫する階級を壊してしまうことであり、これを可能にするのが「科学」だと言った。「科学の顕微鏡を通じて迷信の土台を探り、掘り出してその中毒を避けなければならない」というのだ⁵⁰。

丁七星は権友会の公式的な「口」（演説）と「手」（論評）だった。社会主義女性解放論に立脚して政見を躊躇なく語っていたこの時、注目すべき新しい地点は、先に述べた自己叙事と関連して「母の丁七星」だ。許貞淑、朱世竹、鄭鍾鳴など社会主義女性解放運動を共に導いた人物の恋愛、家庭史が比較的詳しく光を当てられたのに対し、丁七星は依然として空白として残っており「母親として」の座はより一層そうだ。社会運動をするにあたって、女性・「個人」の人生は常に大衆の関心事だった。20代前半まで解語花の人生を生きてきた丁七星は、すでに世間で嘲弄と賛嘆の対象だったため、これ以上自分の個人史が露出することを潔癖症を示すほど嫌がった。このような理由で「母親としての丁七星」は表面に出ることも注目されることもなかった。

だが、袋の中の錐のように、表に出せなかった母性は自然に「子ども」の問題に対する関心につながる。中外日報で1929年を締めくくる意味で設けられた家庭婦人の座談会に出席した丁七星は、家庭生活と関連した各方面の話題（家庭制度、衣食住、離婚問題、育児問題）で、児童に関する問題においてのみ唯一意見を述べている。例えば、新聞の児童欄が童話の他に、現実の生活と重なり合って干渉が起きる話を載せ、児童たちに教育的効果を高める必要があること、女性の職業関係から見て産児制限が必要だということなどがそれだ⁵¹。

⁴⁸ 丁七星、「『赤い恋』批判、コロタイの性道徳について」、『三千里』、1929.10

⁴⁹ 丁七星、「時評、婦人と迷信」、『三千里』9巻4号、1937.5

⁵⁰ 丁七星、「1932年を迎えて朝鮮新進女性の抱負と主張、階級的に欺瞞する迷信を清算する、特に女性大衆へ」、中央日報1932.1.2

⁵¹ 「本社主催の家庭婦人座談会」、中外日報1930.11

子どもたちの教育において依然として 18 世紀の教育に留まっていることを批判し、実際の生活に相応する現代教育が行われるべきであることを強調するとともに、国民の社会的身分や経済的地位の差別なく、その能力に応じて教育を受ける権利を認め、教育の機会均等思想に基づいた「義務教育制度」の実施を表明することは、丁七星に先見の明があることを示す⁵²。これは、母性愛に対して批判的ではなかったが、コロンタイの見解を受け入れ、国家と社会が母親の役割を遂行し、家事労働を分担して女性を家庭から解放させようという見解とも一脈相通じるものがある。

子どもの教育と共に、子どもを指導する教育者もまた「文字だけを教える教育者」にならず、まずもって自己完成に努めて、学生たちの模範にならなければならないことを強調する。人間的常識と教養を教える教育、これが矛盾のない教育なのだ。

丁七星は解放以後、朝鮮婦女総同盟、朝鮮民主女性同盟の口と手となって社会的イシューや政治的問題に対する組織の立場を代弁するにあたり、特に当時の女性関連問題について積極的に意見を開陳した。毎年（1946~1947）3月8日に「国際無産婦人デー（婦女節）の由来」を語り、ソ連婦女たちの英雄的闘争精神にならって婦女解放と救国闘争のための決意を新たにしたり⁵³、男性たちが妻の啓蒙に努めるとかいうような⁵⁴、植民地時代から続いた女性啓蒙運動の論調を引き継いでいった。この他にも公娼廃止令、三相会議、カイロ会談、米軍の蛮行事件など社会的問題に対して積極的に声を上げるが、女性を侮辱し、賤しく扱われる社会像を批判し、これが改善されない場合、「一千五百万女性の名で」これを許さないという闘争の声を高めている⁵⁵。

3. 慶尚北道から全朝鮮へ、外延拡大としての地域の価値認識

丁七星は東京留学を終えて 1923 年から故郷の大邱に戻り、本格的に社会運動に身を投じる。異色であるのは京城ではなく故郷である大邱に向かったということだが、これは彼女が社会運動の開始点として、運動中央である京城ではなく大邱の地域社会を選択したことを意味する⁵⁶。丁七星の社会主義女性運動の出発は地域単位であり、地域を媒介に外縁

⁵² 丁七星、「教育者の皆様に一言」、東亜日報 1934.12.10；丁七星、「将来のための新年の贈り物、子どもに贈る大人の言葉：生意気になろう」、東亜日報 1931.1.2；丁七星、「実生活に適応した教育を」、『対照』2号、1930.4

⁵³ 丁七星、「国際無産婦人デー由来（上・下）」、独立新報、1947.3.6-8；丁七星、「女性解放の道を探そう（上・下）：婦女節を迎えて」独立新報、1948.3.7-9

⁵⁴ 丁七星「女流革命家を探して、朝鮮の夫たちよ、女性啓蒙に励んでいるのか？ 丁七星編」、独立新報、1946.11.14

⁵⁵ 丁七星、「公娼廃止令と社会波紋：抱え主の陰謀粉碎 婦総丁七星氏談」、漢城日報、1946.5.28；丁七星、「婦総丁七星氏談：全女性の名において反対」、現代日報、1946.6.6；丁七星、「朝鮮婦女に対する米軍の蛮行事件について」、『婦人』2巻2号、1947.3.1；丁七星、「必ず女権擁護に全力、民主女性同盟丁七星氏談」、『女性新聞』、1947.6.18

⁵⁶ パク・スンソプ、前の論文、250 ページ

を拡張しようとした。丁七星本人は、運動の主体として、「草の根」の地域主義女性だった。草の根は、生活に接触している女性個人であり、イシューは生活の中の課題から出発して何よりも主体形成を強調する概念だ⁵⁷。階級性と女性性を専有する運動主体として、草の根の女性は少数のエリート中心の女性と対比された概念で、社会主義女性運動圏内の丁七星ならではの自尊心だ。草の根運動の主体としてスタートし、運動の大衆化ということを重要な自己課題と考え、多くの女性を運動の中に引き込もうとした丁七星は、女性の階級意識を培うための講演など啓蒙活動に集中し、工場女性、農村女性などに対するたゆまぬ関心などで、植民地時代の地域主義女性運動を先導した。

かなり前から社会主義が普及した地方の先進的女性たちは、女子青年会を通じて結集するようになり、一方で地域の他の運動団体と密接な関係を結び、朝鮮社会主義運動の発展と大衆運動の高揚という当時の大勢に呼応していた。したがって、彼らは女性運動の基本方向を、既存の教育啓蒙的性格から、次第に社会改革的で体制指向的な性格に転換し、改良主義的女性運動あるいは民族主義女権運動と、理念的・組織的次元で分離され始めた。最も代表的な事例が大邱の女子青年会だ。

1923年10月、丁七星の主導で創立された大邱女子青年会は、既存の女子青年会が宗教的、啓蒙的性格から抜け出せないまま、女性運動が微弱な状態に留まっているが、代案として最初から民族主義教育啓蒙運動を批判して出発した。この時期に活発に展開された女性教育啓蒙運動は、講演会や討論会、夜学や講習所を運営する方式が代表的だったが、大邱女子青年会では、ソ・ボクジュ、丁七星、イ・グムジョなどが、女性の実際の生活に役立つ無料編物講習会を開催、大邱地域ならではの特色ある女性運動を展開、大衆講演会や音楽会を開催するなど、日帝時代における大邱初の女性運動団体だったという点で意義を見出すことができる。

その後、丁七星は、朝鮮同友会の結成に注力するが、この時も地域活動家出身としてのアイデンティティ（大邱女子青年会）を維持しつつ、各勢力との連合を図った。朝鮮同友会は、女子高互助会の中の社会主義者たちを中心に、各社会主義分派が連合体的性格を帯びて組織された。特に、鄭鍾鳴、許貞淑、朱世竹などは、女子高互助会の活動力を土台に知識階級を主要組織対象とし、金海の金弼愛^{キム・ビレ}、密陽の高遠涉^{コ・ウオンソフ}、大邱の丁七星、海州のシム・チョンシンなど地方の一部社会主義者を糾合した。彼らは、主に自分の地域の青年女性団体を中心に活動し、1923年頃から社会主義の影響を受け始める一方、女性運動を青年運動との一定の関連下に置き、大衆運動の次元に引き上げようと努力した。当時、大邱の丁七星は一般の婦人を相手に同志獲得に努力した。

丁七星はその翌年「慶尚北道の思想運動は、慶尚北道でなければならない」という趣旨の下、大邱代表として慶尚北道単位の思想団体である四合同盟を結成する。四合同盟の

⁵⁷ キム・ヨンナム「草の根女性運動を通じて見た女性主義市民性の拡張に関する研究」聖公会大学修士論文、2012、p52

綱領が大衆解放、理論と実際の現実的適用にあったので、丁七星は四合同盟の発起人として、保守的基盤で社会運動が微弱だった大邱の民衆解放に注力した。

権友会が重点を置いて実施した事業は、宣伝啓蒙活動と労働女性の組織化、そして女子学生運動の活性化などだった。このような事業を効果的に遂行するためには、全国各地に支部を設立し、講演者を派遣する機会が多かったが、丁七星は全国を回りながら女性運動論を広め、当代の講演者として有名になった。地域運動に対する彼女の力量と関心は、権友会参加以前に地域社会運動領域で活動した経験と無関係ではなく、長い地域社会運動の経験を持つ丁七星の能力は、権友会組織を全国的に拡大していくのに決定的な役割を果たした。

慶尚北道では1927年の金泉^{キムチョン}を皮切りに1928年大邱、軍威^{クヌイ}、河陽^{ハヤン}、永川^{ヨンナヨン}、1929年栄州^{ヨンジュ}で支部が設立された。支部の設立は地域女性たちの自主的な努力と権友会本部の支援および地域の社会団体の協力によって可能になった。本部では支部設立および会員確保のために各地方に講演者を派遣して巡回講演を行い、権友会の趣旨を説明して全朝鮮女性の団結と組織の必要性を鼓舞した。特に慶尚北道地域で権友会の支部が設立された地域には、当時全国的に社会主義活動を展開していた大邱出身の丁七星、李春壽などが影響を及ぼしており、彼らは支部の設立から活動に至るまで主導的な役割を担った。

大邱では1928年2月、権友会大邱支部発起準備委員会を組織し、臨時議長と設立大会準備委員を選出した後、2月25日に支部が設立されたが、大会は大邱女子青年会幹部であり権友会大邱支部準備委員であるチョ・ヨンスの司会で進行された。権友会本部から派遣された丁七星が趣旨説明をし、新幹会大邱支部のソ・マンダル氏の他2人が祝辞を述べた。当日出席した会員は200人余りで、傍聴人を合わせると300人余りの大盛況だった。このような盛況は、大邱出身の女性運動家たちの自主的な準備と努力に加え、権友会本部の支援、新幹会の支持によるものだった⁵⁸。

大邱支部では、婦人夜学や講座、講習、討論会などを通じて婦人および一般女性の識字と教育に努めた。支部ではこのような事業を通じて公娼、早婚、人身売買、迷信などの問題点に対する女性の自覚を促した。これは初期の民族主義系女性の教育啓蒙運動とは異なっていた。権友会運動では女性大衆を教育啓蒙して識字運動をすることに止まるのではなく、これを皮切りに彼らの階級的自覚を引き出そうとし、無産女性自身が運動主体となってその力量を発揮させることに努めた。そこで支部事業の重点を、組織宣伝、調査研究、会員親睦、園遊会開催などに置き、運動の主体となる会員の確保に注力した⁵⁹。

1931年、権友会解消論が台頭した時、丁七星は反対に初心を主張した。各女性運動（労農部門）が一定の段階まで激化すれば、権友会は各階級のために当然解消されなければならないが、いまだに各部門の運動が男性専有の運動のように認識されている今、女性意識

⁵⁸ 「権友大邱支会準備委員会」、中外日報、1928.2.12；「大邱にも権友支会準備に多忙」、朝鮮日報、1928.2.13；「大邱にも権友支会創立大会は21日に」、東亜日報、1928.2.14

⁵⁹ キム・ウナ、「日帝植民地時代の慶北地域権友会運動」、啓明大学修士論文、2011

を促進させるための識字運動のような啓蒙運動とともに、権友運動により大衆的に力を注がねばならないということだ。すなわち、以前の啓蒙運動が概念運動や基本運動だったとすれば、現在の啓蒙運動は現場（農村、工場、家庭）に浸透した意識的、実践的、組織的啓蒙運動でなければならないと強調した⁶⁰。

権友会の解消後も丁七星が、依然として慶尚北道地域に根幹を置いて女性解放論を引き継いでいたことは、解放2日後の全国婦女同盟創立大会で、農村女性の啓蒙と利益を擁護する農村部門に所属し、2ヵ月後に朝鮮共産党慶北道党婦女部長に選出されたことから分かる。

IV. 終わりに

丁七星の生と思想を追跡する作業は、近代社会主義運動史、女性史、文学史、マスコミ史が交差する地点に置かれている。これまで、丁七星の履歴および思想に誠実に光が当てられてこなかったため、本稿は丁七星という社会主義女性運動家の人生を、年代順に構成して調べた。3・1運動以前・日本留学と共に色々な団体を組織し、権友会創立前まで～権友時代～権友会解消以後～解放以後の順に整理し、丁七星の声が生き生きと伝えられるよう彼女の自叙伝から句を直接引用した。丁七星が発表した論評を社会主義、女性主義、地域主義に区分したのは、思想の鮮明性を浮き彫りにするためであり、これを土台に理論と運動を総合化しようとした。

丁七星の人生は、伝統から近代へと進む植民地過渡期を生き抜いた一人の女性のミクロ史ではない。丁七星自身の存在論的・社会的経験をもとに、現実を冷徹に認識し、闘争的なやり方で当代と拮抗した。これが力強い植民地運動史と重なる時、丁七星の人生は植民地女性史になりうるのだ。さらに丁七星は、人生の目的意識を社会主義女性運動と講演、論評を通じて無産大衆と共感、疎通しようとした努力した人物だ。その努力は洗練されていなかったが、少なくとも正直になろうとした潔白な人物だった。疲弊した人生の経験から発生した社会的争点である階級、ジェンダー、組織の問題が強烈な主題意識を生み、それが丁七星という女性革命家の物語を支配している。

⁶⁰ 丁七星「民族的大協同機関の必要の有無とその可能性の如何：闘争は不可能」、『彗星』1巻1号、1931.3

参考文献

1. 一次資料

- 「新女性とは何か」,『朝鮮日報』,1926.1.4
「真の自由の道」,『女子界』続刊4号,1927.1
「義憤公憤心談構想 最も痛快だったこと：男装して馬を走らせる時」,『別乾坤』8号,1927.8
「女性運動に対する抱負、指導者統一が急務、固い信念を持とう」,『東亜日報』,1928.1.1
「魂の救済か飛躍の解放か、女性運動は大衆のためだ」,『朝鮮日報』,1928.1.1
「男、私がよいと思う男-私の好きな五色男」,『別乾坤』19号,1929.2
「意識的覚醒から：無産婦人生活で」,『権友』1巻1号,1929.5
「仲間への呼び掛け」,『三千里』1号,1929.6
「金持ちもみんな嫌だ。やっぱり今のような働き手で」,『三千里』1号,1929.6
「名士のメンタルテスト(1)、権友会中央委員長丁七星氏」,『三千里』第2号,1929.9
「各方面名士の祝辞と希望：女性運動に貢献せよ」,『中外日報』,1929.9.29
「『赤い恋』批判、コロンタイの性道徳について」,『三千里』,1929.10
「過去10年に韓日、将来10年にすべきこと」,『三千里』,1930.1
「実生活に適応した教育を」,『対照』2号,1930.4
「夫の在獄・亡命中の妻の貞節問題、不在中は意識的に行動せよ」,『三千里』10号,1930.11
「啓蒙運動に注力」,『朝鮮日報』,1931.1.1
「子どもに贈る大人の言葉：生意気になろう」,『東亜日報』,1931.1.2
「恋愛の悩みのかたちとその対策」,『朝鮮の光』,1931.1
「民族的大協同機関の必要性の有無とその可能性の如何：闘争は不可能」,『彗星』1巻1号,1931.3
「私はこんなことがしたい：失業者のために大工場を設置」,『彗星』1巻2号,1931.4
「女性として見た世界観」,『批判』創刊号,1931.5
「兄妹間の恋愛と血族結婚不可論：不倫と恋愛自由問題」,『三千里』16号,1931.6
「問題は大衆の要求を履行するかどうか」,『中央日報』,1931.11.27
「新女性の新年新信号：未来を眺める婦人労働者」,『東光』29号,1931.12
「私はなぜこうなったのか？ 私はなぜ再び長髪にしたのか？」,『別乾坤』47号,1932.1
「階級的に欺瞞する迷信を清算するだろう、特に女性大衆に」,『中央日報』,1932.1.2
「人形展覧会を見て-新東亜11月号所在」,『新階段』,1933.1
「教育者の皆様に一言」,『東亜日報』,1934.12.19
「同志を思う」,『三千里』7巻3号,1935.3

- 「青春を惜しむ佳人哀史：名号不復還」,『三千里』7巻3号,1935.3
「近日遺憾」,『三千里』7巻5号,1935.6
「俄館その戦術のさまざまな面」,『三千里』7巻7号,1935.8
「女流文章家の心境打診、「現実」を凝視しようとする女流評論家」,『三千里』7巻11号,1935.12
「安昌浩氏にどんな舞台を任せたいのか」,『三千里』,1936.4
「著名人物一代記」,『三千里』9巻1号,1937.1
「時評、婦人とミシン」,『三千里』9巻1号,1937.1
「公娼廃止令と社会波紋：抱え主の陰謀粉碎 副総丁七星談」,『漢城日報』,1946.5.28
「副総丁七星氏談：全女性の名において反対」,『現代日報』,1946.6.6
「朝鮮の夫たちよ、女性啓蒙に力を入れているのか。丁七星女史編」,『独立新報』,1946.11.14
「朝鮮婦女に対する米軍の蛮行事件について」,『婦人』第2巻2号,1947.3.1
「国際無産婦人デーの由来（上・下）」,『独立新報』,1947.3.6~8
「必ず女権擁護に全力、民主女性同盟の丁七星氏談」,『女性新聞』,1947.6.18
「女性解放の道を探そう（上・下）：婦女節を迎えて」,『独立新報』,1948.3.7~9

2. 単行本

- カン・マンギル,『韓国社会主義運動人名事典』,創作と批評社,1996
国史編纂委員会,『韓民族独立運動史資料集』52,2002
キム・ギョンイル,『新女性,概念と歴史』,青い歴史,2016
キム・ソンドン,『花束も墓もない革命家たち』,パク・ジョンチョル出版社,2014
キム・ジュンヨプ/キム・チャンスン,『韓国共産主義運動史：資料集』,高麗大学アジア問題研究所,1980
キム・ジュンスン/イ・スミン,『いったい愛は何だというのですか?』,ソトン,2015
大邱史学会編,『嶺南を知れば韓国史が見える』,青い歴史,2005
パク・ヨンオク,『韓国近代女性運動史研究』,韓国精神文化研究院,1984.
ソン・デギョン編,「時代を先取りした人々」,『先人』,2014
シン・ヨンスク,『女性が女性を歌う：日本による植民地時代韓国女性史』,ヌルプムブラス,2015
アン・ジェソン,『失われた韓国現代史』,人文書院,2015
チョン・ウンヒョン,『朝鮮の娘、銃を持つ：大家の奥様から新女性まで、日本帝国に対抗して戦った24人の女性独立運動家物語』,人文書院,2016
チョ・ギジュンほか,『日本統治下の民族生活史』,民衆書館,1971

ピョ・ハンニョル,『(教科書に載せられなかった) エピソード独立運動史』,アルフィー,
一,2017

3. 記事及び論文

キム・ギョンイル,「1920-30年代韓国の新女性と社会主義」,『韓国文化』36,2005

キム・ジュンスン,「近代化の担持者 妓生」,『韓国学論集』43,2011

キム・ヒョンモク,「丁七星、「思想妓生」から女性運動家に変身する」,『独立記念館』
346,2016

キム・ヒジョン,「大邱慶北近現代人物史 38、丁七星」,永南日報,1997.12.23

ノ・ジスン,「ジェンダー、労働、感情、政治的覚醒の瞬間：女性社会主義者、丁七星の
生活と活動に関する研究」,『比較文化研究』43,2016

パク・スンソプ,「1920.30年代丁七星の社会主義運動と女性解放論」,『女性と歴史』
26,2017

朴貞愛,「3.1独立運動に飛び込んだ「思想妓生」社会主義運動家として活動」,『ハンギ
ョレ』,2008.8.16

パク・ヘラン,「1920年代社会主義女性運動の組織と活動」,梨花女子大学修士論文,1993

宋連玉,「山川菊江、黄信徳：帝国日本と植民地朝鮮の女性リーダーの出会いとすれ違
い」,『女性と歴史』15,2011

シン・ヨンスク,『日本の韓国女性社会史研究』,梨花女子大学博士論文,1989

ヤン・マンウ,「権友会抗日武装組織的女性運動主導(独立運動秘史 11)」,『朝鮮日
報』,1995.8.5

チャン・ヨンウン,「生存と執筆：女性社会主義者の自己叙事」,『比較韓国学』,2017

チャン・インモ,「1920年代権友会本部社会主義者たちの女性運動論」,『韓国史研
究』,2008

チェ・セジョン,「女性、社会運動家 丁七星」,『毎日新聞』,2015.6.15

ホン・ヤンヒ,「韓国女性人物辞典、丁七星」,『イートゥディ』,2017.7.27

不屈の女性 万愛花大姉

陳麗菲¹ (訳者 李青凌²)

万愛花は抗日戦争の女性兵士であり、第二次世界大戦時の日本軍「慰安婦」制度による中国人被害者のなかの典型的で代表的な人物である。彼女は1940年代、日本軍によって3回も慰安所に強制連行された。1992年に日本へ行き、東京で開催された「日本の戦後補償に関する国際公聴会」でカミングアウトし、日本軍が犯した暴行を勇気をもって暴露し、「日本軍『慰安婦』制度被害者の中で最初の中国人対日訴訟者」と呼ばれることになる。2013年9月4日0時45分、この勇敢で強堅な中国人女性は、山西省太原市で亡くなった。享年84歳。

一、苦難の生き立ち

万愛花の旧名は劉春蓮(リュ・チュンリエン)である。1930年1月11日に内モンゴル自治区河林格爾県の韭菜溝村に生まれた。家は貧しかったため、転々として山西省孟県羊泉村の人に「童養媳」³として売られ、「靈玉」(リンユイ)と改名された。1938年、日本軍が孟県に侵入した。万愛花は、「私は小さい頃から他人をいじめる人たちを嫌い、人殺しや放火をする日本鬼子⁴が我々中国人を虐待することを、さらに憎んだ。彼らは何のために我々の土地に来たのか。私は共産党の話聞き、敵との闘争の積極分子になった。私は率先して児童団に参加し、児童団の団長として選ばれた。……その後、共産党に加入した。私はまだ若いにもかかわらず、人生で多くの回り道をしていろんな災難に遭ったため、一緒に党で工作活動をしていた人々は私に同情した。八路軍第19団の団長劉桂華は、それゆえに私の名前を「克災」と改め、今後も災難を克服し、全て順調にいくようにと望んでくれた。私は積極的に工作活動を行い、羊泉村の村支部委員(共産党側)になり(当時は小区委員とも呼ばれた)、副村長、婦救会⁵主任にと、相次いで就任した。当時、みんな共産党の地下黨員であり、秘密の工作活動であるため、他人・「漢奸」⁶・日本鬼子に知られるのはいけなかった」と述べている。

1943年の春、日本軍は羊泉村を掃討した。靈玉は病気だった義理の父親を看病するため

¹ 原著者の陳麗菲は、中国上海師範大学教授、中国「慰安婦」問題研究センターの研究員。長年にわたって日本軍「慰安婦」制度の中国人被害者に注目し、彼女たちと親しくつき合いながら聞き取り調査と研究に取り組み、被害状況を明らかにしてきた。

² 万愛花大娘の10周年忌を機に、もっと万愛花大娘を知ってほしい、ぜひ読んでいただきたいと願い、翻訳した。文中の全ての脚注は、訳者が付けたものである。

³ 童養媳：旧中国の風習。将来、息子の嫁にするため幼時他家に引き取り、育てられる女兒。

⁴ 日本鬼子：恐怖と憎悪の感情が込められていて、侵略した日本兵を指す言葉。

⁵ 婦救会：婦女救国会。

⁶ 漢奸：中国人の裏切り者。

に逃げることができず、捕まった。彼女は他の女性4人と一緒に戦利品として、日本軍により進圭拠点まで連行された。進圭社は山のすそ野につくられた小さな村である。日本軍に占領された後、山上に砲台やトーチカが築かれた。日本軍はその周辺の窯洞（ヤオトン）⁷で暮らしていた村民たちを追い出し、窯洞を強制的に占領した。少女たちはその窯洞に閉じこめられ、獣のような日本軍に輪姦された。裏切り者の密告のせいで、霊玉が抗日活動に従事していることが知られてしまった。日本鬼子に拷問されても、霊玉は歯を食いしばって認めることを拒否していた。ある日の深夜、彼女は監視していた「漢奸」が気づかないよう必死に窓から飛び出し、羊泉村に逃げ帰った。

1943年7、8月頃に、日本軍は二手に分かれて、南と北の両方向から羊泉村を包囲した。池のほとりで洗濯をしていた霊玉は、再び日本鬼子に捕まって拠点進圭に閉じこめられ、昼も夜も無茶苦茶に輪姦された。ある夜、拠点にいる日本鬼子はどこかの村に掃蕩に行ったようで、残っていた日本兵は少なかった。霊玉は窯洞の戸を持ち上げ、下の隙間から潜り出て、再び逃げた。

三回目に捕まったのは、数カ月後のことだった。1944年の旧暦12月に臘八粥⁸を食べていたところ、日本鬼子がまた羊泉村を取り囲み、霊玉は三度捕まった。

今回、霊玉は日本鬼子にひどく殴られた。霊玉の足、腰、肋骨が砕けて、立てなくなった。霊玉は暴行を犯した日本兵の顔を覚えており、なかでも最も凶悪残忍なのは「赤ら顔（紅臉）隊長」と「剥き出し牙隊長」であった。霊玉はひどい暴行をくり返し受けて、何度も気絶した。もう死んでしまったと思った日本軍は、霊玉を村の隣にある「烏河溝」という川に捨てたが、幸運にも同じ村のある親切な老人に見つけられ救出された。霊玉はまる3年間にベッドに臥せっていた。少し歩けるようになった後、彼女は全身の骨が変形したことに気づいた。まっすぐ立ち上がることはできず、かん骨と肋骨が折れ、腕を脱臼し、首は胸腔に、腰は骨盤に入り込んで、160センチ以上あった背丈は140センチぐらいに縮んでしまった。日本兵に右側の耳たぶを引きちぎられた。釘を打ち付けた板で頭のとっぺんを殴られたため、そこは陥没してしまった。2カ所の傷痕には、今でも髪の毛が生えない。5年後、彼女は自分のことができるようになったが、全身病気で苦しんでいるため、長年にわたり、治療とマッサージを受けなければならなくなった。その後、万愛花という名前に改名し、村から都市部へ移住した。

万愛花は次のように語っている。

私はいろんな苦しみを経験し、人生の道も曲がりくねっていた。私のような人間は、村という環境で生き残ることはとても難しい。仕方がないが、そこで窒息したくない。あれから私は結婚もしていない。ある女の子を養女として育てており、「拉弟」と名づけた。私と一緒に暮らしている。私は盩厔県から陽曲に、陽曲から太原へと転々とし、太原である小屋を借りた。拉弟は幼い頃から私を世話しようとしてくれた。よく私の体調が悪い時に、

⁷ 窯洞（ヤオトン）：中国西北の黄土高原地帯に固有の洞穴式の住居。かたい黄土の崖を掘って作った家屋。

⁸ 臘八粥：まもなく春節（旧正月）を迎える旧暦の臘月八日に、五穀豊穡の祝いとして、五穀の入った粥を食べるといふ風習がある。仏教の伝承行事でもある。

娘は外に出かけて物乞いをしてくれて、私たちの生活を維持してきた。……私は娘のためにやる気を出してがんばる。彼女の母親は怠け者ではない。抗日兵士だ。私は彼女に良き名誉をあげようと思う。

……私が名乗り出て、自分自身がかつて日本鬼子に捕まってひどい暴行を受けたことを認めるのは、世間のみんなに日本鬼子がわれわれ中国人に犯したさまざまな罪を知らせるため、私と私のようなたくさんの姉妹たちに名誉回復を求めるためである。私は日本鬼子を「慰安」したことは一度もないし、絶対にしたくない。1992年に私は東京で開かれた国際公聴会に出席した。私はステージで、過去に日本鬼子に虐待されたこととさまざまな耐え難いことを思い出し、怒りすぎて気絶してしまった。

このために、1993年から私は党籍の回復を要求していた。昔はぜんぜん気にならなかった。もともとは地下黨員であり秘密のことだったから。しかし、今の私は自分自身が抗日の共産黨員であり、あの日本鬼子を「慰安」しなかったことを証明しようと思っている。しかし難しかったなあ。時間が長く経ちすぎて、みんな死んでしまった。私はあちこち訪ねて行き、私が共産党に加入していたことを証明できる古老の幹部を見つけた。孟県の県長張国英を尋ねて、証明してもらった。高昌明、李孟孩も証言してくれた。1994年に50年以上の中断を隔て、私の党籍はようやく取り戻された。……黨員身分が認められてから、私は幹部となった。毎月50元がもらえる。1995年から支給されている。万愛花である私は、たった50元だけの値打ちではないのはよくわかっている。私は私たち中国人被害者の胸に長くわだかまってきたことを日本人の前に思い切り吐き出すように闘っている。我々は抗日者だよ！ お金が少ないと人々に言われたが、私は気にしない。私はただ名誉を回復してもらえばいい。……日本鬼子の罪を訴えるためなら、どこでも行く。これは仕事だ。何でも協力するよ。日本鬼子に罪を認めさせることができるならば。1996、1998、1999年に、私は日本へ行き、日本鬼子が犯した残虐な暴行を訴えた。2000年12月、私は東京へ行って女性国際戦犯法廷⁹に出席した。私は原告として法廷に出て、証言した。12月9日の朝、私は日本軍が犯した暴行を訴えていた時に、服を脱いで法廷のみなさんに私の傷痕を見せようとした瞬間、また気絶してしまった。私の体調はますます悪くなってきた。私はこの法廷で日本の昭和天皇と日本政府が有罪という判決を下すことを強く求めた。彼らは私たちに謝罪すべきで、私たちの名誉回復をしなければならない。彼らは頭を下げて罪を認めなければならない。彼ら自身が間違っているのを知ってこそ、次の世代がこんな暴行に遭うことが避けられるようになるのだ。私は生きている限り彼らと闘う！

⁹ 女性国際戦犯法廷：2000年12月に東京で開催された「日本軍性奴隷制を裁く女性国際戦犯法廷」の略称。日本軍「慰安婦」制度の責任者の刑事責任と日本政府の国家責任を認定した画期的な民衆法廷だった。韓国、北朝鮮、中国大陸、台湾、フィリピン、インドネシアから被害者が出廷した。

二、不撓不屈に訴訟への道を進む

中国における日本軍「慰安婦」制度生存者の対日民間的な訴訟活動において、万愛花は積極的な活動家と言える。彼女は被害者の中では年齢が若くて、頭の回転が速く、話し方が明瞭であることも、その理由である。しかし、最も重要なのは次のことである。彼女は、日本軍に残酷な暴行を受け、何度も危篤に陥りながら何十年にもわたって流離され、人生の苦しみに辛抱強く耐え、心にも大きな傷を負った。それにもかかわらず、彼女は気丈な性格を形成している。若い頃から共産黨員になったからかもしれない。組織や工作活動によって訓練のある程度受けることができたので、今でも、彼女の話し方であれ動き方であれ、幹部らしい風格がある。特に対日関係に対しては、彼女は大局から問題を認識し、物事の道理を明確にわきまえている。彼女が様々な場面でよく言ったことは、「私は一般人ではない、このまま死ぬわけにはいかない。私は中国人の気持ち、真実を追求するために闘って生き残っている。私は死を恐れないが、正義と名誉を回復したいという願望はまだ叶っていない。絶対に正義と名誉を回復しよう！日本政府に謝罪と賠償をさせ、頭を下げて犯した罪を告白させなければならない。日本には善良な心持ちで私たちにお金を出そうと思っている人がいる一方、私たちがお金を狙っているから金をやろうと思っている人もいる。私はその口止め金はいりません！私は彼らの謝罪と正義を求めている。それが一番大事なこと。真実と名誉回復は賠償金と同義と思う。私は喜ぶよ。もし私が生きている間にこの念願を叶えられなければ、私が死んだ後、私の娘、私の孫たちが私の代わりに訴訟を提出する。真実と名誉を回復するまで、絶対に諦めない！」

中国民間人による日本政府に対する日本軍「慰安婦」制度被害の訴訟と賠償を求める活動は、1992年7月から始まった。

1992年初に中国駐日大使楊振亜は、女性を「慰安婦」としたことは、「戦時中に日本の軍国主義者がアジアで犯した恥ずべき一つの罪である。中国人女性も被害者であるという報道があった。私は事実を明らかにすることを希望しており、注目している。」と、明確に指摘した。

3月23日、中国外交部長錢其琛は中国の民間人被害者に関する賠償問題に言及した際、日本の中国侵略戦争が引き起こした複雑な問題について、日本側は適切に対処すべきだと指摘した。日本を訪問する前の4月1日に中国共産党中央委員会の江沢民総書記は、釣魚台芳菲園で日本人ジャーナリストが尋ねた賠償に関する質問に答える時、中国側の立場と原則を重ねて述べた。7月4日、駐中国の日本大使館は、「慰安婦」問題に関する調査結果の覚え書きを中国政府に渡した。日本政府が「慰安婦」の募集と管理に関与したことを認めていたと。中国外交部はすぐ「今後、日本はどのような措置を取るにせよ、韓国と同じように扱ってほしい」という立場を表明した。

このような態勢の下、1992年7月7日、つまり日本の軍国主義者が「七七事変」¹⁰を起こした日に日本軍「慰安婦」制度被害の中国人生存者である劉面換、侯東娥などの4人が、ほぼ半世紀の沈黙を破って駐中国の日本大使館に請願書を渡した。彼女たちは日本政府に

¹⁰ 日本では「盧溝橋事件」と称している。

謝罪し、5~12万ドルの賠償金を要求した。これは中国人被害者の「慰安婦」問題に関する初の賠償要求だった。

しかし、この働きかけはさまざまな理由でメディアに取り上げられず、国内外に大きな影響を与えることはできなかった。中国人被害者もいるという歴史の真相を国際社会に伝えたのは、万愛花であった。

1992年12月9日、東京で「慰安婦」問題に関する初の国際公聴会が、世界各国の正義を求める人たちの合同で開催された。65歳の万愛花は勇敢に登壇して、日本軍から受けた残虐な暴行を訴えた。彼女は涙を流しながら自分が遭った残酷な暴行を告発する途中、悲しみのあまり気絶してしまった。この悲愴なシーンは来場者全員に衝撃を与えた。

山西省では、1993年から日本の左派弁護士と中国人弁護士の協力を得たうえで、3回にわたって約20名の生存者が日本政府に謝罪と賠償を求める民事訴訟を正式に提起した。1998年10月30日、万愛花、趙潤梅と楊秀蓮らが東京地裁に正式に日本政府を被告とする訴訟を提起した。これは中国人被害者が起訴した3つ目の訴訟である。1999年9月、万愛花、趙存妮と高銀娥は一緒に東京の裁判所に証人として出廷し、2000年12月、万愛花は東京での女性国際戦犯法廷に出廷して活動した。その後、彼女は何度も海を渡って日本へ行った。

しかし、日本の裁判所は先延ばし戦術をとり、多くの場合には法廷が数年を隔てて再開したり、開廷してもわずか5分間で休廷を宣言したりしていた。2003年4月24日に東京地裁は原告の請求を棄却するという一審判決を下したが、加害と被害の事実は認められた。5月8日に、原告は東京高裁に控訴した。2005年3月31日に東京高裁は、「原判決を維持する」という二審判決を下した。7月、万愛花ら原告は日本の最高裁に上告した。11月に日本の最高裁は原告敗訴の判決を下した。3つの裁判はすべて原告敗訴になったということで、何度も遠くから渡日した老人たちの胸には悲しみと憤りが交錯していた。

それでも、彼女たちは絶対に屈服しない。母が亡くなっても娘はその遺志を受け継ぐ。彼女たちは老衰のことは気にしないで、お互いに応援し続けた。万愛花は第3回裁判のリーダーである。彼女は日本からの招きに応じて、絶えず来日していた。受けた暴行と名誉回復の願いを何回も繰り返していた。1996年9月、万愛花は日本の参議院議員田英夫と衆議院議員土井たか子からの招待に応じて日本へ行った。東京・神戸・広島・岡山・大阪を訪れ、正義を求める人たちが主催した市民の集会に何度も参加し、日本軍が人権・女性の権利を野蛮に踏み躪ったことを告白した。2008年6月、万愛花は日本の市民団体の招待に応じて講演に行った神戸から、当時の日本首相であった福田康夫へ宛てた手紙を書いた。その手紙で、万愛花は自分自身と、戦争中に被害を受けた他の中国人女性を紹介し、次のように福田首相に尋ねた。「日本の法廷は中国を侵略する戦争中に日本軍が犯した罪を何度も認めているが、なぜ日本という国は私たち被害者に謝罪と賠償をしないのか」。また万は、「私は人生で悪いことを一度もしたことはない。なぜ、そんな被害者である私が裁判に負けたか。日中両国の次世代のため、私は良心がある日本人と共に最後まで闘い続ける！」と、正々堂々と書いた。

三、出師 未だ捷たずして身先ず死し 長えに英雄をして 涙襟に満たしむ¹¹

中国「慰安婦」問題研究センター（略称「センター」）と万愛花大娘¹²との本格的なつながりは1999年から始まった。その前、我々センターは山西省に関する公文書を確認し、関係者たちに連絡を取っていた。そのため、孟県には20人近くの被害者が生存していることを知っていた。私たちは特に山西省に行き、歴史的事実に関する調査と聞き取りを行うことにした。聞き取り調査は、1999年8月の夏休みに決まった。猛暑だった。まずは万愛花大娘を訪ねた。

当時、万は太原市杏花嶺区にある鉱山機械寮の部屋に住んでいた。万は、何十年も病気に苦しんでおり、幼い頃養女になった娘と暮らしている。マッサージ師に出会い、ほぼ毎日、きちんとした治療を受けていなかった腰骨と肋骨をマッサージしてもらっていた。そうしないと、身体が痛くて動けない。特に曇りや雨の日である。そのため、だんだん自分自身がマッサージを習い、自力でできるようになった。他の人にマッサージで病気の治療をするまでになった。私たちは彼女の家で丸1日を過ごし、多くの重要なことを細かく聞き取って補足した。例えば、彼女の家庭状況；1943年から1944年までの間で日本軍に何度も捕まった具体的な時期、捕まった日に庭に生えていた箒の苗木の一種で季節を判断することからお正月の時に鍋の中に何かを蒸していたことまでの回想、そして捕まって監禁されていた窯洞で掛けていた綿布団、その綿布団の所在と証人；その後の彼女の生活状況と証人；彼女のさまざまな考えや態度など。翌日に私たちは特に車で数百メートルを走り、当時の万が被害を受けた孟県の羊泉村に行き、監禁されていた窯洞、捕まった時の川、万の被害を目撃した唯一の生き証人である侯大兔、あの綿布団の持ち主などを探して検証した。万愛花の被害事実に関する細かいところまで確定したと判断し、調査を終えた。

それ以降、センターは、既に認定されていた被害者と同じように、万愛花への経済的な援助を開始した。同胞同士が血肉で繋がっているという精神的な支えと人道的な支援を表すためである。

2000年12月、我々センターは中国国内の検察官、被害者代表、その家族、調査者合計34人と一緒に団体をつくり、十数ヵ国・地域が参加して東京で開かれた女性国際戦犯法廷に出席した。その期間、私たちは被害者たちと昼夜を問わず生活を共にしていた。この機会に、万愛花に2回目の詳細な聞き取りを行っている。¹³万大娘は中国内陸における原告の代表的な人であり、最初に法廷に出廷して訴訟を起こした被害者である。法廷の外では右翼の宣伝車の拡声器が大きな声で鳴り響き、法廷内ではメディアが集まって黒山の人だかりができ、数十台のカメラが彼女に向けられていた。彼女は泣きながら自分が遭った残

¹¹ 出典は、杜甫の漢詩『蜀相』。蜀相とは諸葛孔明のこと。「孔明は魏を討つ軍を起こしたが戦に勝たないうちに病のため亡くなり、その忠誠は長く後世の英雄たちに涙を流させた」という意味。孔明は自身を犠牲にして漢王朝の復興を目指したが、死ぬまでにその念願が果たされなかったことへの悲しみの気持ちを、名誉回復と平和事業に尽くした万愛花が、その実現を待たずに亡くなったことへの悲しみと哀悼の気持ちに重ねている。

¹² 大娘：ダイニャン。中国の西北地域で、愛情を込めて高齢の女性たちをこう呼ぶ。「おばあちゃん」の意味。

¹³ 当時、陳さんは団体の秘書長だった。

酷な暴行を告発し、綿入りのジャケットのボタンを外して日本軍による様々な傷跡を世界の人々に見せた際、あまりの悲しさによりステージで気絶してしまった。近くの病院に緊急搬送されて治療を受けたが、法廷はそれで1時間を休廷しなければならなかった。幸い万大娘は無事だった。日本に滞在中、万がちょうど誕生日を迎え、団長¹⁴は泊まっていたホテルで彼女に長寿麺¹⁵とおかずを用意し、お祝いした。みんなは、この勇敢で強堅な中国人女性が並々ならない人生の旅にくじけずに遠くまで歩けるようにと願っている。その後の2001年と2002年、センターの主任である蘇智良教授は「慰安婦」プロジェクトの調査と支援のため、2回続けて山西省太原市に万を訪れた。2005年、上海で開かれた被害者に関する報告会の講演者として万が招かれ、中国を訪学したカナダの教師団と交流した。2007年7月5日、上海師範大学の中国「慰安婦」資料館が開館された。万愛花大娘は喜んで招待を受け入れ、義理の息子¹⁶と姪を連れて上海に来た。彼女は疲れをいとわず、アメリカ、カナダから来た教師と生徒たちに自分の苦難の人生を話した。この時、ネットの生放送にも出演した。

生放送中、彼女は「死は恐れないが、正義と名誉を回復したい願望はまだ叶っていない。絶対に正義と名誉を回復しよう！日本政府に私たちに謝罪して賠償させ、頭を下げて犯した罪を告白させなければならない。日本には善良な心持ちで私たちにお金を出そうと思っている人がいる一方、私たちがお金を狙っているから金をやろうと思っている人にもいる。口止め金はいらぬ！私は彼らの謝罪と正義を求めている。真実と名誉回復は賠償金と同義と思う。その実現が私の喜びになるだろう。」ということをもう一度繰り返して述べた。生放送を観ている聴衆たちは、万大娘の気骨に深く感動させられた。ある若い学生は、万大娘に「待っていてください。私は法律を勉強しようと思います。勉強が終わったら正義を取り戻すことを手伝わせてください！」と言った。

ふだんには、万大娘は私たちによく電話で連絡をしてきて、山西省の高齢になっている被害者たちの日常生活について話し合っていた。2008年7月2日の午前中、万大娘は電話で誇らしげに「陳先生、私は日本に行きましたよ。中国人の正義と名誉を回復するために行ってきました。私たちは勝ちましたよ！蘇先生に伝えてください！」と、私に言った。私と蘇智良は7月1日の夜に吉林檔案館から上海に戻ったばかりで、それを聞いて驚いた。裁判は勝ったのだろうか、と。が、彼女は肯定的にこう語ったのである。「私たちは負けてはいません。皆が私たちを支えてくれています。元日本兵さえも証言して、「こういう事実があった。過去には日本人が過ちを犯した。中国人に謝罪して賠償するべきだ」と言ってくれました。私は正義と名誉を回復したのです！私は飛行機に乗る時に足をねんざしてしまったのですが、誰かが気遣って骨折したかもしれないと言ってくれました。日本に着いてから病院に行き、治療を受けてから仕事をやり続けたのですよ。その後、日本でエレベーターに手を挟まれたのですが……ご心配なく、大丈夫。体調は良いです。やるべきことはすべてやりました。蘇先生に伝えてください！」ここまで聞いて私は、万は裁判の

¹⁴ 団長は蘇智良。

¹⁵ 長寿麺：中国では誕生日に麺を食べる風習がある。麺が長いと長寿になるとして、誕生日に麺を食べて長寿を願う意味が込められている。

¹⁶ 養女の夫。

勝敗ではなく正義の闘いの勝敗について語っているのだとわかった。彼女が言ったのは、同じ年の6月頃に彼女が日本の市民団体の招きに応じて神戸で巡回講演をした時に、当時の福田康夫首相に宛てた手紙を正々堂々と書いた時のことだと、私は気づいた。

これが万愛花だ。自分と姉妹たちの正義と名誉を回復するために、人生と尊厳をかけて最後まで力を尽くし、20年以上にわたって世界に屈服しない呼びかけを発信している中国人女性である。

万愛花が数年間に病に伏していることを知ったセンターでは、センターの主任を務める蘇智良教授が2012年5月に太原市の病院へお見舞いに行った。2013年7月31日、センターはボランティアを派遣して再びお見舞いに行ったが、それが永遠の別れになってしまおうとは、誰も思わなかった。9月4日に万さんの養女は、母親が3日間の昏睡状態に陥った後、4日の0時45分に亡くなったことを知らせてくれた。「母が最も心残りだったのは、日本に対する裁判だ。私に対日訴訟を継承してくれと言ったので、私は娘として必ずその遺志を受け継ぐ！」と娘は言った。

この文章を書き終えたところに、海を越えて「慰安婦」問題を合同研究している中国系アメリカ人丘培培¹⁷教授からの手紙が届いた。彼女は「万愛花大娘に深い哀悼の意を表します。万大娘に、私たちが書いた本を出版するのを見てもらえなかったことは非常に残念ですが、彼女の勇敢な人生は、私たちが書いた『中国「慰安婦」』という本を通じて世界中に広まり、永遠に銘記されます。」と書いた。

万大娘、聞こえましたか。この世界は、あなたの遠ざかる叫びに応えていますよ。

<2013年9月6日付『東方早報』の「逝者」というコラム欄¹⁸に掲載>

¹⁷ 丘培培：英文の名前は Peipei Qiu であり、ヴァッサー大学の教授である。2013年に日本軍「慰安婦」制度の中国人被害女性に関する著書『Chinese Comfort Women Testimonies from Imperial Japan's Sex Slaves』（The University of British Columbia Press, 2013）が出版された。

¹⁸ 「逝者」は「亡くなった人」を意味する。誰かが亡くなったことを報道するだけでなく、その人の人生を伝えて歴史を動かすことを、この欄創設の趣旨としている。

追悼 ネリア・サンチヨさん



左から2人目がネリア(1992年12月・京都)

各界からの追悼文と報道記事

● ジュディ・タギワロ(フェイスブック)

2022年9月3日

ネリア・サンチョを偲んで

1951年8月30日—2022年9月1日

ネリア・サンチョは、セクシュアリティや性的指向の問題、そしてそれらと女性や人民の運動の前進との関係について私に教えてくれた。1986年には、彼女はすでに性的指向にもとづく差別をなくすために闘っていた。彼女はまた、フィリピンにおける慰安婦問題の提起にも尽力した。1991年か1992年に韓国に行ったとき、彼女は韓国人慰安婦と会った。女性たちは、第二次世界大戦中に拉致された韓国人女性が日本兵に性的サービスを強制された、いわゆる慰安所が組織的に設置されていたことを語った。フィリピンに戻ったネリアはラジオのインタビューを受け、韓国人慰安婦の話をし、同じような経験をしたフィリピン人女性に名乗り出てほしいと呼びかけた。ロラ・ロサ・ヘンソンはネリアの話を読み、第二次世界大戦中に日本帝国陸軍の性奴隷となった多くのフィリピン人女性の最初の一人としてカミングアウトした。国内であれ国際的な舞台であれ、私的な場であれ公的な場であれ、ネリアは常に女性の権利は人権であると主張し、女性とその子どもたちへのサービス、立法への働きかけ、教育、研究、組織化、集団行動を通じて、これらが前進するように努めた。

ネリア、安らかな旅を！

● リサ・マサ (フェイスブック)

2022年9月2日

ネリア・サンチョ、安らかに。ネリアは女性運動の象徴であり、旗手だった。彼女は「改革、誠実さ、平等、リーダーシップ、行動のための女性団結総会」(GABRIELA)の共同設立者の一人だった。彼女は1986年に私をガブリエラに勧誘し、それ以来、私たちは女性解放のための闘いに参加することで友情を深めてきた。彼女は同志であり、メンターでもあった。彼女は1986年に第一回「フィリピンにおける女性国際連帯行事」(WISAP)を開催し、マルコス独裁政権の追放をフィリピンの女性たちとともに喜び、祝う世界中の女性たちを集めた。彼女は既成概念にとらわれることなく、ガブリエラのサービス・プログラムの概念化と組織化を主導し、後に人権、女性の健康と生殖に関する権利、女性と子どもに対する暴力、女性のための社会環境プログラムに関するガブリエラ委員会へと拡大した。これらのプログラムは、農村および都市コミュニティの女性たちとの実践的な活動を通じて、女性運動構築の概念を発展させ、半植民地・半封建社会の文脈における女性解放

闘争の理論化に役立った。ガブリエラの以前から、ネリアはすでに反マルコス独裁闘争で著名だった。70年代初頭、彼女はルソン島中部で発生した大洪水の被災者支援に積極的に取り組み、オペラシオン・トゥロンに参加した。軍によって仲間の活動家が殺害されるのを目の当たりにし、不正と抑圧と闘うという大義に対する彼女の決意はさらに深まった。その後、彼女は逮捕され、政治的拘束者の窮状に注意を喚起するため、他の政治的拘束者たちとともにハンガーストライキを行った。ネリアはまた、政治犯や活動家の子どもたちにデイケアを提供する PAI (ペアレンツ・オルタナティブ・インコーポレイテッド) の設立を支援した。ネリアは慰安婦問題の先駆的かつ確固たる提唱者であり、日本のフィリピン占領中に日本兵が犯したレイプや軍事的性奴隷制度などの残虐行為を、フィリピン国民の意識に知らしめた。1987年、ネリアは進歩的政党である人民党の上院議員候補に唯一の女性として立候補した。ネリアは、フィリピンのトップモデルの一人であり、後にビューティー・クイーンになるという華やかな職業から身を引き、人々に奉仕する人生を選んだ。穏やかでありながら確固たる信念を持ち、社会解放のための困難な闘いの道を歩んできた。家族や友人たちとの日常生活の中で、彼女は政治的な原則を貫いた。彼女は私たちの闘う心の中で永遠に女王であり続けるだろう。

● ガブリエラの声明

2022年9月3日

ガブリエラ全国女性同盟は、創立メンバーの一人であり、フィリピン女性運動の象徴的存在であった敬愛するネリア・サンチョ・リャオの逝去を、深い悲しみとともにお知らせします。ネリアはまた、高く評価された愛国者であり、民主主義、社会正義、民族主権を求める人民運動のリーダーでありました。

ネリア・サンチョは、ガブリエラの設立に計り知れない貢献をしました。ガブリエラは今日、原則にもとづく団結と集団行動がいかに社会に大きな変化をもたらし、女性が社会的、政治的、経済的権利と利益のために闘う力を与えることができるかを示す輝かしい模範となっています。

彼女はビューティー・クイーンでしたが、後に女性の身体の商業化と性的搾取を拒否し、粘り強い提言活動によって国際的な女性運動においても傑出した人物になりました。

ネリアは、同世代の多くの青年活動家と同様に、勇気を持って地下に潜り、アメリカが支援するマルコス独裁政権と闘いました。ネリアは逮捕され、ついには軍によって投獄され拷問を受けました。

このように彼女は最後まで反ファシストであり続け、2022年5月の選挙では、マラカニアンへのマルコスの復帰に反対するキャンペーンを彼女なりのやり方で行いました。

彼女は断固とした反帝国主義者であり、米国や他の西側諸国による小国や弱小国への侵略に反対する他民族の大義を支持しました。そこから彼女は、キューバに対するフィリピンの連帯グループである「アミスタッド」や同様の団体の議長を務めました。

彼女は1990年にBAYAN (新民族主義者同盟) の議長を務めました。彼女はまた、フ

フィリピンの愛国的運動の他の著名な指導者と共に、人民党の下で上院議員選挙に立候補しました。

彼女はまた、ガブリエラの事務局長として、フィリピンの子どもたちの権利と福祉、貧しい女性のための社会経済・地域健康プログラム、女性の人権の促進に対応するプログラムと組織化を主導しました。彼女は、貧しい女性たちの日々の苦闘に寄り添い、共に分かち合うリーダーの模範でした。

ネリアの非常に重要な貢献のひとつは、フィリピンにおける「慰安婦」運動の確立でした。これが、彼女が健康上の理由から引退し、よりプライベートな生活を送るようになる前の、ガブリエラとの最後の関わりとなりました。ネリアは1992年にフィリピン人「慰安婦」に関するタスクフォースを発足させ、その後1994年にはリラ・ピリピーナを立ち上げました。以来、リラ・ピリピーナは日本軍による戦時性奴隷制度の被害者の声を直接届けてきました。ネリアは被害者たちとともに、法廷闘争で、議場で、街頭で、正義を求め、侵略戦争や占領戦争、軍隊による女性に対する性的暴力の停止を求めて闘ってきました。

亡くなる前、ネリアはリラ・ピリピーナの歴史文書の作成に協力し、パンデミックの前には、リラ・ピリピーナと、後にパナイ島で設立された第二のフィリピン人「慰安婦」のグループであるロラス・カンパネラの統合の促進にも尽力してきました。

彼女は回顧録を執筆する予定でしたが、健康を害したため実現しなかったようです。

私たちの姉、ネリアがいなくなるのは寂しいことです。安らかに眠ってください！

彼女は本日、本人の希望通り、近親者のみで火葬されます。通夜とガブリエラによる追悼式の詳細については後日お伝えします。

連絡先：

エミー・デ・ジーザス

シャロン・カブサオ・シルバ

● ブラットラット

<https://www.bulatlat.com/2022/09/06/tributes-highlight-beauty-of-nelia-sancho/>

ネリア・サンチョの美しさを際立たせる追悼の言葉

2022年9月6日

ミカエラ・サントス、ジャネス・アン・J・エラオ

Bulatlat.com

[マニラ] 先週亡くなったビューティー・クイーンで、女性の権利の活動家である故ネリア・サンチョへの追悼が続いている。

「ネリア・サンチョはガブリエラの設立に計り知れないほどの貢献をしました。ガブリ

エラは今日、原則にもとづく団結と集団行動がいかにかに社会に大きな変化をもたらし、女性が社会文化的、政治的、経済的権利と利益のために闘う力を与えることができるかを示す輝かしい模範となっています」。ガブリエラは声明のなかでそのように述べている。

1971年、サンチョはオーストラリアのメルボルンで開催されたコンテストでクイーン・オブ・ザ・パシフィックに選ばれた。フェルディナンド・マルコス・シニアの独裁政権下、提言団体ダキラによる2016年の女性月間の賛辞で述べられているように、彼女は「国の有意義な変化を追求して」、進歩的運動、そして後には地下運動に積極的に参加した。

戒厳令下の1976年から1978年にかけて、彼女は他の活動家と共に逮捕され、拘留された。その際、彼女は軍から拷問を受けた、とガブリエラは述べている。

サンチョはその後、1987年の上院議員選挙に際して、新しい政治を提唱するため、労働運動指導者の故クリスピン・ベルトラン、報道の自由の闘士ホセ・ブルゴス・ジュニア、人権弁護士のロメオ・カプロンらとともに、人民党の旗の下に立候補した。

彼女はまた、1990年に新民族主義者同盟（BAYAN）の議長を務めた。

アジア女性人権評議会は、「疎外された人々への共感、鋭い知性、穏やかだが確固たる交渉力によって、ネリアは偉大な人権擁護者となった」と追悼の意を表している。

活動家、母親となったビューティー・クイーン

サンチョは以前、アジア・ジャーナルUSAとのインタビューで、当初はフィリピン大学で医学部進学課程を履修していたが、後にマスコミュニケーションに専攻を変えた、と語っている。

1969年、彼女はビニニン・ピリピナスのコンテストに参加し、準優勝した。その後、フィリピンのトップ・ファッションデザイナーの一人であるビトイ・モレノのモデルを務め、後にフィリピン観光省からクイーン・オブ・パシフィックのコンテストのフィリピン代表に任命された。

任期を終えた後、彼女は学生運動、とくに米国のベトナム戦争への関与に抗議する活動に参加するようになった。彼女はまた、後に地下運動に参加することになる同級生たちを支援した。

しかし1973年、かつての同級生たちが逮捕され、サンチョの名前を含む寄付者や支援者のリストも一緒に押収された。そのため、彼女たちも身を隠すことを余儀なくされた。

転機は2人の大学教授が殺害されるのを目撃したことだったと、彼女はアジア・ジャーナルUSAのインタビューで語っている。

「私の良心は落ち着きませんでした。軍隊にとっても腹が立ちました。最終的に私は地下活動に参加することに決めました。実際のところ、私は地下組織を探さなければなりませんでした。その逆ではありません。彼らから私を探したり、リクルートしたわけではありません」と彼女は語っている。

後悔はあるかと尋ねられたとき、まったくないと彼女は言った。「なぜなら、それはその時の私の良心にもとづく決断だったからです」。

「機会があればもう一度やるかどうかですか？ まあ、私にはすでに経験がありますが、

おそらく別の経験を試すかもしれません」とサンチョはインタビューで語っている。

BAYAN はその追悼声明で、組織にとって「重要な年月」であったとする 1990 年から 1994 年にかけて議長を務めたサンチョに最高の敬意を表した。「彼女は、加盟する各階層団体とともに、BAYAN に不和の種をまこうとするあらゆる試みを失敗させるために、原則的で、鋭く、たゆまぬ努力を示した。彼女は、闘争を継続させようとする私たちの努力を結びつける光となった」。

彼らもまた、常にスケジュールや活動でいっぱいになっている彼女の携帯カレンダーを覚えている。縁周りを含め、すべてのスペースが彼女のメモで埋め尽くされていた。

BAYAN はまた、サンチョの人生、そして周縁化された人々に寄り添ってきた彼女の闘いを理解し支えてくれたサンチョの家族にも感謝している。

一方、フェイスブックの投稿で、サンチョの娘であるアンナ・ルイーズは、母親を新しいことに挑戦することを恐れず、とても生き生きとした人だったと語っている。「一番の思い出は、あなたが子どもの頃に私に本を読んでくれたことです。」

アンナ・ルイーズは付け加えて、息子を妊娠していたとき、母親が息子を抱っこして「毎朝外に出て、彼に必要な朝日を浴びせていました。アヴァはあなたに知恵をもらい、あなたをいつも楽しませてくれたと思うわ」と書いている。

フィリピン人慰安婦のチャンピオン

ガブリエラは、フィリピンの女性運動へのサンチョの重要な貢献のひとつは、フィリピン人慰安婦の権利と賠償の推進を提唱したことだと述べている。

元社会福祉長官で女性の権利の活動家であるジュディ・タギワロはある投稿によれば、サンチョは 1990 年代初頭に韓国を訪れ、第二次世界大戦中に日本兵に性的サービスを提供するために拉致された韓国人慰安婦に会った。「フィリピンに戻ったネリアはラジオのインタビューを受け、韓国人慰安婦の話をし、同じような経験をしたフィリピン人女性に名乗り出てほしいと呼びかけた」。

それを受け、ロラ・ロサ・ヘンソンは、日本の占領下での経験を共有するためにフィリピン人慰安婦として初めて名乗り出た。

1992 年、彼女はフィリピン人慰安婦に関するタスクフォースを発足させ、2 年後にはリラ・ピリピーナを立ち上げた。リラ・ピリピーナは、フィリピンでの日本軍による戦時性奴隷制度のサバイバーの声を代弁してきた。彼女はまた、フィリピン人慰安婦の窮状を記録した「ロラス・カンパネラ」を率いてきた。

「ネリアは被害者たちとともに、法廷闘争で、議場で、街頭で、正義を求め、侵略戦争や占領戦争、軍隊による女性に対する性的暴力の停止を求めて闘ってきました」とガブリエラの声明は述べている。

女性運動のインスピレーション

一方、先住民族の権利に関する元国連特別報告者のヴィッキー・タウリ・コープスは、

サンチョはフィリピンでの女性運動の重要な役割を担ってきたと述べました。

ガブリエラの声明は、創設メンバーの 1 人で元事務局長であったサンチョは、「フィリピンの子どもたちの権利と福祉、貧しい女性のための社会経済・地域健康プログラム、女性の人権の促進に対応するプログラムと組織化を主導してきました」と述べている。

「彼女は、貧しい女性たちの日々の苦闘に寄り添い、共に分かち合うリーダーの模範でした」とガブリエラは付け加えている。

ガブリエラ女性党のアーリーン・ブロサス議員は、サンチョは亡くなったが、彼女は「この国において人道危機の悪化と闘い続ける何世代もの女性たちを鼓舞し続けるだろう」と語っている。

ダバオ市の医師で、ガブリエラ南ミンダナオ支部の議長ジャン・リンドは、追悼文のなかで次のように述べている。「私は非凡な人間に向けては握った拳を振り上げます。さようなら、そして、ありがとう、ネリア・サンチョ。私は悲しみのなかにいますが、あなたの中に目的を見出し、それは生きています」。(RTS, DAA) (<https://www.bulatlat.org>)

● フィリピン・デイリー・インクワイア

<https://newsinfo.inquirer.net/1657738/nelia-sancho-beauty-queen-womens-rights-activist-71>

ネリア・サンチョ、ビューティー・クイーン、女性の権利活動家。71 歳

ガブリエル・パビコ・ラル @GabrielLaluINQUIRER.net

2022 年 9 月 2 日午後 10 時 13 分



写真はフェイスブックから

【フィリピン・マニラ】 女性の権利の活動家で元ビューティー・クイーンのネリア・サンチョが71歳で亡くなった。彼女の家族とガブリエラ女性党のメンバーが金曜日に確認した。

フェイスブックの公開投稿で、娘のアンナ・ルイズ・サンチョ・リャオは、最後まで活動を追求し、ガブリエラの共同創設者の一人となった元ビューティー・クイーンの死を確認した。

「ナナイ、私はあなたのことをこうして覚えておくわ。今を楽しみ、新しいことに挑戦することを恐れず、とても生き生きとしていた」と、アンナ・ルイズは海を楽しむ母の写真を掲載した投稿のなかでそう述べている。

「あなたはいつも私の母であり、私の支えであり、私の力です。私の批評家であり、チアリーダー。私の子どもたちエヴァとTJのお気に入りのおばあちゃん、姪のクロエとフィオナ、甥のウェイン・トニー・スコットの最高のおばあちゃん。あなたがいなくなって寂しいです」と彼女は付け加えた。

別の声明で、ガブリエラ女性党は、サンチョの遺族に哀悼の意を表し、女性の権利擁護者であるサンチョは、女性は単なる従順な個人ではないことを示したと指摘した。

「ガブリエラ女性党は、確固たる人権擁護者であり、女性の権利を擁護した勇敢なガブリエラ・シランにちなんで名付けられた組織であるガブリエラの共同創設者の一人であるネリア・サンチョの家族に哀悼の意を表する」と同党は述べている。

「彼女は、女性は従順で従属的な存在ではなく、真の自由と人権を推進する上で重要な役割を果たしていることを証明した」と声明は付け加えている。

サンチョは、前大統領フェルディナンド・マルコス・シニアの戒厳令下で活動家になった二人の元ビューティー・クイーンの一人である。もう一人はガブリエラと連携していたマイタ・ゴメスだった。

サンチョは1969年にビニビング・ピリピナスに出場し、2位になった。その後、1971年にオーストラリアで開催されたミス・コンテストで、クイーン・オブ・ザ・パシフィックに選ばれた。

ゴメスと同様、サンチョもファッション・デザイナーで国民的アーティストのホセ・「ピトイ」・モレノの人気モデルだった。

「1971年にクイーン・オブ・ザ・パシフィックの称号を獲得したにもかかわらず、ネリア・サンチョは快適で特権的な生活を捨て、第1四半期の嵐が始まると活動家になり、最終的に戒厳令下で地下運動に参加し、政治犯になった」とガブリエラ女性党は述べている。

「その後、彼女は同じくビューティー・クイーンから活動家に転身したマイタ・ゴメスと共に、女性の権利団体ガブリエラ全国女性同盟を共に設立した。彼女は女性のエンパワーメントを積極的に提唱し、第二次世界大戦のフィリピン人慰安婦への正当な賠償を求める運動家の一人となった」。

ガブリエラ女性党によると、サンチョの人生は、女性の権利のために闘いたいと願う人々にインスピレーションを与えるだろう。「亡くなったにもかかわらず、ネリア・サンチョの人生は、この国の悪化する人道危機と闘い続ける何世代もの女性たちを鼓舞し続けるだろう」とこの団体は指摘している。

● フィリピン・デイリー・インクワイア

<https://newsinfo.inquirer.net/1658083/from-pageant-to-picket-nelia-sancho-71?fbclid=IwAR0B19YsG7UhfLeMDGWo2ZlZH3ds9ZGZWORo01ibHPNbJOATsk3NMU8xmlA#Echobox=1662243242>

コンテストからピケットへ：ネリア・サンチョ、71歳

デンプシー・レイエス @dempseyreyesINQPhilippine Daily Inquirer
2022年9月4日 05:34 AM



ネリア・サンチョ（写真はインクワイア紙）

〔フィリピン・マニラ〕 彼女はしばしば「ビューティー・クイーンから活動家に転身した」と評され、長年にわたり同国のアンダーグラウンド左翼に関与してきたことで、タイム誌から「ゲリラ・クイーン」と呼ばれたこともあった。

1971年にクイーン・オブ・ザ・パシフィックの称号を得たネリア・サンチョは後年、期待を裏切り続け、一時は北朝鮮とフィリピンとの友好協会の会長になり、上院議員と同じ社交界で社交ダンスをし、フェミニストの友人たちを大いに失望させつつ売春の合法化を推進した。

彼女の非正統的な選択について人々がどのように考えたとしても、9月1日に71歳で亡くなったサンチョが豊かで目的のある人生を送っていたことには誰もが同意するだろう。彼女は土曜日に非公開で火葬に付され、今日の午後1時から通夜が始まると、娘のアンナ・ルイーズは自身のフェイスブックに投稿した。

「(ネリアは)自分がやっていること、やってきたことに満足していた」。サンチョと1967年のミス・フィリピン・ワールドのマルガリータ・「マイタ」・ゴメスが1984年に共同で設立した女性の権利団体ガブリエラの元パーティー・リスト代表で、戒厳令時代に地下活動をしたこともあるリサ・マサはそう語っている。

8人兄妹の5番目であるサンチョは、政府監査官としての仕事で全国を回る父親についていながら、何不自由ない生活を送っていた。医学生時代、自分があまりにも不器用なことに気づき(1999年のサンデー・インクワイアラー誌(SIM)のインタビューで彼女は、「動物の解剖をするたびに吐いていました」と語っている)、フィリピン大学(UP)のジャーナリズム学科に転向した。

大義に引き寄せられて

彼女は、1969年のビニビニング・ピリピナスのコンテストでグロリア・ディアスと共にピンキー・モンティノーラに次いで2位になった後、「冒険として、自分が何になれるかを探求する楽しい方法として」、すぐに他のビューティー・コンテストに参加するようになった。オーストラリアでのクイーン・オブ・ザ・パシフィックのコンテストにフィリピン代表として出場した彼女は優勝し、あわせて「最もフォトジェニックな女性」賞を受賞した。

一年後の1972年、サンチョは仲間のビューティー・クイーン、ジェマ・クルーズ・アラネタとゴメスと共に、同じコンテストに対してピケを行った。「私たちは女の子たちではなく、コンテストだけを非難したのです」と彼女は言い、「(汚い老人たちが)いつもわいせつな提案をしていました」と付け加えた。

1972年の中部ルソンでの大洪水の際に救援活動を手伝ったことで、サンチョは集会や他の活動家たちとの会合に参加し、彼らの民族主義的大義にできる限りの寄付をするようになった。しかし、そのような会議のひとつで軍がマラボンを急襲したことが彼女の人生を変えた。「彼らはロスバニョスから来た二人のフィリピン大学の教授を狙っていたのです」と彼女は回想する。彼女は兵士たちが二人を至近距離で撃ったことに衝撃を受けた。サンチョは地下に潜ることを決意した。

彼女がミンダナオの地下活動のネットワークのなかで夫のアントニオ・リャオと出会い、アントニオ・カルロ(AK)とアンナ・ルイーズの二人の子どもをもうけた。しかし、結婚は長続きしなかった。「私たちは逮捕され、別々に勾留されたため、一緒に暮らすことはほとんどありませんでした」と、サンチョはSIMのインタビューで語っている。

地下活動に参加してから一年後、彼女は逮捕された。「前かがみになり、ダスターコートを着て化粧をせずに歩き回っていたのですが、認識されていたのでしょうか」と彼女は語った。サンチョは1976年から1978年まで勾留された。

NGO 活動

マルコスが1986年に逃亡した後、サンチョは1987年に人民党の下で出馬したが、落選した。彼女は最終的には戦闘的連合組織を去ることになる。「人は街頭集会だけでなく、さまざまなレベルから、さまざまな創造的な方法で、社会を変えることができます」と彼女は言う。

実際、サンチョは自分自身で行動し、いくつかの非政府組織（NGO）に参加した。その中には、慰安婦への正当な賠償を提唱するアジア女性人権評議会がある。「政治闘争の人間的な表情を見て、それを（自分の）個人的な生活に置き換える」ことは、政治的拘束者の子どもたちのためのコミュニティ・デイケアであるペアレンツ・オルタナティブ・インコーポレイテッドを設立することを意味した。それは彼女の「支援システム」としての役割も果たしたと彼女は言う。

ガブリエラを共同で設立したことは彼女の中のフェミニストに「触れた」とサンチョは付け加える。「慰安婦や売春婦が、被害者から力を得た女性へと変貌を遂げたことも、私の成長とエンパワーメントに貢献しました」と彼女はSIMに語っている。

セクシュアリティにひるまずに

サンチョは従軍慰安婦（戦争中に日本兵によって性奴隷として徴兵された少女たち）の大義を取り上げ、リラ・ピリピーナとロラス・カンパネラを設立し、この問題を世間に知らしめた。個人が政治的なものであることを再び証明した彼女は、ア克蘭州カティ克蘭にある彼女の家族の家に慰安婦の像を設置することを許可した。その像が日本政府からの抗議を受けて、何度か公共の場から撤去されていたからだ。

論争を恐れず、サンチョはかつて売春の合法化を主張し、売春の非犯罪化と「これらの女性たちを犯罪者にし、一日おきに警察の手入れと恐喝にさらしている」浮浪禁止法の廃止を主張した。

サンチョは、セクシュアリティや性的指向の問題について議論する際にひるむことはなかった、と戒厳令のサバイバーである元社会福祉長官のジュディ・タギワロは言う。「1986年には、彼女はすでに性的指向にもとづく差別をなくすために闘っていた」とタギワロは述べる。「国内であれ国際的な舞台であれ、私的な場であれ公的な場であれ、ネリアは常に女性の権利は人権であると主張し、女性とその子どもたちへのサービス、立法への働きかけ、教育、研究、組織化、集団行動を通じて、これらが前進するように努めた」と彼女は付け加えた。

「ロラ・ネリア」

同僚や仲間の活動家は、サンチョを民衆の権利のために闘う大胆不敵な戦士と見なしているが、彼女の家族は愛する母親、愛情深い祖母、寛大な義母を失うことになる、と彼女

の娘は明かした。

「彼女は周りの人々の目には、勇気づけられ、英雄的でさえあります。娘や姪たちに、ロラ・ネリアについて素晴らしいことを話すことができます」。アンナ・ルイーズは、オンラインメッセージでインクワイアラーにそう語っている。

母親にそっくりな声で、彼女は次のように付け加えました。「女性の権利と貧しい人々のための闘いは始まって久しいですが、まだ終わってはいません。弱者を食い物にする抑圧者は常に存在するのです」。

アンナ・ルイーズは次のように語る。「私の希望はサンチョのような女性たちがもっと出てきて、より大きなものの一部になることです。誰かが立ち上がり、私たちが有能で強いのだということを思い出させてくれる必要が私たちにはあります。私たちは攻撃されても押し返すことができます。コミュニティ、社会、政府の助けを借りて、私たちは自分自身を守ることができるのです」。

出典：「女戦士」、ペニー・アザルコン・デラ・クルス、Sunday Inquirer Magazine、1999年3月28日

● ページェント・スローバック・フィリピン

Pageant Throwback Philippines

2019年4月11日

ネリア サンチョは、デザイナーのピトイ・モレノのモデルで、1969年のビニベニング・ピリピナスのコンテストでグロリア・ディアスと共に次点となり、1971年のクイーン・オブ・ザ・パシフィックでタイトルを獲得し、「最もフォトジェニックな女性」賞を受賞しました。

ネリアは鋭いナショナリズムと若者の理想主義によって第1四半期の嵐が始まると活動に加わり、最終的には戒厳令下の地下運動に参加しました。その後、彼女は政治犯となり、80年代初頭にビューティー・クイーンから活動家となった仲間のマイタ・ゴメスとともに女性グループ・ガブリエラを共同で設立しました。

エドサ革命の後、彼女は1987年に上院議員に立候補して落選しましたが、女性のエンパワーメント、ナショナリズムの発展、および第二次世界大戦時のフィリピン人慰安婦への正当な賠償を提唱するいくつかの進歩的な組織への関与を続けています。

彼女は美貌のビューティー・クイーンというだけでなく、私たちの社会の、疎外され、しばしば無視されている不利な立場の人々に奉仕するという真の目的意識を持っています。

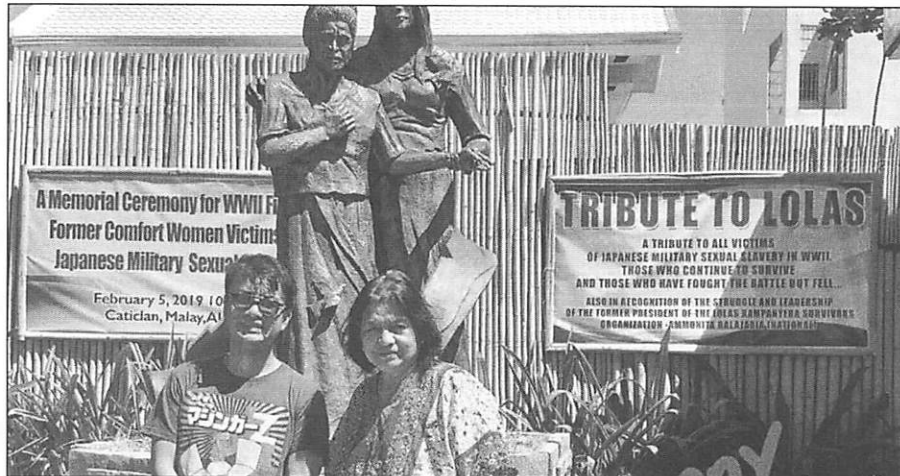
● ミンダ・ニュース

<https://www.mindanews.com/top-stories/2022/09/nelia-sancho-beauty-queen-activist-passes-away/>

ビューティー・クイーンで活動家のネリア・サンチョが死去

2022 年 9 月 2 日 14:49

アントニオ・L・コリーナ IV



ア克兰州カティックランにあるロサ・ヘンソン像の前に立つネリア・サンチョ（右）。ヘンソンは、第2次世界大戦中の日本兵から受けた辛い体験を公にしたフィリピン人慰安婦の一人である。写真はデニス・ゴレチョのフェイスブック・ページより。

[ダバオ・シティ (ミンダ・ニュース/9月2日)] ビューティー・クイーンから活動家に転身したネリア・サンチョの訃報が金曜日に伝えられ、多くの追悼が寄せられている。

ガブリエラ女性党のジャン・リンド博士によれば、木曜日の午前10時ごろ、1971年にクイーン・オブ・ザ・パシフィックの称号を獲得したサンチョは、ケソン・シティのUPブリス・ハウスで死亡しているのを発見された。

リンドによれば、母親の死を彼らに知らせたのはサンチョの息子であるアントニオ・カルロであった。サンチョは71歳だった。

リンドは、サンチョが「草の根レベルで民衆とともに闘った」女王として、女性運動と弱い立場にあるコミュニティのエンパワーメントに大きく貢献したことに感謝している。

「あなたは単なる太平洋の女王ではありませんでした。あなたは企業が定義するようなフェミニストではありませんでした」と彼女は述べる。

サンチョの提言は非難されたが、世界中の人々がサンチョの平和と正義のための活動を称賛してきたと、リンドは付け加えた。

「私は非凡な人間に向けて握った拳を振り上げます。さようなら、そして、ありがとう、ネリア・サンチョ。私は悲しみのなかにいますが、あなたの中に目的を見出し、それは生きています」と彼女は語っている。

1969年、フィリピン大学在学中、サンチョはビニビング・ピリピナスに出場し、フィリピンで初めてミス・ユニバースに輝いたグロリア・ディアスに次いで第二位となった。

その2年後、フィリピン観光局は彼女をオーストラリアのメルボルンで開催されるクイーン・オブ・ザ・パシフィックのフィリピン代表に任命した。彼女はその称号を獲得し、

「最もフォトジェニックな女性」賞を受賞した。ページェント・スローバック・フィリピンのフェイスブック・ページによれば、彼女はピトイ・モレノの人気モデルでもあった。

サンチョは学生活動家になり、その後戒厳令が布告されてからは、地下活動に参加した。彼女はカガヤン・デ・オロ市での家宅捜索中に逮捕され、1976年から1978年まで2年以上投獄された。

1984年末、サンチョはカガヤン・デ・オロ市に戻り、進歩的グループのリーダーたちがミンダナオ全域でのウェルガン・バヤン（ゼネスト）の計画を議論していた会議の中で、その経験を振り返っている。



ミス・コンテストに抗議するネリア・サンチョ（右）。
リサ・マサのフェイスブック・ページの写真から。

彼女は同じくビューティー・クイーンから活動家に転身したマイタ・ゴメスと共にガブリエラ全国女性同盟を設立した。

この組織の名前は、革命家ディエゴ・シランの妻と同様に英雄であるガブリエラ・シランにちなんで名付けられた。

1990年代、サンチョは教会指導者たちによって1974年に結成された先駆的な人権団体であるフィリピン被拘禁者タスクフォースの理事に選出された。

ガブリエラ女性党はその声明の中で、サンチョの遺族に哀悼の意を表している。

「1971年にクイーン・オブ・ザ・パシフィックの称号を獲得したにもかかわらず、ネリア・サンチョは快適で特権的な生活を捨て、第1四半期の嵐が始まると活動家になり、最終的に戒厳令下で地下運動に参加し、政治犯になった」とその声明は述べている。

第1四半期の嵐とは、フェルディナンド・E・マルコス大統領が戒厳令を敷く数か月前の、大規模な学生の抗議活動があった時期のことだ。

サンチョは女性のエンパワーメントを積極的に提唱し、第二次世界大戦中のフィリピン人慰安婦への正当な賠償を求めてきた、とガブリエラ女性党の声明は述べている。

「彼女は、女性は従順で従属的な存在ではなく、真の自由と人権を推進する上で重要な役割を果たしていることを証明した」。

ガブリエラ女性党は、サンチョの人生は、「この国で悪化する人道危機」と闘い続ける

何世代もの女性たちを鼓舞し続けるだろう」と付け加えている。

受賞作家のドン・パグサラは、「第1四半期の嵐の参加者で、政治的拘束者であり、第二次世界大戦中の日本による残虐行為の被害を受けた女性たちの正義を求める運動の指導者であり、北朝鮮の民衆との連帯の擁護者であった」サンチョの訃報に接し、悲しんでいると述べている。「ネリア同志、敬意を込めて追悼します」。

作家で歴史家のマカリウ・ティウは、サンチョを「真の自由の闘士」と呼んだ。

「美しさ、知能、フィリピンの民衆への真の愛。最も美しい魂、フィリピン民衆のヒーローだった」とティウは付け加えている。

ソーシャルメディアにも、悲しみとサンチョに対する称賛の声が殺到している。

サンチョは、同じく戒厳令中に拘束され、マルコス追放後の1986年に釈放された活動家、故アントニオ・リャオと結婚した。しかし、彼らの結婚は長続きしなかった。

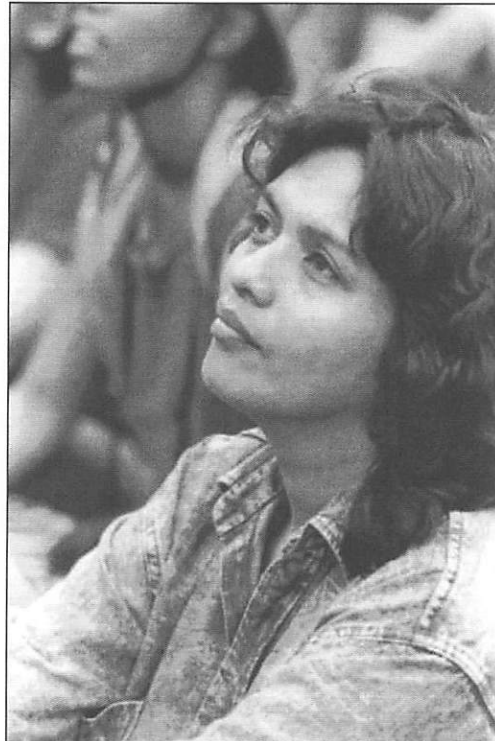
● ダイアリスト

<https://www.thediarist.ph/nelia-sancho-the-beauty-queen-who-didnt-choose-the-path-of-glamor-privilege/>

ネリア・サンチョ：華やかさ、特権の道を選ばなかったビューティー・クイーン

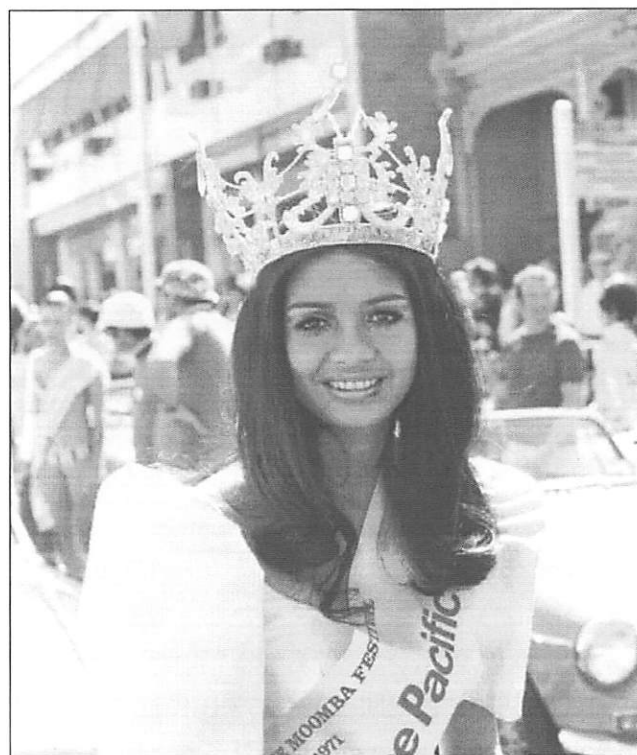
2022年9月15日

エリザベス・ロラーガ



ネリア・サンチョは大衆行動のなかで目的をもって生きた（写真：ロメオ・マリアーノ）。

9月はネリア・サンチョ死去のニュースで始まった。このニュースが二重に衝撃的だったのは、彼女がさる9月1日に、オペラのヒロインのように吐いた血を喉に詰ませながら孤独死したことを知ったからだ。

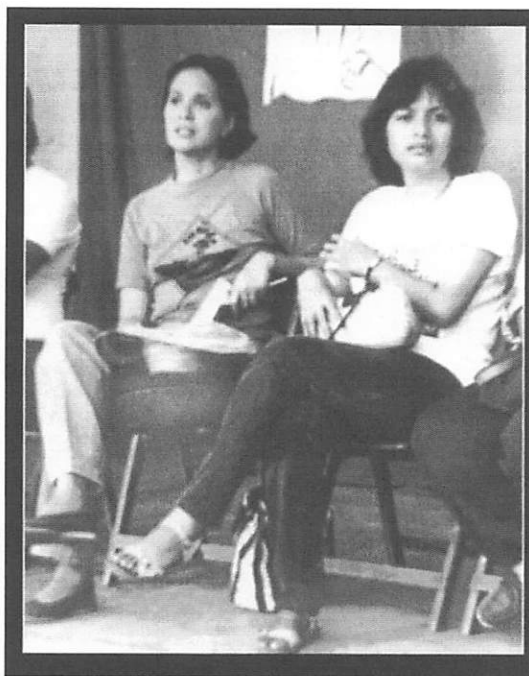


クイーン・オブ・ザ・パシフィック（写真はフェイスブックより）

ソーシャルメディア、とくにフェイスブック上では、彼女がもっと健康に気を配っていたらという悲しみと後悔の声が溢れていた。しかし、彼女はいったい何者なのだろうか？彼女を知る人、とりわけ社会変革運動に取り組む人々は、マルコス独裁反対運動の時期の地下活動を行い、タギッグ州のピクタン・リハビリテーション・センターに政治犯として収容されて以来、かつてクイーン・オブ・ザ・パシフィックの称号を得たこの女性の健康状態が思わしくなかったことを知っていた。

彼女は肺結核を患い、その後、頻繁なインスリン注射を必要とする深刻な糖尿病を発症した。しかし、彼女の突然の死を惜しむ人々は、これらはすべて医学的に対処可能なものだったと言う。彼女がその声と顔を提供してきた左翼には、ある意味で彼女を無視し、彼女に付き添う介護者もいなかったという悲しい状況の中での彼女の死について部分的な責任があるという意見も出されている。

ネリア・サンチョとは何者であり、なぜフェミニストたちは公然と彼女を追悼するのだろうか。精一杯生き、目的に向かって邁進した人生を通して、彼女はどんな教訓を残したのだろうか？



マイタ・ゴメスと（写真はフェイスブックより）

ニューヨーク在住の小説家でエッセイストのニノチカ・ロスカは、「ネリアは戒厳令以前から有名で、私は彼女の政治的な変遷を知っていたし、戒厳令下でのビューティー・クイーン部隊やマラボンでの彼女の逮捕についても知っていた」と述べている。

その後、ネリアは1980年代初頭に代表団とともに米国に行った。彼女と（ジャーナリストの）ジョアン・マグリポンは、ニノチカが受け入れることになった。「ある日、ネリアから高級レストランでのディナーデートに付き合ってほしいと頼まれた。私は、彼女に付き添いがいるとホストが怒るかもしれないと言ってみた。彼女は、見た目のいい男と二人きりで食事をしているところを見られたくないのと言った。『見た目がいい？ それなら、あなたはここにいて。私が彼と食事に行くわ』と私が言うと、ネリアはふくれっ面をした。ジョアンは笑ったが、ネリアは明らかにニューヨークの冗談に慣れていないようだった」。

1986年、マルコス一族が追放される前、ニノチカは『ミス・マガジン』の取材で、彼女にインタビューするよう頼まれた。二人は日時を決めたが、ネリアはこの記者を2時間も待たせた。「でも彼女はとても丁寧に謝るから、誰も怒ることができない」。ネリアは「私がフェミニズムに正式に足を踏み入れるきっかけをつくってくれた。1988年に彼女に誘われ、一年かけて勉強しました。ある意味、彼女は私を別の道に導いてくれたのです」とニノチカは述べる。

ガブリエラの名誉議長、シスター・メアリージョン・マナンザンは、ネリアがミス・フィリピン・コンテストで2位、クイーン・オブ・ザ・パシフィックで1位となったビューティー・クイーンであったことから、ネリアのことはすでに耳にしていたという。「しかし、私が彼女に個人的に会ったのは、彼女がガブリエラに加入したときです。私は当時議長で、彼女は1986年のリディ・ナクピルを継いで、事務局長になりました」。

シスター・メアリージョンとネリアは、「貧しい人々や周縁化された人々の側に立つと

いう私たちの取り組みに心から同意しました。ネリアは枠にとらわれずに考えることができる人です。私や多くのフェミニストが彼女に同意しなかった問題のひとつは、売春を合法化し、売春する女性を合法的なセックスワーカーとして受け入れようとする彼女の努力でした。私は彼女がどこから来たのか知っていました。彼女はそうした女性たちに対する本当の思いやりがありました。彼女はそれが彼女たちに地位を与えると確信していました。当時、これは西洋のフェミニストの考え方でした」。

シスター・メアリージョンは、第三世界の女性たちは貧困と抑圧のために真の選択肢を持っておらず、売春する女性たちを「被害者であることを超越し、サバイバーそして提言者となるように力を与えたい被害者」とみなしていた。

彼女は、ジェマ・クルス（後のアラネタ）、マイタ・ゴメス、ネリアのようなビューティー・クイーンが戦闘的な女性運動の最前線にいることを素晴らしいと感じた。このベネディクト会の修道女は、「それは女性運動の『宣伝』のようなものでした。後に美人コンテストによる商品化や物体化に気付くとき、彼女たち自身が美人コンテストをボイコットするようになったことには、さらに大喜びしました」。

コミュニティ・オブ・ラーナーズ・ファンデーション（COLF）のエグゼクティブ・ディレクターであるフェニー・デ・ロス・アンヘレスは、1979年にネリアと出会った。「ネルは27歳で、当時幼児だった息子のAKと親としての道を歩み始めていた。彼女は刑務所から出所したばかりで、独り立ちしたばかりだった。20歳の私は、フィリピン大学家庭生活・子ども発達学科（FLCD）の新卒者として、教員としてのキャリアをスタートさせていた。ネルは当時、同学科が地域教育サービスの一環として開催していた幼児教育の夏期ワークショップに参加した。私はそのグループでフルタイムで働く教員の一人だった」。



ピクタンの政治的勾留者。ネリアは右から7番目。（写真はフェイスブックより）

「ネリアや他の元政治囚たちは、両親がまだ拘束されていたり、釈放されたばかりだったり、外での生活を再開していたり、孤児として親戚に面倒を見られている政治的拘束者の子どもたちを支援するペアレンツ・オルタナティブ・インコーポレイテッド（PAI）を組織する初期段階にあった。私たちは彼らのためのデイケアセンターの設立に協力した」。

フェニーはフィリピン大学で教鞭を執る傍ら、PAI のボランティアとして「仕事後の仕事」をしていた。「近くで一緒に働く過程で、ネルと私はすぐに友達になった」。

ガブリエラ女性党の活動家リサ・マサも、PAI 経由でネリアと知り合った。「私は息子のためにデイケアを探していました。PAI が活動家の子どもたちを受け入れていると聞いたんです。当時、私は反独裁運動で活動していたので、デイケアが必要でした。また、ネリアが PAI を運営しており、自身も活動家であることを知っていたので、彼女なら私たちの懸念を理解してくれると確信していました。彼女は最終的に私をガブリエラに採用しました」。

「ビューティー・クイーンから活動家に転身した彼女の個人的な経歴は、すぐに私の尊敬を集めました」とリサは続ける。「彼女が華やかで特権的な道を選んでいれば、この社会で快適な生活を送ることは容易だったでしょう。ガブリエラで彼女と直接仕事をするなかで、私は彼女への称賛の念を深めました。なぜなら、彼女は実践的で、勤勉で、創造的で、貧しい人々に対する真の思いやりがあったからです。彼女は政治囚の女性や、人権侵害や性暴力の被害者にサービスを直接提供するさまざまなプログラムを立ち上げました。彼女はただ美しく魅力的な人ではなく、有能で熟練した女性リーダーでした」。



ネリアの通夜で話すニッキー・コステング元上院議員。リト・オカンボによる写真

元上院議員で街頭の国会議員ニッキー・コステングは、ジェマ・クルスがミス・インターナショナルのタイトルを獲得したとき、自分はやっと高校を卒業したところだったと振り返る。「彼女、マイタ、ネリアの3人は、脅迫や実際の拷問、物質的な快適さを奪われたとしても、信念と献身は弱まることはないことを示しました。実際、彼女たちは自分の信念を貫き、その代償を支払ったのです」。

ニッキーはネリアとの出会いを次のように語っている。「彼女との活動の大半はナショナリストの発言者が、歴史的事実とフィリピンの現状との関連性を語る場への参加だった。私たちはまた、街頭議会などの大衆行動にも参加しました。雨の中、あるいは炎天下の中、真昼の何キロもの距離を、時には4時間以上もかけて行進し、やっとの思いで集会会場にたどり着いたことを何度もあったことを思い出します。放水を浴び、オールで胸を殴られるような思いをしたこともありました！ ずぶ濡れになって気分が悪くなりましたが、家に帰るためにまた数時間歩かなければなりませんでした」。

ネリアは「決して疲れているようには見えませんでした。そして本当に、私たちは自分が疲れていることを認めたくありませんでした。たぶん、私たちにとって『疲れ』は感じるべきものではなかったのでしょうか」と彼女は振り返っている。

ニノチカは、ネリアが「特に私生活に関してはガードが堅い」と感じていた。「彼女はいつも自分の使命に集中していた。地下活動の経験のある人はたいていそんな感じだ。ただ、彼女がある時、結婚生活の困難について短く話したことがあった。オランダで、私がフィリピンの女性団体の代表を務めた会議で、私たちは一度衝突したことがある」。メアリージョンと同様、ニノチカも売春を合法化すべきだとは考えていなかった。「ネリアは会議の外で私に、私の立場は古臭いマルクス主義であり、フェミニストではないと言った。私はフェミニストの立場とは何かと尋ねた。彼女は、自分のセクシュアリティをしっかりとコントロールできる女性もおり、彼女たちは無力感を感じることなく、それを市場に出すことができる、と言った」。

ニノチカやメアリージョンと同様、リサも売春問題ではネリアと意見が合わなかった。「ガブリエラは、売春は女性に対する暴力の一形態であり、売春をする女性のほとんどは貧困に追い込まれ、家父長制による抑圧の犠牲者であるというのが、当時の私たちの立場であり、現在も維持していることなので、この点ではネリアと意見が合いませんでした。意見の不一致にもかかわらず、私たちは互いの意見を聞くことに前向きでした。この意見の違いは、女性運動の発展のために彼女が貢献してきた活動を否定するものではありません」。

フェニーとネリアはほとんどすべてにおいて意見が一致した。この教師は、「意見の食い違いがあったという記憶はない。まったくなかったと言っていい。互いを尊重する気持ちが常にあった。ネルは親として私にアドバイスを求めた。私はAKとアンナにとって彼女の村の一員だった。その後、彼女は孫のことで悩んだとき、私を頼ったこともあった」。

彼らの確固とした共通点は、子どもの権利の擁護であった。世界的な運動が本格化した80年代初頭、国連子どもの権利条約が起草され、1989年にはほぼすべての国連加盟国によって批准された。ネルは私に国際会議での講演や作業部会への参加を要請した。彼女は私を信頼し、私の学歴と進歩的な教育者としての経験から多くの貢献ができると主張した。私は彼女のことを、子どもの権利に関するグローバルNGOの世界における『人材スカウトマン』と呼んでいたと思う」。

無料法律支援グループのミラベル・クリストバル弁護士は、「ネリアはわたしが子どもの権利に取り組むきっかけをつくってくれたので、彼女と私は一般的な女性の権利擁護と子どもの権利について意見が一致しました。私たちは常識的な問題については同意していましたが、それ以外の問題については、彼女はいつも運動の優先事項やプログラムだと私か認識しているものに従っていると感じた。彼女はいくつかの事柄について自分の意見を持っていたが、たいていの場合、それを自分の胸にしまっておくか、親しい人たちだけに話し、すう勢的な意見に反対しなかった。彼女は「一線を守って」いた。私は「有名人」とみなされる人物がその公的な立場を利用して異なる立場を取ったり、時に調子を崩すのを見てきたので、私は当時、彼女の態度に感心した。

ニッキーは、1985年7月にケニアのナイロビで開催された「国連女性の10年会議」（フ

オーラム'85) のフィリピン代表となったとき、ネリアとより親密になった。「当時の私たちの課題は、米軍基地の存在、女性に対する暴力、政治囚の釈放、人権、リプロダクティブ・ヘルス、環境などでした。ネリアは付き合いやすく、非常に勤勉で規律正しかった。彼女はスケジュールに厳格で、世界中の女性団体に接触し、多くのネットワークをつくりました。彼女はスーツケースいっぱいのチラシや資料を持って、会場のあちこちに配ったり貼ったりしていました」。

彼女にとって、「ネリアはいつも思慮深く、メッセージを伝えるときも誇張することはありませんでした。嫌な相手に対しても礼儀正しかった。彼女はよく話を聞き、人の話を真剣に聞いていました。」

「友人として、彼女はいつも自分のことを最後に考えていました。大騒ぎすることもなく、気取ることもなく、自慢できることはたくさんあったのに、少しも傲慢ところがありませんでした。彼女は拷問者の手の中で死んでいたかもしれません！ 彼女は信じられないほど勇敢でした！ いつもです！」。

元議員はさらに「ネリアは、すればできたのに決して要求することはありませんでした。リーダーとして、また多くの人々が尊敬するアイコンとして、すべては彼女から他の人々へのお願いでした。実際、私は彼女が声を荒らげたり、人に対して醜い発言をしたりするのを聞いたことがありません。私がそのような発言をしたとき、彼女は何とか私を落ち着かせ、私が自分の発言を後悔することもありました」と語っている。

ニッキーは、ネリアと過ごした時間を「学び、気づき、理解し、強化し、さらにその言葉を広めようと決意した時間」と考えている。「彼女には、私が決してできなかったであろうことを説明する方法がありました。彼女は自分が選んだ仕事にぴったりの女性でした。彼女は威厳と効果をもって素晴らしい仕事をしました。ネリアは必要最低限のことしかしませんでした。必要以上のことはしないということは私にとっては難しいことでした。何かそれ以上のものができれば、それはすべて「お祝いの理由」になりました。彼女は必ず心から感謝し、感謝の気持ちを伝えました。



ピンクの服を着た元気なネリア（アンナ・レア・サラビアによる写真の複写）

彼女は次のようにも語っている。ネリアの態度は「世界は彼女に何の借りもないというものでした。それは、まったく違う、もっと楽な道を選ぶこともできた人に見られる、とんでもなく稀有な資質です。彼女は自分が運動に貢献できたからといって、それ以上の価値がある人間だとは決して考えていませんでした。ストレス、苦難、不自由、批評家からの厳しい言葉にもかかわらず、ネリアは自分の立場を貫いたのです」。

シスター・メアリージョンは、イデオロギー的な傾向にもかかわらず、ネリアが信仰を持っていることを示す他の特質を見出した。「私は彼女に『宗教的な側面』を見ることはありませんでした。しかし、私は彼女が貧しい人たち、周縁化された人たち、虐げられた人たちに心を寄せ、逮捕され投獄されることもいとわず、その人たちのために私心なく行動する慈愛に満ちた女性であることを知っていました。彼女はまた、冷静さ、穏やかさ、優しさといったオーラを持っていました。社会問題や政治問題についての集会での彼女の熱弁を聞くまでは、誰も彼女が活動家だとは思わないでしょう。私にとって、これは宗教性とは異なるスピリチュアリティです」。

フェニーもネリアが深い信仰心を持っていることに気づいていた。「私は彼女の人生で最も困難な時期、幼児と乳児のシングル・ペアレントでありながら、家計を支えるために懸命に働いていた時期に彼女に出会いました。彼女は常に宗教セクターと非常に密接な関係にあった。PAI を始めとする私たちの活動において、彼女は常に勤勉で進歩的な修道女を採用していた。彼女は修道女たちと心から打ち解けていた。価値観や信条を共有していたからだ」。

彼女は、ネリアが「思慮深い友人であり、私のことを気遣ってくれる同志」であることに気づいていた。「彼女はいつも、私がかたくやっていると尋ねてくれた。彼女は辛抱強く物事を説明し、模範を示して指導してくれた。彼女は何時間でも働き続けることができたが、一緒にくつろぐことも知っていた。彼女は温かく優しい人だった」。

ミラベルは記事や本を読んだり、女性リーダーの話の聞いたりして、まだ勉強中だった頃、ネリアのことをプロの活動家であり、女性の権利擁護者であると見ていた。「私が新参加者だったので、彼女は時間を割いて私と話し、問題や議論を説明するだけでなく、政治グループや勢力間の力学や、私たちが一緒に出席するさまざまな国際的な場での異なる見解を共有してくれた」。

「ロラのさまざまな証言を詳細に記録する必要があり、私たちはさまざまな証言を入手し、検証し、吟味しましたが、彼女は慰安婦に接するときは、辛抱強く、注意深く耳を傾けながら、彼女たちの主張や話の矛盾点を慎重に見つけました」。

シスター・メアリージョンとネリアは12歳離れていたもので、「同世代のような友人というわけではありませんでした。しかし、私たちは互いに仲良く活動し、同じ情熱や、困窮し、搾取され、虐げられている人々への思いやりを分かち合うという意味では友人でした。そして私たちはお互いに正直で率直でした。ネリアの弱点のひとつは、個人的なものであれ組織的なものであれ、会合に遅刻することです。一度だけ、彼女が私たちの全国会議に大遅刻したとき、私が『修道院では遅刻したら全員の前にひざまずくのよ』と冗談を言ったことがあります。彼女はただ申し訳なさそうに微笑みました」。

「同志として、私はこれほど献身的で、これほど集中し、これほどたゆまぬ努力を続け、新しいプロジェクトを立ち上げる勇気を持った女性を見たことがありません。彼女が始めた重要な運動のひとつに慰安婦問題があります。韓国に行ったとき、彼女は、占領していた日本軍に拉致され、日本兵に性的に奉仕するために強制連行された女性たちの話を聞きました。フィリピンも日本に占領されていたのだから、フィリピンにもそのような女性がいるはずだと彼女は考えましたが、当時はまだまったく表面化していませんでした。そこで彼女はガブリエラの事務局長として、同じことを強要された女性たちにラジオで呼びかけました。彼女たちはその呼びかけに応えました。最初に応えたのはロラ・ロサ・ヘンソンでした。そうして、慰安婦たちが自尊心を取り戻し、サバイバーであるだけでなく、提言者にもなったリラ・フィリピーナが誕生したのです」。

ネリアの死の報に接して、ニノチカは言った。「カーテンがまた少し幕を降ろした、と私は衝撃を受けた。私たちは近く旅立つだろう。この列島の輝かしい時代、つまり社会変革運動の最初の数十年が終わる。そしていつものように、同じ質問がよぎる。アルフィー、あれは結局何だったんだろう？ 長く苦しい闘いで、世界を変えることはできなかったとしても、それは私たちを変えたのだ」。

ニッキーは「悲しく、ひどい」と感じた。「彼女のような人はもっと報われてしかるべきだし、ただ大義に生きて尽くした後たった一人で死ぬべきではありませんでした。私たちは何年もの間、まったく連絡をとっていませんでした。私はそれを後悔しています。そしてまた、彼女はそのような人だったのです。彼女は多くのことをあきらめ、人々この国にすべてを捧げ、最期は誰にも迷惑をかけたくないと考えたのでしょう。私は大きな喪失感を感じました。彼女を知り、彼女から学ぶことができたのは名誉なことであり、特権でした。それは当時の学校では決して学べなかつただろうし、今の学校でも学べるものとは思いません。今の若者たちには、私たちに降りかかった呪いを解くために、私たちの国のためにどのように別の道を切り拓くのかを経験する機会がなく、ネリアが亡くなったことは大きな損失だと私は感じました」。

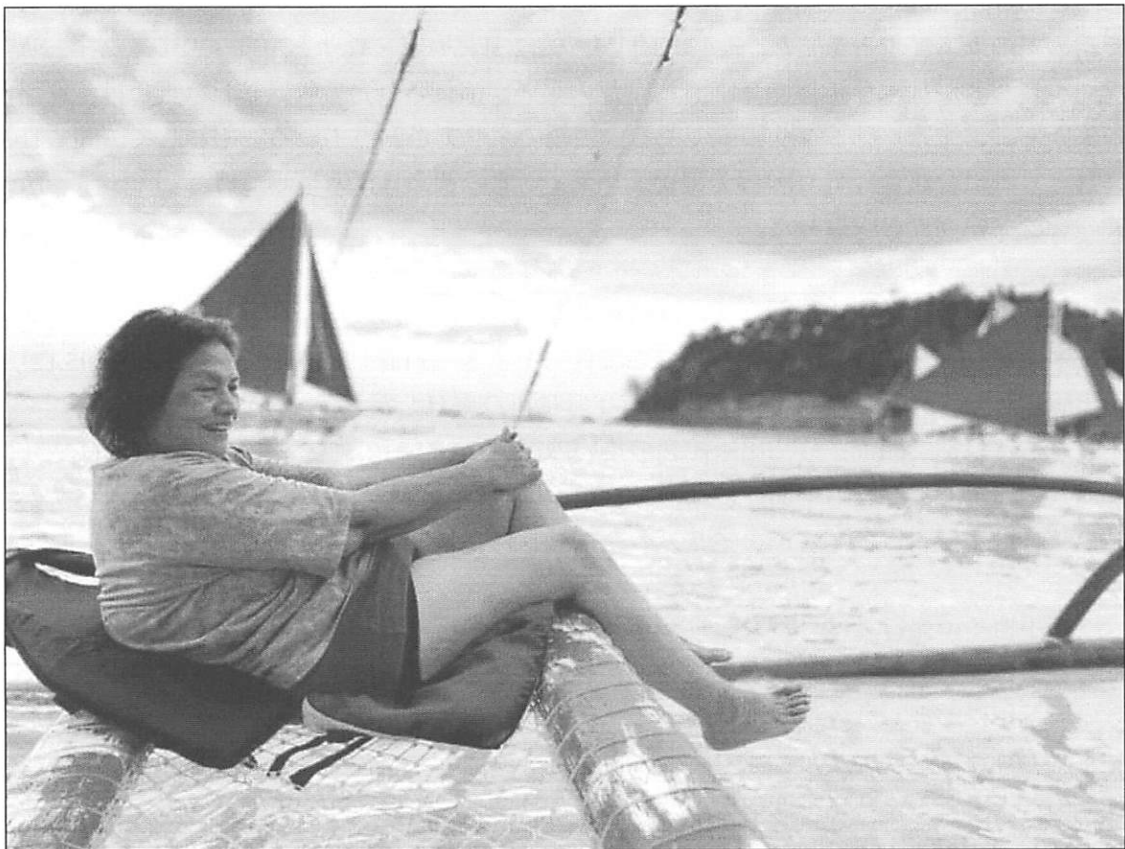
フェニーはネリアの71歳の誕生日にオンラインで挨拶したばかりだった。数日後、彼女は「ネリア・サンチョがブリスのアパートで亡くなっているのが発見された」というニュースを聞いてショックを受けた。「私はフィリピンの女性運動に多大な貢献をした、内面的にも外見的にも美しい人物を失ったことに悲しみを感じた。しかし、彼女が充実した人生、現代の若い女性たちにインスピレーションを与えることのできる有意義な人生を送ったことを私は知っている」。

リサもショックを受けていた。「彼女が長く糖尿病と闘っていたことは知っていましたが、あまりにも突然の死でした。彼女はまだまだ貢献できることがたくさんありましたが、彼女はもう私たちとは一緒にはいません。彼女の人生の物語が、ゴシップとしてではなく、真の美しさ、勇気、他者への奉仕の『物語』として、世代を超えて受け継がれていくことを願っています」。

ミラベルも同じように「誕生日の翌日に孤独死したことを知って、悲しみ、動揺した。彼女が糖尿病を患っていたこと、病気だったこと、カティクランに引退していたこと、しかしマニラに時々来ていたことは知っていた。結核を患って以来、家族と一緒に暮らした

がらなかったということで彼女が一人でいたことに私は混乱した。結核は治る病気であり、健康な人が自動的に結核になることはない。友人や同志たちは、結核になっても一人で暮らす必要はないことを誰も説明しなかった。彼女がひとりぼっちだったのは本当におかしなことだった。運動や左派からアイコンとして扱われてきた人物が孤独に死んでいったことに私は憤りを感じた」。

それでもフェニーは、ネリアが深い遺産を残したと感じている。「彼女の貢献は計り知れない。彼女はたゆまぬ努力を惜しまず、さまざまな面で新境地を切り開いた。彼女は人々を本当にうまく動員し、組織したと思う。それは彼女の貢献の大きさを倍増させている。彼女は、人生のさまざまな部分から人々を集め、うまく協力させることができた」。



リラックス（ネリアのフェイスブックのプロフィール写真より）

（翻訳：池田高巖、藤目ゆき）

ある日本軍「慰安婦」の回想・出版記念の集い・京都の記録(復刻)

ネリア・サンチョは、1992年にラジオを通じてフィリピン人「慰安婦」だった女性たちに呼びかけ、それに応じてマリア・ロサ・L・ヘンソンさん(ロラ・ロサ)がフィリピンで初めてのカムアウトをした。そして同じ年の12月にロラ・ロサとネリア、インダイ・サホルの3名が日本を訪れて、12日に京都の集いが開催された。収録した写真には、京都の集いで証言するロラ・ロサの隣で明るい笑顔のネリアが写っている。あわせて、同じ日に自立労働組合連合(ALUI)婦人部が、ロラ・ロサの初来日に連帯して持った労組事務所での交流会の写真も収録した。

この時に藤目ゆきがロラ・ロサに自伝を書くことを勧め、3年の執筆期間を挟んで『ある日本軍「慰安婦」の回想 フィリピンの現代史を生きて』(藤目ゆき訳、岩波書店、1995.12)が出版された。出版記念のために1996年1月に再び来日したロラ・ロサ、ネリア、インダイとともに京都で開催された出版記念の集いの記録を、ここにそのまま復刻して収録する。手作りの冊子で、写真も鮮明ではないが、この出版の経過と意義について、ロラ・ロサの話、藤目ゆきの報告とともに、ネリアの発言も収録されている。

この小冊子の発行人は「ロラ・ロサ絵画展企画準備会」である。ロラ・ロサが自伝を執筆しながら描いた数多くの絵を、訳者である藤目とともにALUI婦人部の人々が中心となって展示用に整理し、各地で展示会が行われた。

また、ロラ・ロサの2度の来日の間には、他のロラとの交流もあった。1993年7月に、ロラの一人であるマリア・サンティリアンさんが、支援組織TFFCWのリサ・マサとともに来日し、京都・大阪で証言集会を持っており、その時に行われたALUI婦人部との交流会の写真もあわせて収録した。

ロラ・ロサ(中央)を迎えての集いで、笑顔のネリア・サンチョさん(左) 1992年12月12日



ロラ・ロサ(中央)とインダイ・サホール(左)。自立労連婦人部との交流会で 1992年12月12日



元フィリピン人「慰安婦」マリア・サンティリアンさんと自立労連婦人部の交流 1993年7月



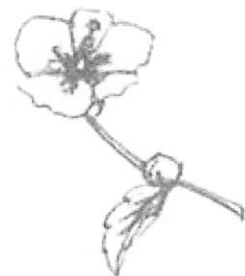
座っているマリア・サンティリアンさん(右)と、TFFCW のリサ・マサ(左) 1993年7月



ある日本軍「慰安婦」の回想
出版記念の集い・京都の記録



1996年1月29日
ウイングス京都（女性総合センター）



発行：ロラ・ロサ絵画展企画準備会



マリア・ロサ・L・ヘンソンさん

● 藤目ゆきさんとの出会い

私は、京都に来たのは今回で2回目になるんですけど、いちばんはじめにこちら京都に参りましたのが1992年の12月のことでした。その時京都での集会の前後に、今、私の横に座っておられる藤目ゆきさんからお話がありまして、ぜひ私の物語、経験したことを手紙でいいですから書き送ってくださいというふうな申し入れがありました。それを彼女は(学校)大学で教えていますので、その授業の一環としてでも使われるということで、その話を承諾しました。

● 3年かかった自伝の執筆

私はその時たしか12月9日に東京で行われました従軍慰安婦の裁判に関する公聴会に出席し、そしてその3日後の1

2月12日に京都に参りまして、その時も今日も一緒にいますネリア・サンチョとインダイ・サホールというリラ・ピリピナのメンバーとともにこちらに参りまして、集会で話をしたわけです。

それ以降、数回にわたってゆきさんと会うことができ、打合せをしてまいりました。たとえば、翌年の1993年の3月に1度お会いし、1993年の10月にも私が日本にまいりました時に、そこでの裁判闘争に対するミーティングへの出席のあいだに、ゆきさんとお会いし、大きな会議2回の間を通じてゆきさんと連絡、それから会いながらこの物語をまとめていったのです。

● 小作の祖父の話から書き始める

私は最初にお話があってフィリピンに

帰ったあと、すぐに私の物語を書き始めました。その最初の物語は、私のおじいさんのことについて書いていくことに決めました。と言いますのも、私のおじいさんは農夫です。田舎で小作人として土地を耕していたのですが、地主との関係で非常に苦勞をしております、当時の封建的な土地問題、社会システム、そういったものに苦しんでいました。そのおじいさんが土地から追い出されないようにするために、母親として、そのおじいさんの娘、私にとりましては母親にあたります、をも巻き込んで土地に縛りつけられる、そういった生活について書き始めたのでした。

●戦争で破壊された私の人生

私はそういった、土地に縛られたおじいさん、お母さん、両親のもとで育てられました。私は実は正式な夫婦の間の子どもではありません。私の母さんが地主にレイプされて、そして生まれた子どもです。それ以降、母親は私をなんとか学校へやらせ、勉強させようというので必死でした。しかし、私は勉強したんですが、すぐに戦争がやってまいりまして、そしてやむを得ず、そのなかで私は日本兵のレイプの対象とされたのです。私はフクバラハップというゲリラのメンバーとしても活動しておりました。その後、私は結婚したんですけれども、戦後間もなく私の夫と死に別れることになりました。それ以降、私は女手ひとつで子どもたちを育ててまいりました。

●奴隷の運命を越えて

しかし、その運命がガラリと変わったのが、1992年の6月30日のことでした。この日私は初めて、ラジオの中で戦争中、日本兵の従軍慰安婦にされた女性を探しているという放送が耳に入ってきました。かなり、迷いがあったんですが、それが私の一つの転機になりました。その後、私は講演などを重ねるうちに、今回このように藤目さんから出版の話が持ち上がりまして、今まで私の経験してきたことをひとつひとつ丹念に書き残していきました。

この物語を書くことで、そして物語ることによって、私は徐々に自分が自由になりつつある、自由になっているという実感がありました。ですが、具体的な訴訟問題につきましては、日本政府を相手に訴訟を行っているわけでありませけれども、日本の政府からはそれに対してまともな態度で臨んでいるようなことはないようです。

●沖縄の少女は私であり、私はあの少女である

私はこの闘争を続けながらそしてこの物語を書きながら、さまざまに自分が以前とは違った自由な考えを持つようになったと思います。例えば、最近沖縄で先程も話がありましたように、少女がレイプされるという事件がありました。私はその女の子、少女のニュースを聞いた時、彼女は私でもある、私は彼女でもあるというふうにすぐに感じる事ができました。やはり、私が経験したこと、そして今も現在、多くの場所で女性たちが

経験していること、というのが非常に共通する部分があるというふうに思います。ですから、私は改めてやはり、自分だけじゃなくって多くの人々と連帯しながら聞いていく必要があるというふうに思いました。

- 私の物語を若い人々に読んでほしい
幸いにも本に対しましては、藤目さんの努力のおかげで3年間ほどの時間でこのような本を完成することができました。私は非常に藤目さんにも感謝しておりますし、今回のこのようにその間私を支えてくださった方々に非常に感謝したいと思います。そして、この本が完成しました。ぜひとも多くの人に読んで頂きたいと思います。特に若い人々、たとえば学校で、教育機関で日本のこどもたちにもなんらかの形で伝わるような読まれ方をしてほしい、というふうに思います
それが今、私の感じていることがらです。どうもありがとうございました。



- おばあさんが孫に話すように
少し補足ということでお話したいんですけども、私が名乗り出てから今まで実にさまざまな多くのテレビやラジオのリポーターと呼ばれる人々、そして新聞記者の方、ライターの方、たくさんの方

が私に質問されました。ですが、それらの人々がする質問というのはほとんど同じ質問で、私が慰安所（コンフォート・ハウス）でどういう状態にあったか、何をされたのか、ということに質問が集中しました。実はこのゆきさん、藤目さんが初めて私に対してそういった物語だけではなくて、もっと違う面から私をめぐる物語として、そして私自身につながる両親、そしておじいさん、おばあさんの代からの物語を、おばあさんがお孫さんにお話するようなそういった視点で物語を書いてほしいというふうに言われました。このことが私をつき動かしたのです。

- 共に女性への暴力と闘いたいと願って
確かにこの本を書くにあたりまして、私は非常に恥ずかしい部分、秘密にしておくべきことを赤裸々に明かしました。やはり、自分のことだけではなくて、両親やおじいさん、おばあさんの恥ずかしい部分を明らかにしなければいけなかったということが非常に私にとっても大変なことでした。苦勞しました。ですから、夜、おもに私とその日の仕事を終えてからこの原稿を書きためたのですが、途中で非常に苦痛を覚え、涙することもしばしばでした。私の子どもも、実はこの物語、この本の内容を見て、非常にショックを受けたようでした。
なぜ、そのような恥に類するようなことを公にするのか、ということで子どもからも止められたこともあります。しかし、私はこの物語・私自身の物語というのは、私をおいて他にできる人はいない。

私しか、今、語れる人はいない、ということに一つの思いを寄せまして、そして最後まで書き上げることができたのでした。私はやはりこの戦争というものに対して、そしてそこで発生します、女性に対する暴力に対して強く闘っていきたい。そしてそれをみんなとともに闘っていきたいと思い、この本を書くことができたのです。

●支援に支えられて

ですが、私たち元従軍慰安婦にされたフィリピンの女性たちというのは、もう50年もたちまして、みんな年をとっています。私たちにさまざまな支援をしてくれるリラ・ピリピーナというグループのおかげで、我々、元従軍慰安婦の者たちは、毎日の生活をなんとかしのぐことができている。これらのグループは日本のみなさんのような支援をしてくださるグループからの支援を受けまして、我々おばあさんたちにお米の支援、例えば1カ月1kgのお米を配るであるとか、それからメディカル・カードと呼ばれる診療費を削減して安い診療費でみてもらえる、肩代わりしてもらえる、そういった制度もなんとか整ってまいったようです。

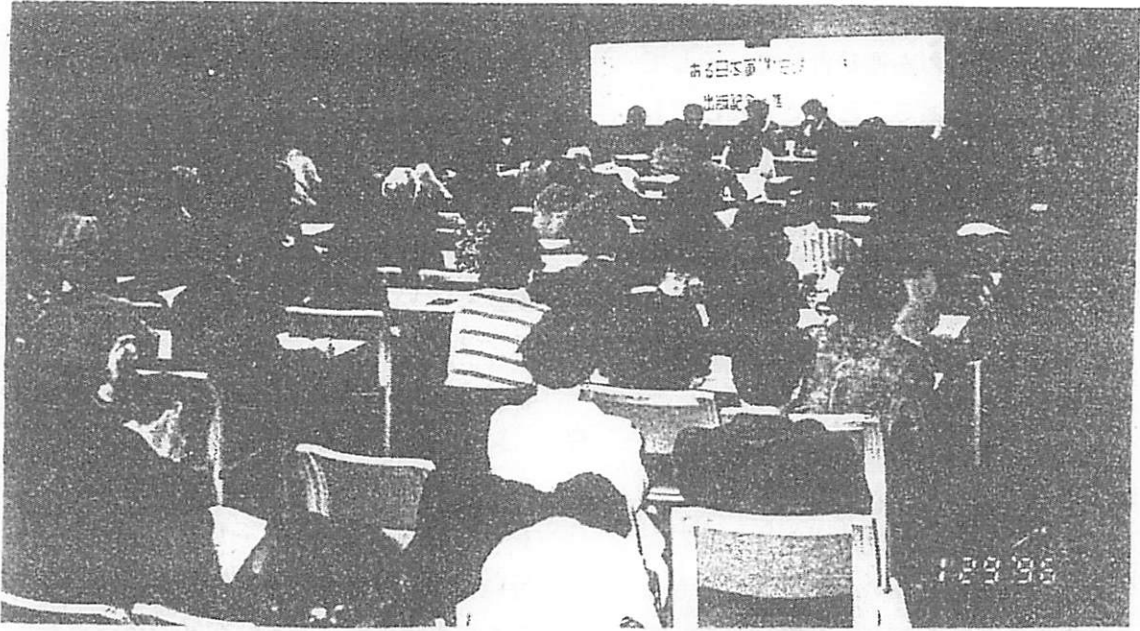
●フィリピン政府は何もしてくれない

しかし、実際問題として、フィリピンの政府は私たち被害者に対して、何も支援をしてくれません。公共の医療施設にしましても、私たちが体を悪くして診察に行きますと、並びなさい、他の人と同じように老若男女みなさん分け隔てなく

並びなさい、と言われます。しかし、私たちは非常に年をとっておりますし、体も弱っています。ですから、今こそそういった医療でありますとか、食糧の支援が迫っている、非常に必要としているおばあさんたちがいるということも事実です。

●日本政府への要請行動を続けたい

村山首相が先年フィリピンを訪れた時にも私たちは、日本の大使館の前で1994年8月9日にラリー（デモ行進）を行いました。そこで被害者および支援者みんなが集まりまして、日本の政府に対しても従軍慰安婦の問題に対して正面から対処してくれるよう頼みました。ですが、なかなか具体的な政府間の取決めやフィリピン政府による私たちに対する支援というのは全くない状態です。ですから、この日本のグループから特に送られてくる援助、それは医療費や普段の生活費、食料として私たちにもたらされるのですが、それを必要としている次第です。私はそういった支援もうけながらも同時に、今行っているさまざまな示威行動と言いますか、ラリー、自分たちの要求を受け入れてもらえるように、そのラリーは続けていきたいと思っています。どうもありがとうございました。



ニリア・サンチョさん

●歴史の事実を伝える文学作品

みなさんこんばんわ。私は、藤目さんの援助でロラの書かれた本の出版記念に出席できたことを非常に嬉しく思います。この出版というのは第二次世界大戦の生き残りとしての一従軍慰安婦の物語について書かれたということで、貴重で価値のあることです。私はこの本をたいへん高く評価したいと思います。この本は、従軍慰安婦の人々も含む戦時中被害を受けた人々の正義・名誉の回復につながるでしょう。

そしてもう一つ、50年前に起こった歴史を知る上でも一つの立派な文学作品であると思います。当時フィリピンにおいてどういうことが実際に行われたのか、特に日本軍によるフィリピンの人民に対する様々な行為、虐殺行為などを含め詳

しく正確に書かれていることが大切なことです。フィリピン人でも知らない人が多いのですが、この本を読むことによって、フィリピン人のみならず日本人も過去の歴史について正確な知識を得ることができる、それが大切なのです。

もう一度、今回の出版に努力されたユキさんに対して感謝したいと思います。私個人だけではなく私の属しているリラ・ピリピーナというグループ、そして戦時中の人々の正義を復活させるために運動している様々な市民グループの人々からも感謝の意を表したいと思います。特に今は、また軍国主義的な雰囲気というものが顕著になりつつある時代ですから、そういう中でこの自伝が貢献することは間違いないと思います。

●ロサの人生の意味するもの

この物語は、もちろん彼女自身ロラ・ロサの半生に焦点があてられているわけですが、それだけでなく彼女の生まれる前と戦後の部分が非常に大切であると思います。というのは、彼女の両親そして祖父母は、フィリピン社会に住む犠牲者でもありました。日本だけでなく日本以前にはアメリカの支配下にあったフィリピン、またそれ以前はスペインの支配下にあったフィリピンという、フィリピン社会の植民地化された歴史がこの著作の中にも現れているからです。もうひとつ大切なことはフィリピン社会における女性の位置や女性をめぐる問題、状況がよく判るということです。実は彼女の父親というのは地主でした。その地主が奉公にきた母親をレイプして産ませた子どもが彼女（ロラ・ロサ）でした。そして戦時中だけではなく戦後も含めた彼女をめぐるさまざまな男性からの暴力もはっきりとこの著作には書かれてあると思います。



私の属するリラ・ピリピナは、そもそもはフィリピン女性のための運動ということで始まりました。当初から元「従軍慰安婦」を発見し、そして彼女たちの記

録をとるということをやってまいりました。過去3年間の活動で現在169名の元従軍慰安婦のフィリピン女性を把握しております。そして私たちはこの記録とともにリラ・ピリピナとしてこの運動を一つのキャンペーンとして大きな力として盛り上げていくようにしていきたいと考えています。

●女性への暴力を許容する社会

このような元「従軍慰安婦」のおばあさんたちを巡る記録の調査をしています。私たちはいろいろな事実気づかされます。日本帝国軍による性的暴力＝レイプが一つの焦点になりますが、それ以外にも様々な形で戦時中でない時期に男性から暴力を受けたという女性の物語を聞かされる事が多々あります。一人だけ、ある従軍慰安婦のおばあさんの話をさせてほしいのですが——その人は現在精神が非常に不安定な状態にあるのですが——彼女の体験を聞いたときに私たちは大変びっくりしました。というのは、彼女がまだ少女だったころ、彼女は労働力として働かされていて、そのあいだじゅう何かあるごとに、彼女の父親やおじさんという年上の男性から暴力を何度も受けていました。そしてしばらくして成長した彼女はある男性から求愛されるのですが、それを断った彼女はその男性からレイプされるということがあった。そして日本の占領期時代に日本兵からもレイプされた。そしてまた解放後アメリカ兵が日本兵をフィリピンから追い出した時にも、彼女はリベレーター（解放者）と呼ばれたアメリカ兵からレイプされた。

そして彼女はその事（日本兵とアメリカ兵からのレイプを受けたこと）をフィリピン軍に言えば何とかしてくれるだろうと訴え出たところ、今度はそのフィリピン兵が彼女をレイプしようと試みたのでした。彼女が非常に容姿が美しかったということだけでこのような様々なレイプを受けたわけではありません。明らかに女性が「物」として扱われたこと、男性の力を受ける対象として女性が扱われているということを示していると思います。

このような暴力は、具体的なレイプにとどまらず様々な形で言葉の暴力として女性に影響を与えてきたということが明らかになってきました。元従軍慰安婦というのは日々こういう形での暴力を受けています。彼女たちが今強く求めていますのが、第1次的には日本政府の謝罪と補償です。日本政府からちゃんとした形でそれらをしてほしい。誠意を見せてほしいということがお婆さんたちの考えでもありますし、私たちリラ・ピリピーナの活動の主なターゲットでもあります。それと同時に私たちはこの運動を通じて多くの人々、たとえばそのおばあさんの家族たち、またおばあさんの住むコミュニティの人々に対して状況をもう少ししっかり把握してもらうための教育活動もしています。といいますのは、お婆さんが名乗り出るといことは家族にとっても苦痛を伴うことでもあるからです。

●「国民基金」の犯罪的役割

それと同時に、コミュニティに住むおばあさん（名乗り出たおばあさん）に対して様々な憶測が流れています。今

番問題となっているのは「国民基金」の問題です。

政府の指導で行われていますが お金 がもうじき支払われる、もしくは、すでに支払われたという噂が今コミュニティーでたくさん出回っています。お婆さんがもうすでにそういったお金を得ているとか、そのお金を得るために様々な活動を行っているという見られ方があります。そういうことに関して私たちは正確な情報（基金からお婆さんたちにそういったお金は一切渡っていないことなど）を家族の人々や地域の人々に与えるということ活動を一つの目標としているのです。

私たちの運動は、これらのお婆さんたちに対して様々な形で尊厳を復活させることを行っているのですが、それに対して様々な問題が立ちはだかっています。

一つは日本政府がこの問題に対して働こうとしないということ。そしてもう一つは日本が謝罪する補償するという以外にも、今現在フィリピンに対して日本の様々な搾取が続いているということがあげられると思います。今日本というのはフィリピンにおいて非常に大きな経済的な支配的な構造を作りあげていると思います。日本がフィリピンで多くの労働者に非常に大きな影響を与える。そして日本に様々なフィリピン労働者が入国し仕事を見つけ働くということになっているという状況があります。私たちは、このような状況を日本による経済的搾取と呼んでいます。この日本による搾取が改善されていない状況は、私たちにとっても大変危惧すべきことだと思います。

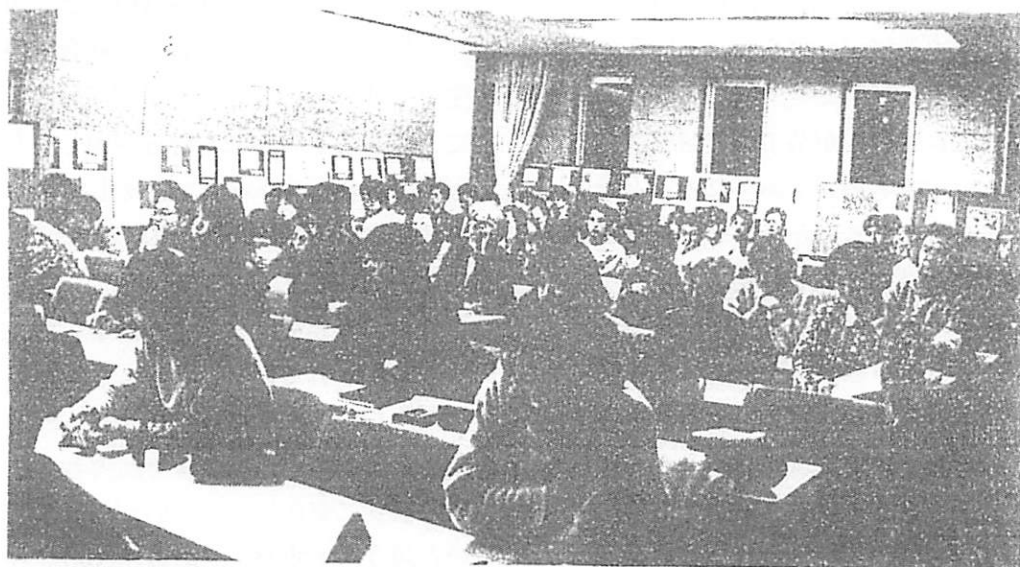
●たたかいは終わらない。

そしてもう一つ申し上げたいのは、ロラ（お婆さん）たちは経済的に非常に貧しい大変な状態のなか生きています。まさに「生き残る」という生活を送っています。ですから、今日本の民間基金を受け取るかどうかという問題はロラの判断に任せています。生き残るために民間基金を受け取ることは十分にあり得ることです。しかしその民間基金を受け取ったからといっておばあさんたちの運動や私たちの運動がストップするというものではありません。日本からの正式な謝罪や補償（本当の意味での補償）が果たされたときに初めて、私たちの運動の成果があったということになります。そしてそのことは今私たちの社会をめぐる日本のフィリピン経済支配とも深く結びついています。ですからその両方の面から見ていきたいと思っています。

私が先程申し上げましたが、従軍慰安婦の問題は非常に複雑な社会のシステムとも関係しております。私たちの組織リラ・ピリピーナとしては、民間基金に対

しては反対の立場を取っております。私たちの戦いというのは非常に困難を伴いますが、この挑戦を止めるわけにはいかないと思います。私たちはこの活動を通じて、何故女性がレイプされ続けるのか、そして何故戦争が今も続いているのかを見つめていきたいのです。日本とフィリピンのパートナーシップ、アメリカと日本の関係（パートナーシップ）は政治的経済的軍事的なつながりですが、このような関係もフィリピンに大変大きな役割を果たしております。それに付随して、沖縄に何故軍事基地が存在するのか。こういった見えにくい関係をもっと見ていくということが必要になっていると思います。戦争につながる見えざるもの、見えにくいものを明らかにしていくこと、その闘いを続けていきたいと思っています。ですからこの闘いは、日本政府から元従軍慰安婦の人たちに対して謝罪や補償がもしされたとしても続くものと思っています。

どうもありがとうございました。



||||| 藤目 ゆきさん

●フィリピンの女性解放運動とロラたちの立ち上がり私を勇気づけた

どうも本日は沢山の方においでいただいて本当にありがとうございます。

ロサさんが話をしている最中に、「これを書きながらだんだん自分が自由になってゆくように感じた」とおっしゃるのを聞いて、こみ上げるものがありまして、感慨深いのですが……。ロサさんもネリアさんもずいぶん私に感謝の言葉をいって下さって、そうしてもらって嬉しいのですが、私の側からすれば、一方的に支えたり助けたりしたという関係ではなかったと思っています。それは、何よりも私自身の世の中にこうあって欲しいとか、自分がこうありたいという「夢」というか「希望」というか、願いのようなものがあって、フィリピンにおける女性解放運動とロサさんの立ち上がり、それに続いたロラたちというのが本当に私を勇気づけてくれたということがあります。

しばしばロサさんが公の場で話をされたり、本の中でも書いておられることですが、名乗り出るきっかけになったラジオでの呼びかけについてお話します。ネリアさんやバヤン（新民族主義者同盟）というフィリピンの民族解放闘争の組織の女性たちが取り組んだのですが、そのラジオの呼びかけで、「恥ずかしがらないで立ち上がって下さい。戦時中の苦しい体験は、貴方の責任ではない。責任は

日本軍にあるのです。立ち上がり、貴方の権利のために闘って下さい」そういう呼びかけを聞いて先ずロサさんが立ち上がって、それに勇気づけられてどんどんロラたち——今では160人にもなっていると聞いています——が名乗りを上げてきたんです。そういうプロセスに私は何よりも感動したし、共感したし、私自身が激励されるものを感じるのです。

「恥ずかしがる必要はない。貴方が悪いのではない。責任があるのは貴方ではない、日本軍だ」というのは、当たり前なことなんです。慰安婦問題に充分認識や理解がある人にとっては当たり前のことと聞こえるでしょう。でも、実際にはそういうふうにならなかつたということが事実としてあるわけです。ほとんど100%のいわゆる慰安婦にされた女性たちというのは、それを自分の恥として、「人に言ってはならないこと、恥ずかしいこと」、それを言うと社会の中で生きてゆけないこと、として、汚名として、自分の心の中でも自分が卑しいものとして、自己卑下をして、そして隠して、生きてきたのが、戦後の半世紀であつたと思います。

ロサさんの場合、9ヵ月も監禁され、いつも脅かされていたというような形なわけだから、こんなにハッキリした暴力があるか、こんなにはっきり加害者は日本軍で彼女に責任はないというのは他にないと思うんですが、そのロサさんだっ

て自分自身を賣めてこられたということがあるわけです。

とくに慰安所からゲリラによって救出されてから、彼女はずうっと部屋の隅にうずくまるようにして暮らして、「どうして逃げなかったの」「だって殺されるかもしれないじゃないの」、それを孤独な疑問としてくり返すわけです。まるで逃げなかった自分に何か責任があるかのような、「だって殺されるかもしれないじゃないの」と逃げなかった理由を自分に言い聞かせるようにして生き延びてこられた。ロサさんにおいてさえそうなんです。

こういうふうな性暴力というのは、軍隊慰安婦だけでなくいろいろな形であるわけですが、性暴力の犠牲者の側があたかも自分が汚れてしまった、自分に責任がある、罪がある、恥ずかしい存在であると思わされるような社会というのは、いったい何なのか、それに私は激しい憤りを感じますし、そういう世の中でなくなしてほしい、そういう自分の強烈な思いがありまして、フィリピンの女性団体がこういう運動をしてくれたことにも、感謝をしているし、励まされたのです。そしてその呼びかけに応じてロサさんが名乗り出てくださいましたことがフィリピンでの状況を決定的に変えたんですけれど、それには、本当に感謝の気持ちで一杯なんです。そういうことが実際に起こりうるくらい、女たちの運動は実際に前進しているわけです。こういう実感が、自分自身が生きていく上での勇気づけというかインスピレーションでありつづけてました。私自身、非常勤講師という非常に不

安定な身分で、経済的にも社会的にもけっこう「シンドイナ」と思いながら、生活していたりするんですが、とくに女性史とか社会運動史とかいうような私のやっている分野というものは、なかなか現世利益につながらないということもあって、何のために自分はこんなことをしているんだろうと思うことがしばしばあったのですが、ロサさんとの3年間のお付き合いを通じて、何より私自身が多くのものを学ばせてもらったし、彼女に勇気づけられてきたんです。だから支援というのは、私が彼女たちにしたのではなくて、同時に彼女たちから私に、大きなものを与えてもらったと思っております。

●アジア侵略の歴史と

軍隊慰安婦制度

時間がないのですが、ぜひもう一つだけ言っておこうと思ったことがあります。それは自衛隊の問題であり、日米安保条約の問題なんです。性暴力について先程ひとしきり申しましたが、いったい性暴力というものが量においても質においてもどういう時に一番激しく、一番系統立って、一番暴力的に現れるのかといえは、それは事実として、軍隊・戦争であったと思います。私の場合日本近代史をやっているんですが、日本の近代史ははっきりいって日本のアジア侵略の歴史であったと言い換えてもいいような、アジア近隣への加害の歴史でもありました。このごろ50年戦争ということさえいわれるくらいで、昨年が戦後50年であっ

たのですけれども、その前の50年は何だったのかということ振り返ってみますと、1895年といえば、94年から95年が日清戦争ですから、日本のアジアへの侵略戦争が本格的に開始されて、そして台湾を植民地化し、それを足掛かりとしてどんどん軍国主義化していくという幕開けがすでに1895年だったろうと思います。それ以降の日本というのは、台湾に続いて朝鮮を、朝鮮につづいて満州を、満州に続いて中国全土を、そして東南アジアをとというふうに、どんどんアジアに対する侵略を拡大しているわけで、もちろんいつも戦火——鉄砲や大砲が飛び交っているわけではないにしても、軍事予算は増える一方だし、日本の軍隊が我が物顔にアジアに駐屯して、そして現地の女性たちの性をじゅうりんしていたということがあるわけです。そのプロセスで、日本の遊廓制度もものすごく発達したし、国内だけでなく、特に海外に侵略部隊として行った日本軍は、太平洋戦争になるまででも、無数のアジアの女たちの性をじゅうりんし、命さえも奪ってきたということがあると思うんです。こういった軍隊による女性の性奴隷化ということが、一番強力な形で、一番激しい形で、全面開花したのが、従軍慰安婦制度、太平洋戦争中の軍隊慰安婦制度であると思います。

●敗戦後、朝鮮戦争を背景に

復活した日本軍

そうして、そこで話が終われば、私は何もいうことはないわけですが、全然話

が終わらなかったじゃないかということ私を訴えたいのです。敗戦とともに日本帝国は分解して、旧日本軍は無くなったはずなんだけれども、朝鮮戦争を背景に敗戦からたちまちのうちに、日本軍は再建されました。自衛隊と名前についてはありますが、日本人は自衛隊というかもしれませんが、アジアの人々から見れば、あれは軍隊です。それははっきりしていることで、本当は日本人自身も知っていることです。また、同じく朝鮮戦争を背景に、日米安保条約が講和とともに結ばれ、米軍が日本に駐留する、日本と米國がパートナーシップを築くという関係ができました。ですから、さきほどロサさんが言われたように、沖縄の少女レイプ事件の話聞いた時に、彼女は、「その少女は、私でもある。私はその少女でもある」と感じた。で、また本の中にあるのですが、日本でPKO法が提出されたことによっていかに彼女が恐怖を感じたか、彼女自身、PKO法というものを口裏にして日本の自衛隊に二度とふたたびアジアに来てほしくないということを考えているんですけれども、そういうことに皆さんも関心を払って頂きたいと思うんです。彼女の書いた本の中の、とくに戦時中の体験というのが、昔の辛い話、昔あった不幸な出来事としてのみ受け取られるなら、もし認識がそこで止まるならば、それは物の半分であって、彼女自身は今生きていて、あの本を書いて、こうして話している。その彼女は日本の自衛隊が二度とアジア・海外へ出ていくことを望まないし、また在日米軍によって性をじゅうりんされた沖縄の少女への共

感を言っておられます。

私は彼女を引き合いに出す形で話してきましたけれども、私自身もそういうことを決してがまんできない。日米安保条約なんてものは一日も早く廃棄したいと思っているし、自衛隊などというものはそもそも始めから作るべきではなかったと私自身は思っております。

この本はロサさんの本なので、あとがきでも自分の考えは書かないように努め

たんですが、こういう機会を与えられて、皆さんが参加してくださってうれしくて、ついつい私の思っていることを言いたくなって、長い時間しゃべってしまいました。どうぞロサさんの本を読んでいただいて、他の人にも進めていただいで、私の希望・思いも心の片隅にでも置いておいていただけたら、こんなうれしいことはありません。どうも、みなさんありがとうございました。



●「沖縄と京都をむすぶ女たちの集い」への参加を！

松尾ようこさん

先程のロサさんのお話の中に、沖縄の少女のレイプ事件を聞いたときに「彼女は自分であり、自分は彼女だと感じた」とおっしゃいました。わたしも沖縄のレイプ事件を聞いたときにやっぱりこれは軍隊の慰安婦の問題と同じではないかと

思ったわけです。

先程から度々でておりますように性暴力というのはあらゆるところで絶えないんですけれども、やっぱり最も暴力の中にいる抑圧されている男たちによって性暴力がおこなわれる場合が多い、その最

たるものが軍隊であると思います。

私はそうした性暴力の話を知ると、いつも二重の苦しい思いをします。ひとつは性暴力の被害者である女性のほうに自分の心が行ってそれを加害する男たちに激しい怒りというものがあるわけです。同時にかつての戦争の中で加害する男たちと同じ国に生きてきた自分、しかも戦後50年間それに対してなんらの働きかけもできてこなかった自分というものに対する非常な自責の念というものがあるわけです。

軍隊慰安婦の問題もそうですし、今回の沖縄の少女の話を知ったときに50年間まるで植民地のように、日本のつらい

状況を沖縄の人たちに押しつけてきたとそういう思いが非常に強いわけです。

現在京都で沖縄の方たちに来ていただいて、いろんな集会が開かれていますけれども、私はどうしても一度は女性の手による集会を持ちたいと思ひまして周りの人に声をかけました。三月十六日沖縄の桑江テル子さんに来ていただいて沖縄の現状と沖縄の思いを語っていただく集会「沖縄と京都をむすぶ女たちの集い」をおこないます。もちろん、この集会には男の方々の参加も大歓迎です。特にぜひ、若い人たちにお話を聞いていただきたいと思っています。

あとがき

昨年、私たちは戦後50年目の節目の年として、日本政府が国の責任で、アジア太平洋戦争を侵略戦争として謝罪し、戦争犠牲者に対して補償をおこなうよう行動してきました。しかしながら侵略戦争賛美を主旨とする全国的な追悼決議要求運動を背景におよそ38の地方議会で追悼決議があげられ、衆議院での「50年決議」は国家としての戦争責任を回避することに終始しました。そのことを具体的に現したのが8月15日から発足した元日本軍「慰安婦」にたいする国民基金（民間募金）です。

私たちがやらなければならないことは国家の戦争責任をはっきりさせ、戦後補償の責任を労働者・市民に押し付けようとする国民基金を撤回させ、「慰安婦」たちへの謝罪と補償を実現させ、戦争犯罪の責任者処罰を実現していくことです。今年2月5日公表された国連人権委員会のクマラスワミ特別報告官の勧告はその全てを言い当てています。

ロサさんは沖縄の少女強姦事件に触れ、「沖縄の少女は私であり、私は沖縄の少女である」と述べられました。戦争状態になった時その質と量において性暴力が凶暴さを増すのはロサさんたち軍隊「慰安婦」が証明しています。在日米軍基地や日米安保の今日の問題にひきつけ—ある日本軍「慰安婦」の回想—と、このパンフレットが多くのおみなさんに読んでいただけたら幸いです。

アジア通信

昨年暮れに「ある日」本軍「慰安婦」の回想「海軍通信」と「ソマリ」の日本軍「慰安婦」(明石書店)という二冊の本が刊行された。

前書は、九二年九月にフィリピンで初めて元「慰安婦」であることを名乗ったロサ・ハンソンさんの回想録で、元「慰安婦」の聞き書きはすでに何冊が出ているが、元「慰安婦」自身が綴った自伝はこれが初めてである。

され、個人にならざるを得ない。そしてロサさんを生んで、女手一つで育てていく……という母親に代わった母親の歴史が書き綴られている。母性なのは、日本軍占領下で「慰安婦」をさせられていた時の体験だが、戦後結婚した夫に裏切られていくんたのも胸を打つ。

ロサさんには筆者も何度か会って断片的に話を聞いてくるほどノートもあるが、母親のことは本書で初めて知った。またあのれたものを追憶すると、ロサさん母親の体験やとおして母であつたフィリピン民衆の近現代史、戦後を生きてきた女性史となつていく。

読んでほしい「慰安婦」の回想録

「慰安婦」の証言集を越えた歴史を内閣に渡されたが、記されている内容は、ロサさん個人に固有のものではなく、おそろしく近現代を生きてきたフィリピン人の民衆の共通の記憶なのだ。そしてアジアの隣人たちの共通の記憶——歴史を知らな

との友邦・共生を語り、教えてきたところだ。半世紀を経てなると、過去の加害の克服ができていなく日本社会の根柢的なものもさがある。

たたかっているのか、各被害者の体験、運動に参加している元「慰安婦」・支援者の群像紹介など、多角的にこの騒動の背景を明らかにしようとしている。ロサさんの本が「慰安婦」の歴史を綴ったこと、歴史書とすれば、こちからは「慰安婦」体験を横に広げて検証を試みた記録である。併せて戦中と問題が立体的に把握できる。

本来ならば、日本政府が率先して行った本を編み、歴史の副読本として配布すべきである。ロサさんが名乗るの出てから三年余りがたつ。アジアの歴史の中で「慰安婦」問題は「何だったのかを一緒に考えよう」となってきた。

「慰安婦」の心知って

「なぜ逃げなかった」「だって殺される」

フィリピンのマリア・ロサ・ヘンソンさん(左)は一九九二年、女性グループのラジオでの呼びかけに応じて「慰安婦」であることを最初に名乗り出した。彼女が、日本の若い女性史研究者に促され、波乱に満ちた過去を書き下ろした本が「ある日本軍「慰安婦」の回想——フィリピンの現代史を生きて(岩波書店刊)」の題で刊行された。海を越えた三年がかりの交流がこの物語を生んだ。

彼女の執筆を手助けし、翻訳した大阪大非常勤講師 日本滞在中も綿密に日記をつ目ゆきさん(右)(京都市)は、けており、藤自さんは自伝を日本近現代史を専攻。「アジア」をくよくよに勧めた。

「フィリピンの著名な歴史学者が同国政府の請願に、同国には『慰安婦』制度はなかったと発言していた。彼は太平洋戦争の研究であり、文書研究はきちんとやっているはず。彼女たちの体験は書き記されていない。歴史、なのです」と藤自さん。

その年の暮れ、戦後措置に関する国際公聴会に出席するために初来日したヘンソンさんと会い、文通が始まった。ヘンソンさんは「慰安所」



ヘンソンさん(左)と藤自さん(右)マニラ首都圏のヘンソンさん宅で

比の女性、回想記刊行

京都の女性講師がサポート

から瀕死の状態で抗日ゲリラに救い出された。部屋の隅に隠れて泣きながら、「どうして逃げなかったの?」「だって殺されたかも……」と独りつぶやき続けたという。

「社会的に、忘れるべきこと、恥すべきこと、あるいは重大な事ではないとされ、彼女自身も自分でふたをしてき

た。それが、一筆に出てきた感でした。」
藤自さんは自分の母親や友人たちにもヘンソンさんの原稿を譲り、ヘンソンさんは書いて送り、ヘンソンさんは説明のためにペン画を描くようになった。四十歳の絵は、本の表紙に使われた。

「サポートさえあれば、どなたにもそういう力はあるはず。そのように引き出されるのを待っている女性の」へ。

14歳でレイプ／慰安所に9か月 日本軍の拷問／瀕死の状態で救出



ヘンソンさんが描いた自画像。現在の心境だという

に、日本軍の焼き打ち作戦計画を村人に教えて拷問を受ける。救出され、意識を取り戻したのは二か月後だった。

あらすじ

勉強が好きで医者になる夢を持つ少女だったマリア・ロサは十四歳の時、たきき探りに行つて日本の兵隊にレイプされる。抗日人民軍に参加し、トウモロコシの下に銃を隠して運ぶ途中、日本軍に捕らわれ、九か月間「慰安所」

に閉じ込められた。結婚するが、過去を打ち明けられず、夫の心は冷えていった。夫は非合法化されたゲリラに身を投じ、戦死。三人の子どもを育てながら、洗濯を七年間、たばこ工場で三十四年間働く。

半世紀の沈黙を破った彼女に勇氣づけられて、その後名

96, 1, 26 読売

乗り出た元「慰安婦」の数は百五十人を超えた。

「慰安婦の痛み」 自伝に

フィリピン人元従軍慰安婦のひとりが自伝を書いた。「ある日本軍「慰安婦」の回想—フィリピンの現代史を生きて」。日本人のために書き下ろした原稿が翻訳され、十五日に岩波書店から発行される。元慰安婦の証言をまとめたものはこれまでもあるが、元慰安婦自身が筆を執るのは珍しい。慰安婦時代の体験だけでなく、誕生から子ども時代、そして現在までの人生とその思いが克明につづられている。

「戦争の邪悪に目覚めて」 比女性執筆、15日に翻訳出版



マリア・ロサ・ヘンソンさん

筆者は、フィリピン人元慰安婦として、三年前に初めて名乗りを上げたマリア・ロサ・ルナ・ヘンソンさん(仮)。原題は「Beyond the Destiny of Slave (奴隷の運命を超えて)」で、英語で書かれている。きっかけは、東京・神田

で開かれた市民団体などの主催の国際公聴会で知り合った女性史研究家の藤目ゆきさん会との文通だ。昨年夏までに、便せんにびっしりと細かい字で書き込んだ原稿が五十四枚になった。藤目さんが翻訳をする一方で、この原稿をもとに、やりとりをして内容を深め、英文は今年十月に完成、翻訳も十一月初旬に終わった。

告白までの気持ちの揺れも

と。太平洋戦争が始まると、抗日人民軍のフクバラハツプの一員として活動したことで、日本軍兵士に強姦(ごかん)され、その後、九月の間、慰安婦とされたことなどが記されている。ヘンソンさんは、戦後、フィリピン人の夫との間に三人の子どもをもうけたが、夫は早く亡くなり、たばこ工場で働きながら三人を育てた。慰安婦だったことを告白するまでの気持ちの揺れと、告白後に受けた冷笑やあざけりも記されている。日本政府提唱の民間基金には反対の意思を明確にしている。ヘンソンさんは英語版、タガログ語版もフィリピンで出版したいと考えてい

1996年(平成8年)2月16日 金曜日

「比慰安婦」の本 出版相次ぐ

—補償請求訴訟原告の声—

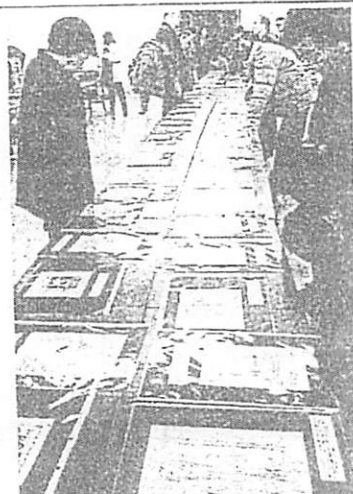
第二次世界大戦中、日本兵からの性的暴力を受けたフィリピン人従軍慰安婦をテーマにした本が相次いで出版され、話題になっている。東京都内では出版記念会が開かれ約二百人が参加したほか、大阪や京都でも集会が開かれた。



出版記念会で報告するフィリピン人元慰安婦のマリア・ロサ・L・ヘンソンさん

出版されたのは、「あるフィリピン人の自己伝記として日本軍『慰安婦』の回想」と「フィリピンの日本軍『慰安婦』」の二冊。いずれも後述で上手に話すが、日本政府に個人補償を求められないヘンソンさんは、東京地裁に訴えを起し、原告の証言が中心に収められている。「ある日本軍」を出版したのは、一九九二年九月にフィリピン人として初めて慰安婦だったと名乗り出したマリア・ロサ・L・ヘンソンさんだ。

十五歳の時に日本軍に捕まり慰安婦として虐待された被害の日々から、抗日ゲリラ活動に参加した経緯、貧乏だった祖父母、母親をレイプした地主の父親のことなどが記された、ヘンソンさん自身の歴史を知り、家三代の苦難の歴史を知り、沈黙破り被害実態を証言



東京都内で開かれた出版記念会の会場には、マリア・ロサ・L・ヘンソンさんが日本軍から受けた被害を回想して描いた約60点のスケッチが展示され、注目を集めた(東京都文京区)



出版された「ある日本軍『慰安婦』の回想」と「フィリピンの日本軍『慰安婦』」

「フィリピンの」は、従軍慰安婦の被害を受けた約十九人の被害者、同戦後補償請求訴訟原告にまつた証言、民間の被害者が語りつづけた朝鮮人、元慰安婦のケースと大きく異なる点がある。このほか、フィリピン人元慰安婦の被害実態を証言する井藤田が編集を手掛けた。フィリピン元慰安婦の被害実態を証言する井藤田が編集を手掛けた。フィリピン元慰安婦の被害実態を証言する井藤田が編集を手掛けた。

96.2.8 毎日



苦渋の自伝を刊行した
フィリピン元従軍慰安婦



マリヤ・ロサ・ヘンソンさん

第二次大戦中、日本軍によって「従軍慰安婦」となることを強いられた。その体験を語った自伝ある日本軍慰安婦の回想(岩波書店)を著した。

「医者になりたい」という夢は戦争によって断ち切られた。日本軍兵士にレイプされた怒りを持って、抗日人民軍に加わった。しかし、日本軍に捕らわれ、九カ月間、慰安婦としての生活を強制された。

戦後四十七年を経て、市民団体の要請で、フィリピン人では初めて慰安婦の体験を公の場で語った。「もちろんだってもしついでに話した。でもほかの同じような経験をした女性たちを助ますために」と脱得されて思い切った「語りながら」当時の光景が

(藤田 悟)

バサイ市生まれ。1992年、慰安婦の体験を証言。計18人で日本政府に正式謝罪と個人補償を求め、東京地裁で係争中。68歳。



「慰安婦」にさせられた人。

昨年、岩波書店からロサさんの自伝が出版された。この自伝の無きが京都で催された。

それを読んで、出版に尽力された藤田悟さん。この藤田先生は、やはり昨年十月出版された「花びらの」ならぬ女性生活史の編集者(さん)、執筆、監修にかかわって下さった方。私も元女性史のメンバーは誘い合わせて京都四条の「女性総合センター」に出かけたのである。

セミナー室に集まった人々の前でロサ・ヘンソンさんは話し出された。

五十年の沈黙を破って「慰安婦」である、と名乗り出さなければならぬのはラジオからの呼びかけであった。

「……恥ずかしがらないで。性的奴隷だったことはあなたの責任ではないのです。責任は日本軍にあるのです。あなた自身の権利のために立ち上がり闘って下さい……」。これ聞いたロサさんは全身に衝撃を受け、奥が

これは六十七歳のフィリピン女性の言葉である。マリヤ・ロサ・ヘンソンさんは日本軍

野口 英子

白くあったかのように感じた。という。ロサさんは生理も始まっていない十五歳の時、日本軍に捕まり慰安婦にされた。一日十二人二十人の兵隊にレイプされたという。毎週水曜日が検診日であったが、診察した後日本人医師がロサさんをレイプした、というからむごい話である。日本人としてはすかしく、つらいけれどこれは、すべて日本人に向けてつづられた書物としてある。

九カ月後、ゲリラによって慰安所から助け出されたが、日本軍将校の暴力で意識を失って二カ月後、ついに死んだ。

十七歳の時、フィリピン男性と結婚。二十五歳の時、人民解放軍に身を投じた夫が戦死、三人の子供のため煙草(たばこ)工場で働き育てあげた。

六十五歳の時から現在まで、日本政府の正式謝罪と個人補償を求めて東京地裁に提訴し、係争中である。戦争は特に弱者を痛め、それぞれの人生を崩壊させる。一つひとつとしたのはこの回想録を書く内、心の自由を取り戻した。とロサさんがいわれたことである。

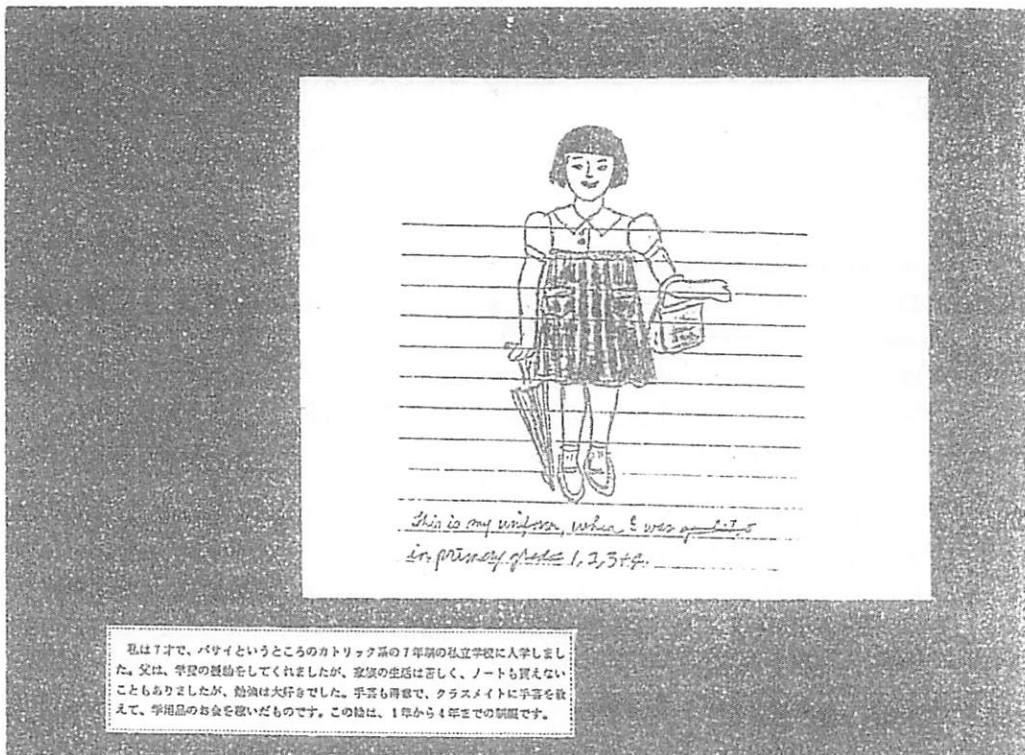
大森 新南 二月十四日 (生駒市、主婦・65歳)

「生きている間に語りたい」

—ある日本軍「慰安婦」の回想—

ロラ・ロサ絵画展企画準備会から 日本軍「慰安婦」問題に心を寄せる皆様へ

「ある日本軍『慰安婦』の回想」の執筆の過程でロラ・ロサ（ロサおばあさん）が描いた約50枚の挿絵があります。これまで、この本の出版とロラ・ロサをはじめとした元日本軍「慰安婦」のたたかいを支援してきた京都の女性たちが中心になって「ロラ・ロサ絵画展企画準備会」を作り、この絵に彩色して解説を加えたパネルに仕上げました。



アメリカの植民地だった時代に、土地を持たない貧しい農民だったおじいさん・おばあさんのこと、大地主にレイプされてロサさんを生んだお母さんのこと、ロサさん自身の楽しかった少女時代と、日本軍の侵略によって暗転したその後の人生、日本軍の占領時代と、日本軍とたたかったフィリピンの民衆の姿、夫や三人の子供のこと、苦しかった戦後の暮らし。これらが素朴な絵によって、ストレートに表現されています。

ロサという一人のフィリピン女性の人生は、日本軍によって性的奴隷にされた他の何万人ものアジアの女性の人生と重なっています。今、日本政府はまた同じ過ちをおかそうとしています。国民基金による見舞い金で元日本軍「慰安婦」への補償に代えるという、許すことのできないやり方で国の戦争責任を否定し、もう一方の手で今また日本軍（自衛隊）をアジアに世界に派兵しはじめているのです。だからこそ、ロサさんは訴えます。

「日本軍の性的奴隷の生き残りとして、私は、戦争と軍国主義がいかに女性の性的奴隷化とあらゆる戦争犠牲者への暴力をもたらすか、の生き証人の一人です。…私は平和な、フィリピンと日本人々の間に本当の友情がうまれる、新しい世界を夢見続けます。私は希望をもって楽天的です。日本の未来をになう今の、そして次の世代が日本の過去の歴史を正確に理解するでしょう。」（ある日本軍「慰安婦」の回想より）

貸し出しについて

(1) セット内容

絵画と写真 計60枚 (A3サイズ)

各々に解説が付いています。

(2) 貸し出しにあたってのご注意

- ・裏にある番号順に展示してください。
- ・展示にあたっては、パンチ穴を利用してピンで留めるか、両面テープで留めるようにしてください。

(3) 貸し出し料・送料についてのお願い

- ・貸し出し料 (一回) 3000円 (送料別)
- ・収益は、経費を差し引いたのち、日本軍「慰安婦」問題のキャンペーンのために活用することとしています。

ロサさんの願いは、他の多くのアジアの戦争犠牲者の願いであり、その子供や孫たちの願いです。私たちは、彼ら彼女らと日本の私たちが連帯していくための入口として、この絵画展を広く活用していただきたいと考えています。

パンフ発行にあたって

戦後50年という節目にあたる1995年年末、—ある日本軍「慰安婦」の回想—、サブタイトル—フィリピンの現代史を生きて—という本が岩波書店より出版されました。

この本の著者はフィリピンの元日本軍「慰安婦」として半世紀近く苦しみ抜いた末、1992年、フィリピンで最初に名乗りをあげたマリア・ロサ・L・ヘンソンさんです。ロサ・ヘンソンさんは、現在日本政府に謝罪と補償を求める裁判に係争中です。

ロサ・ヘンソンさんの来日の機会を得て、1996年1月29日、京都で出版記念の集いがロサ・ロサ絵画展企画準備会と賛同者、賛同団体の協力で開催されました。

出版記念の集い・京都には、著者のロサ・ヘンソンさんとネリア・サンチョさん（フィリピンで日本軍「慰安婦」のサポート団体リラ・ピリピーナ議長）、訳者の藤目ゆきさん（大阪外国語大学講師、女性史研究家）、以上3人の方々に出版にあたっての経過や思いを語っていただきました。このパンフレットはその時の記録をもとに構成したものです。

賛同人・団体／ 渡辺和子さん 谷口ひとみさん 松尾ようこさん 吉田満智子さん
立川さきさん 八島フジエさん タカラブネ労組女性部 JPM '90

ロラ・ロサ絵画展企画準備会

< 連絡先 >

● 京都

久世郡久御山町佐山37-1.

夕クラブネ労働会館2F

☎ 0774-43-8721

FAX 0774-44-3102

<カンパ 300円>

筆者&翻訳者 紹介(50音順)

◇池田高巖(いけだ・たかね)

翻訳業。『アジア現代女性史』各号に以下の翻訳。「日本軍占領期と独立革命期のインドネシア鉄道労働者」4号、2008。「戦争責任再訪：日本におけるのアウシュヴィッツ」5号、2009。「朝鮮！～兵士たちを帰還させる方法～」ほか、7号、2012。

◇今岡良子(いまおか・りょうこ)

大阪大学人文学研究科外国学専攻 准教授。モンゴル遊牧社会論 最近の研究テーマは、遊牧の原理と畜産物資源の物性が求める女性の手仕事や労働について。それが、モンゴルの遊牧文化を継承、発展させ、遊牧民でいながら遊牧家庭の女性の自立のすべとなってきたことについて。

◇鄭享玉(チョン・ヒャンオク)

中国・吉林大学を2020年6月に卒業。2020年10月に大阪大学人間科学研究科の研究生になり、2022年4月に同研究科修士課程に進学。藤目ゆき「冷戦体制形成期の女性運動」(日本語論文)の朝鮮語訳や金泰佑『冷戦の魔女たち』(朝鮮語図書)の日本語訳などで研究活動に参加。現在は「大韓民国臨時政府と朝鮮人女性の独立運動」をテーマにして修士論文を執筆中。

◇藤目ゆき(ふじめ・ゆき)

大阪大学教授。著書に、『性の歴史学—公娼制度・墮胎罪体制から売春防止法・優生保護法体制へ』(不二出版、1997年)、『女性史からみた岩国米軍基地—広島湾の軍事化と性暴力』(ひろしま女性学研究所、2010年)、『「慰安婦」問題の本質—公娼制度と日本人「慰安婦」の不可視化』(白澤社、2015年)、『占領軍被害の研究』(六花出版、2021年)、史料の編集復刻に『国連軍の犯罪—民衆・女性から見た朝鮮戦争』(不二出版、2000年)、『占領軍による人身被害調査資料』全六巻(六花出版、2021年)など。

◇李青凌(リ・チンリン)

中国「慰安婦」歴史博物館元館長助手(2017～2018)、上海師範大学「慰安婦」問題研究センター調査チームのメンバー(2019～現在)。「中国における新たな「慰安婦」資料の発掘—近年の文書史料・フィールドワークの事例から—」『アジア現代女性史』第14号(2021年3月、126～137頁)。

●カバー写真 解説

写真上 1992年12月 京都宇治の平等院にて
左からインダイ・サホール、ネリア・サンチヨ、M.R.L.ヘンソン、藤目ゆき

写真下 左 日本軍の暴力を告発した中国人女性・万愛花

中 朝鮮の民族独立運動家・丁七星

右 モンゴルの女性史家・D.パグマドラム

第十六号

2023年9月30日発行

ISSN 1880-1102

編集者—「アジア現代女性史」編集委員会

発行者—アジア現代女性史研究会（代表：藤目ゆき）

カバーデザイン—岩見利子

〒565-0871 大阪府吹田市山田丘1番2号

大阪大学人間科学研究科 藤目研究室気付

e-mail : fujime@hus.osaka-u.ac.jp

アジア現代女性史 (CAWA) ホームページ <http://cawa.jpn.org>

アジア現代女性史
2023 第16号

アジア現代女性史研究会

